

特266-459



1200501125588

特266

459

261

810



始







特 266  
459

楚 津  
連 禮  
楚 津  
連 禮  
楚 津  
連 禮  
楚 津

明治  
43.12.24  
内交



## 袖珍文庫發刊の主旨

明治の文明は漸く膚淺の境を脱せんとして居る。米を食ひ肉を食へば生きて居られると云陋劣な時代は去つて、書を以て靈を養はれば生きて居れぬと云向上の時代に入った。明治の文明が眞に輝くのはこれからである。

現下の讀書界は一方に泰西の奔放なる新思想を味ふと共に一方に自國の過去に於ける産物を新しき眼を以て窺ひつゝある。この後者の要求に應じてこゝ數年來盛んに古書の雕刻が起つた。祝すべくはあるが、その雕刻書はいづれも大冊で裝釘も立派である爲に高價であり、且つ大抵は豫約出版法を取るが爲に購讀が手軽く出来ぬのが缺陷である。

泰西にはカッセル、レグラム等云書肆があつて、どんな名著でも極めて簡素な小冊子にして極めて廉價に販賣する。屋根裏に住む貧書生でも自由にこれを



購讀し、紳士も携帶に便なるを喜んで旅行でもする際は必ずこれを袖にする。弊院が袖珍文庫を發刊するのは日本のカプセルとして立つたのである。古典と云はず輕文學といはず、雅といはず俗といはず、韻文といはず散文といはず過去の日本が産出したる文藝作物の一切はもとより、必ずしも本邦を範圍とせず漢籍中必讀のものをも選み、必ずしも文藝を範圍とせず經世修養其他の書をも選み、いづれも二十五錢均一の袖珍本に裝釘して、弘く讀書界に提供し、以て現下の缺陷を補はむとするのである。その假名漢字の鹽梅等に留意して現代の讀者諸彦に便した事、校訂を最嚴密にした事などはこの文庫の特色と自信する。

明治四十三年六月

三教書院主識

### 解題

徒然草は兼好法師の隨筆である。書いたのは、建武三年前後である。兼好の名はこの一篇の徒然草で永久不磨である。この書は敢て佛道にも孔孟にも老莊にも據らず、唯、自己の趣味性を唯一の標準として、心に映じた一切の事物を描寫し或は批判した所に特色がある。こゝに兼好の動かすべからざる個性が躍動して居る。この大膽なる自己標準は、彼の清少納言の枕の草紙に潑動された結果であらう。そも、徒然草を書かうと兼好が思立つたのが、枕の草紙を愛讀した結果であらうと推察される。徒然草は全然趣味眼を以て讀まねばならぬ。矛盾が到る處にある、色慾を獎勵してと思へば、忽ち之を戒めて居る、飲酒を大罪惡のやうに云つてゐるかと思へば、忽ち又酒の趣味を詳々と説いて居る、爰が面白いのである。又自然主義、デカダン、所謂新人の新思想と全く同傾向なものが、この大昔の坊主の筆端から迸つてゐるの注意して讀み給へ。爰に今日讀むと殊に面白い味



がある。

それ／＼草は芭蕉門の俳人乙州の隨筆である。それ／＼草と云書名は、徒然草に擬したのである。寶永元年の著である。特色は俚語を豊富に引きこなした所にある。文勢の極めてふつ／＼かな點は、一寸讀むと讀みづらいが、そこに一種の古びた妙味がある。この書は今では珍本の方である。

徒然草

徒然なる儘に、日ぐらし硯に向ひて、心に移り行くよしなしごとを、そこはかたなく書きつくれば、怪しうこそ物狂ほしけれ。

いでやこの世に生れては、願はしかるべき事こそ多かんめれ。帝の御位はいとまかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御有様は更なり、たゞ人も舍人など賜はる際はゆゝしと見ゆ。その子孫までは落魄れにたれど、なほ優美し。夫より下つ方は、程につけつし時に逢ひ、したり顔なるも、自らはいみじと思ふらめど、いと口惜し。法師ばかり羨ましからぬ者はあらし。人には木の端のやうに思はるゝよと、清少納言が書けるも、實にさることぞかし。勢猛に匂りたるにつけて、いみじとは見えず。増賀聖



の云けんやうに、名聞みやうもんぐるしく、佛の御教に違たがふらんとぞ覺ゆる。ひたぶるの世捨人よすてびとは、なか／＼あらまほしき方もありなん。人は容有かたち様の勝れたらんこそ有らまほしかるべけれ。物うち云ひたる、聞きにくからず、愛敬あまじやうありて同多からぬこそ飽かず向はまほしけれ。

めでたしと見る人の心劣りせらるゝ、本性見えんこそ口惜しかるべけれ。人な品容貌なこそ生れつきたらめ、心はなどか賢きより賢きにも移さば移らざらん。かたち心様よき人も、才ざえ無くなりぬれば、人品しなくだり、顔憎さげなる人にも立ち交りて、かけず氣壓けおさるゝこそ本意まゐなきわざなれ。ありたきことは、まことしき文ふみの道、作文和歌、管絃の道、また有職いゝそくに公事のかた、人の鑑かやみならんこそいみじかるべけれ。手など拙あやなからず走り書き、聲をかしくて拍子はつしとり、いたましうするものから、下戸げこならぬこそ男をとこはよけれ。

古への身みの御代の政をも忘れ、民の憂へ國の損はるゝをも知らず、萬に清ら

を盡つしていみじと思ひ、所狭せき様したる人こそ、うたて思ふところなく見ゆれ。衣冠いぐわんより馬車うまぐるまに至るまで、有るに隨ひて用ゐよ、美麗を求むる事勿れとぞ、九條殿ゆのかいの遺誠ゆいせいにも侍る。順徳院の禁中の事ども書かせ給へるにも、公の奉りものは、疎おろそかなるを以て善しとすこそ侍れ。

萬にいみじくとも、色好まざらん男をとこはいと寂々さうさくしく、玉の卮さかづきの底なき心地ぞすべき。露霜にしほたれて、所定めず惑ひありき、親の諫め、世の謗りをつゝむに心の暇なく、往あふさ來きるさに思ひ亂れ、さるは獨寢ひとりねがちに微睡まどろむ夜なきこそをかしけれ。さりとしてひたすら落たはれたる方にはあらで、女にたやすからず思はれんこそあらまほしかるべき業なれ。後の世の事心に忘れず、佛の道疎うとからぬ、心にくし。

不幸に憂に沈める人の、頭剃かしらおろしなど、ふつ／＼かに思ひ取りたるにはあらで、有るか無きかに門閉かし籠めて、待つ事もなく明し暮したる、さる方にあら



まほし。顯基中納言のいひけん、配所の月罪無くて見ん事、さも覚えぬべし。我身のやんごとなからんにも、まして數ならざらんにも、子と云ふもの無くてありなん。前の中書王、九條の太政大臣、花園の左大臣、皆族絶えん事を願ひ給へり。染殿の大臣も、子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれ給へるはわるきことなりとぞ、世繼の翁の物語には云へる。聖徳太子の御墓を豫れて築かせ給ひける時も、此處を切れ、彼處を斷て、子孫あらせじと思ふなり、と侍りけるとかや。

化し野の露消ゆる時なく、鳥部山の烟立ちさらでのみ住み果つる習ひならば、いかに物のあはれも無からん。世は定めなきこそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。蜻蛉の夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年を暮らす程だにも、此上無う長閑けしや。飽かず惜しと思はれ、千年を過すとも、一夜の夢の心地こそせめ。住み果てぬ世に、醜き

姿を待ち得て何かはせん。命長ければ耻多し、長くとも四十に足らぬ程にて、死なんこそ目安かるべけれ。その程過ぎぬれば、形を愧づる心もなく、人に出て交らばん事を思ひ、夕の日に子孫を愛し、榮行く末を見ん迄の命をあらまし、ひたすら世を食ふ心のみ深く、物のあはれも知らずなりゆくなんあさましき。世の人の心惑はす事色欲には如かず、人の心は愚なるもの哉。匂などは假のものなるに、暫く衣裳に薰物すと知りながら、得ならぬ匂ひには必ず心ときめきするものなり。久米の仙人の、物洗ふ女の脛の白きを見て通を失ひけんは、まことに手足膚などの清らに肥え膏付きたらんは、外の色ならればさもあらんかし。

女は髪をめてたからんこそ、人の目立つべかんめれ。人の程心ばへなどは、物うち言ひたる氣情にこそ物越しにも知らるれ。事に觸れて、うちあるさまにも、人の心を惑はし、凡て女の打解けたる寝も寝ず、身を惜しとも思ひ足らず、



堪ふべくもあらぬ業にもよく堪へ忍ぶは、たゞ色を思ふが故なり。まことに愛着ちやくの道その根深く源遠し。六塵じゆんの樂欲多しと雖、皆厭離えんりしつべし。其の中に只彼の惑まじひの一つ止め難きのみぞ、老いたるも若きも、智あるも愚なるも、戀る所なしとぞ見ゆる。されば女の髮筋かみすぢを纏よれる綱には、大象だいざうもよく繫がれ、女の履はける足駄あしだにて作れる笛には、秋の鹿必ず寄るとぞ言ひ傳へ侍る。自ら戒めて、恐るべく慎むべきは此の惑ひなり。

家居いへの似合つきあしくあらまほしきこそ、假の宿りとは思へど興あるものなれ。よき人の長閑のれいかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も一際ひきしみくくと見ゆるぞかし。今めかしく綺麗きれいならねど、木立ち物古ものふるりて、故意わざとならぬ庭の草も心ある様に、簞すのこ子すい、透すい土いのたよりをかしく、うちある調度も昔覺えて、安らかなるこそ心にくしと見ゆれ。多くの工匠たみの心を盡して磨きたて、唐土からの日本やまとの珍らしく、えならぬ調度ども並べ置き、前栽の草木まで心の儘ならず作りなせる

は、見る目も苦しくいとわびし。さてもやげ長らへ住むべき。また時の間の烟ともなりなんとぞ、うち見るよりも思はるゝ。大方は家居いへにこそ、事ざまは推し量はからるれ。後徳大寺の大臣しんてんの、寢殿しんてんに煮居させじとて繩を張られたりけるを、西行が見て、煮の居たらん何かは苦しかるべき、この殿の御心さばかりにこそ、とて、その後は參らざりけると聞き侍るに、綾の小路の宮のおはします小坂殿こさかどのの棟いっに、何時いつぞや繩を引かれたりしかば、彼の例思たのしひ出でられ侍りしに、まことやからすの群れ居て、池の蛙を取りければ、御覽みじ悲しませ給ひてなん、と人の語りしこそ、さてはいみじくこそと覺えしか。徳大寺にも如何なる故か侍りけん。

神無月の頃、栗栖野くりすのと云ふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、遙なる苔の細道を踏み分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるゝかけひのしづく雫しづくならでは、つゆ音おとなふものなし。関伽あかだな棚たなに菊紅葉など折り散らしたる、



流石に住む人の在ればなるべし。斯くてもあられけるよと、あはれに見る程に、彼方の庭に大なる相木の木の、枝も挽になりたるが、周りを厳しく圍ひたりしこそ、少し事醒めて、この木なからましかばと覚えしか。

同じ心ならん人と、しめやかに物語りして、をかしき事も世の果敢なき事も、裏なくいひ慰まんこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、露遣はざらんと對ひ居たらんは、獨りある心地やせん。互に言はんほどの事をば、實にと聞く甲斐あるものから、聊か違ふ所もあらんこそ、我はさやは思ふ、など争ひ惡み、然るからさぞ、ともうち語らば、つれづれ慰まめと思へど、實には少し嘆つ方も、我と等しからざらん人は、大方のよしなしごと云はん程こそあらめ。實やか心の友には、遙に隔たる所ありぬべきぞ付しきや。

獨り燈火の下に文を展げて、見ぬ世の人を友とするこそ、此上無う慰む業なれ。文は文選のあはれなる卷々、白氏文集、老子のことば、南華の篇、この園

の博士どもの書ける物も、古へのはあはれなる事多かり。

和歌こそ猶をかしきものなれ。あやしのしづ山殿の仕業も、言ひ出づれば面白く、恐ろしき猪も、臥猪の床といへば優しくなりぬ。この頃の歌は、一節をかしく言ひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに如何にぞや。言葉の外にあはれに氣色覺ゆるはなし。貫之が、糸によるものならなくに、といへるは、古今集の中の歌屑とかや言ひ傳へたれど、今の世の人の詠みぬべきことがらとは見えぬ。その世の歌には、委詞此の類のみ多し。この歌に限りて、斯く言ひ立てられたるも知り難し。源氏物語には、物とはなしに、とぞ書ける。新古今には、残る松さへ峯に寂しき、といへる歌をぞ云ふなるは、誠にすこし碎けたる姿にもや見ゆらん。されどこの歌も、衆議判の時よろしき由沙汰ありて、後にも殊更らに感じ、仰せ下されける由、家長が日記には書けり。歌の道のみ古へに變らぬなどいふ事もあれど、不知や、今も詠みあへる同じ詞、



歌枕も、昔の人の詠めるは更に同じ物にあらず。安くすなほにして、姿も清げにあはれも深く見ゆ。梁塵秘抄の郢曲の詞こそ、またあはれなる事は多かんめれ。昔の人は、たゞ如何にいひ捨てたる言種も皆いみじく聞ゆるにや。

いづくにもあれ、暫し旅立ちたるこそ目醒むる心地すれ。其わたり此處彼處見歩き、田舎びたる所山里などは、いと目馴れぬ事のみぞ多かる。都へ便り求めて文遣る、その事かの事便宜に忘るな、など言ひ遣るこそをかしかれ。左様の所にてこそ、萬に心遣ひせらるれ。持てる調度迄善きはよく、能ある人も常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺社などに忍びて籠りたるもをかし。

神樂こそなまめかしく面白けれ。大方物の音には笛箏、常に聞きたきは琵琶和琴。

山寺にかき籠りて、佛に仕うまつるこそ、つれなくもなく、心の濁りも清まる心地すれ。

人は己をつゞまやかにし、奢りを退けて財を持たず、世を食らざらんぞいみじかるべき。昔より賢き人の富めるは稀なり。唐土に許由と言ひつる人は、更に身に随へる貯へもなく、水をも手してさへけて飲みけるを見て、瓢箪と云ふ物を人の得させたりければ、ある時木の枝に懸けたりければ、風に吹かれて鳴りけるを、喧がましとて捨てつ。又手にむすびてぞ水も飲みける。いかばかり心の中涼しかりけん。孫農は冬月に衾なくて、藁一束ありけるを、夕にはこれに臥し、朝には納めけり。唐土の人は、是をいみじと思へばこそ、記しとどめて世にも傳へけめ。これ等の人は語りも傳ふべからず。

折節の移り變るこそ物毎にあはれなれ。物のあはれは秋こそまされと、人ごとに言ふめれど、それもさるものにて、今一際心も浮き立つものは、春の景色にこそあんめれ。鳥の聲なども殊の外に春めきて、長閑やかなる日影に垣根の草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞み渡りて、花もやろく、氣色立つ程こそあ



れ。折しも雨風打ち續きて、心あわだしく散り過ぎぬ。青葉になり行くまで、萬に唯心をのみぞ惱ます。花橋は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、古への事も立ち返り戀しう思ひ出でらる。山吹の清げに、藤のおぼつかなき様したる、總て思ひ捨て難きこと多し。酒佛の頃祭の頃、若葉の梢涼しげに繁り行く程こそ、世の哀も人の戀しさも優れと、人の仰せられしこそ實にさるものなれ。五月萬蒲葺く頃、早苗とる頃、水鶏の叩くなど心細からぬかほ。六月の頃賤しき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓ま<sup>みなイキばらへ</sup>たをかし。七夕祭るこそなまめかしけれ。やうく夜寒になる程、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づく程、早稻田刈り乾すなど、取り集めたる事は秋のみぞ多かる。又野分の朝こそをかしけれ。言ひ續くれば、みな源氏物語、枕草紙などに事古りにたれど、同じ事又今更に言はじともあらず。おぼしき事言ぬは腹ふくる業なれば、筆に任せつゝ味氣なきすさびにて、掻い破り棄つべきもの

なれば、人の見るべきにもあらず。さて冬枯の景色こそ秋にはをさく劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散り止まりて、霜いと白う置ける朝、遺水より烟の立つこそをかしけれ。年の暮れ果て、人毎に急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。荒涼じきものにして、見る人も無き月の寒けく澄める、二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞ、あはれにやんごとなき公事ども繁く、春の準備に取り重ねて、催し行はる様ぞいみじきや。追儼より四方拜に續くこそ面白けれ。晦日の夜いたう暗きに、松明ども點して、夜半過ぐる迄人の門叩き走り歩いて、何事にかあらん、事々しく匂りて、足を空に惑ふが、曉方より流石に、音無くなりぬこそ、年の名残も心細けれ。亡人の來る夜とて魂祭る業は、此頃都には無きを、東の方には猶爲る事にてありしこそあはれなりしか。斯くて明け行く空の景色、昨日に變りたりとは見えれど、引きかへ珍らしき心地ぞする。大路の様松立て渡して、花やかに嬉しげなるこそ又



あはれなれ。

なにがし 某とかや云ひし世捨人の此の世のほだし持らぬ身に、只空の名残のみぞ惜しきと言ひしこそ、誠にさも覚えぬべけれ。

萬の事は月見るにこそ慰むものなれ。或人の月ばかり面白きものはあらじと言ひしに、又一人、露こそあはれなれと争ひしこそをかしけれ。折に觸れば何かはあはれならざらん。月花は更なり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて清く流るゝ水の景色こそ、時をも分かずめでたけれ。沅湘日夜東に流れ去る、愁人の爲に住まること少時もせず、と云へる詩を見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も山澤に遊びて、魚鳥を見れば心樂むといへり。人遠く水草清き所に彷徨ひ歩きたるばかり、心慰む事はあらじ。

何事も古き世のみぞ慕はしき。今様は無下に卑しくこそなり行くめれ。かの木の道の工匠の作れる美しき器も、古代の姿こそをかしと見ゆれ。文の詞

などぞ、昔の反古どもはいみじき。只云ふ詞も、口惜しうこそなりもて行くなれ。古へは、車もたげよ、火か上げよ、とこそいひしを、今様の人は、持てあげよ、かきあげよといふ。主殿寮の人数だてといふべきを、たちあかししろくせよ、といひ、最勝講の御聽聞所なるをば、御講の座とこそ云ふべきを、かうろといふ、口惜しとぞ古き人の仰せられし。衰へたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有様こそ、世づかずめでたきものなれ。露臺、朝餉、何殿、何門などは、いみじとも聞ゆべし。あやしの所にもありぬべき小部、小板敷、高遣戸などもめでたくこそ聞ゆれ。陣に夜の設けせよ、と云ふこそいみじけれ。夜の御殿をば、搔燈疾うよなどいふ又めでたし。上卿の陣にて事行へる様は更なり、諸司の下人共のしたり顔に慣れたるもをかし。さばかり寒き夜もすがら、此處彼處に睡り居たるこそをかしけれ。内侍所の御鈴の音は、めでたく優なる物なりとぞ、徳大寺の太政大臣は仰せられける。



齋宮の野宮におはします有様こそ、優しく面白き事の限とは覚えしか。經、  
佛など忌みて、申子、染紙などいふなるもをかし。すべて神の社こそ捨て難く  
なまめかしきものなれや。物古りたる森の景色もたゞならぬに、玉垣し渡して、  
櫛に木綿懸けたるなどいみじからぬかは。殊にをかしきは、伊勢、加茂、春  
日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原野、松の尾、梅の宮。  
飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、樂しび悲しび行交ひて  
花やかなりし邊も、人住まぬ野らとなり、變らぬ住家は人改りぬ。桃李物云は  
れば誰と共に昔を語らん、況して見ぬ古へのやんごとなかりけん跡のみぞい  
と果敢なき。京極殿、法成寺など見るこそ、心ざしとゞまり事變じにける様は  
あはれなれ。御堂殿の作り磨かせ給ひて、庄園多く寄せられ、我が御族のみ御門  
の御後見、世の固めにて、行末迄と思し置きし時、如何ならん世にも斯ばかり榎  
せ果てんとは思してんや。大門金堂など近く迄ありしかど、正和の頃南門は饒

けぬ。金堂は其の後倒れ伏したる儘にて、取り立つる業もなし。無量壽院ばかり  
りぞ其のかたとて残りたる。丈六の佛九體、いと尊くて並びおはします。行成  
大納言の額、兼行が書ける扉、鮮やかに見ゆるぞあはれなる。法花堂なども未  
だ侍るめり。これも又いつまでかあらん。かばかりの名残だになき所々は、  
自から礎ばかり残るもあれど、定かに知れる人もなし。されば萬に見ざらん  
世迄を、思ひおきてんこそ果敢なかるべけれ。

風も吹きあへず移らふ人の心の花に、馴れにし年月を思へば、あはれと聞き  
し言の葉毎に忘れぬものから、我世の外になり行く習ひこそ、亡人の別れより  
も勝りて悲しきものなれ。されば白き糸の染まん事を悲しび、道の衢の分れん  
事を歎く人もありけんかし。堀川、院の百首の歌の中に、昔見し妹が垣根は荒に  
けり茅花まじりの葦のみして。寂しき景色、さること侍りけん。

御國讓りの節會行はれて、劍、璽、内侍所、渡し奉らるゝ程こそ限りならん



細けれ。新院のおり居させ給ひての春詠ませ給ひけるとかや。殿守の伴の御奴  
よそにして拂はぬ庭に花ぞ散りしく。今の世の事繁きに紛れて、院には参る人  
も無きぞ寂しげなる。斯る折にぞ、人の心も顯はれぬべき。

諒闇りやうあんの年ばかりあはれなる事はあらじ。倚廬いろうの御所の様など、板敷いたじきをさげ、  
葦あしの御簾みすだを懸けて、布の帽額もかうあらしく、御調度おろそども疎かに、皆人の装束、  
太刀平緒たちひらなまで、異様ことやうなるぞゆゝしき。

静に思へば、萬に過ぎにし方の戀しさのみぞせん方なき。人静まりて後、永  
き夜のすさびに、何となき具足取りしたため、残し置かじと思ふ反古やなど破り  
捨つる中に、亡き人の手習ひ、繪書きすさびたる、見出でたるこそ、只其の折  
の心地すれ。此頃ある人の文だに久しくなりて、如何なる折何時いつの年なりけん  
と思ふはあはれなるぞかし。手馴れし具足なども、心も無くてかはらず久し  
き、いと悲し。

人の亡き後あとばかり悲しきはなし。中陰のほど、山里などにうつろひて、便惡たより  
しく狭き所に數多あまたあひ居て、後の業ども營みあへる、心あわたし。日數の早  
く過ぐる程ぞ物にも似ぬ。果ての日はいと情なさけなう、互に云ふ事もなく、我賢げ  
に物ひきしたため、散々ちりちりに行き分れぬ。もとの住家すまかに歸りてぞ、更に悲しき事  
は多かるべき。しかるの事はあなかしこ、跡の爲忌むなる事ぞ、などいへ  
るこそ、かばかりの中に何かはと人の心はなほ憂うれたて覺ゆれ、年月経ても、つ  
ゆ忘るゝにはあらねど、去る者は日々に疎しと云へる事なれば、きは云へど、其  
の際きはばかりは覺えぬにや。よしなし事言ひて打ちも笑ひぬ。骸からは氣疎けうとき山の中  
に納めて、さるべき日ばかり詣でつゝ見れば、程なく卒都婆そとばも苦むし、木の葉  
降り埋みて、夕の嵐夜の月のみぞ、言問ふよすがなりける。思ひ出でし忍ぶ人  
あらん程こそあらめ、其そもまた程なく失せて、聞き傳ふるばかりの末々はあは  
れとや思ふ。さるは跡問ふ業も絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず。



年々の春の草のみぞ、心あらん人はあはれと見るべきを、果ては嵐に咽びし松も、千歳を待たで薪に摧かれ、古き墳は鋤かれて田となりぬ。その形だに無くなりぬるぞ悲しき。

雪の面白う降りたりし朝、人の許いふべきことありて、文をやるとて、雪の事は何とも云はざりし返事に、この雪いかゞ見る、と一筆宣はせぬ程の、ひがくしからん人の、仰せらるゝ事聞き入るべきかは、かへすく口惜しき御心なりと、云ひたりしこそをかしかりしか。今は亡き人なれば、かばかりの事も忘れ難し。

九月二十日の頃、ある人に誘はれ奉りて、明くる迄月見歩く事侍りしに、思し出づる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露繁きに、わざとならぬ匂しめやかにうち薫りて、忍びたる氣情いと物あはれなり。よき程にて出で給ひぬれど、猶事さまの優に覺えて、物の隠れより暫し見居たるに、妻戸を

今少し押しあけて、月見るけしきなり。頓て駈け籠らましかば口惜しからまし。あとまで見る人ありとは如何てか知らん。斯様の事は只朝夕の心づかひによるべし。其の人程なく亡せにけりと聞き侍りし。

今の内裏造り出されて、有職の人々に見せられけるに、何處も難なしとて、既に遷幸の日近くなりけるに、玄輝門院御覽じて、閑院殿の櫛形の穴は圓く縁も無くてぞありしと仰せられける、いみじかりけり。是れば葉の入りて、木にて縁をしたりければ、誤りにて直されにけり。

甲香は、法螺貝のやうなるが、小さくて口の程の細長にして出でたる貝の蓋なり。武藏の國金澤といふ浦にありしを、所の者は、へなたり、と申し侍るとぞ云ひし。

手のわるき人の、憚らず文書き散らすはよし。見苦しとて人に書かするはうるさし。



久しく音づれぬ頃、いかばかり恨むらんと、我が怠り思ひ知られて、言葉なき心地するに、女の方より、仕丁しちやうやある、一人、など言ひおこせたるこそ、有難く嬉しけれ。さる心様こころさましたる人ぞよきと、人の申し侍りし、さもあるべき事なり。

朝夕隔てなく馴れたる人の、ともある時に、我に心を置き引き繕へる様に見ゆるこそ、今更斯くやは、など云ふ人もありぬべけれど、猶實じゆじつにくしく、よき人哉とぞ覺ゆる。疎き人の打ち解けたる事などいひたる、又よしと思ひつきぬべし。

名利みやうりに使はれて、静かなる暇なく、一生を苦むるこそ愚かなれ。財多たからければ身を守るに貧まだし。害を買ひ煩を招く媒なかたちなり。身の後には金かねをして北斗を支ふとも、人の爲にぞ煩はるべき。愚なる人の目を悦ばしむる樂しび、また味氣あぢきなし。大なる車、肥えたる馬、金玉の飾りも、心あらん人はうたて愚なりとぞ

見るべき。金は山に捨て、玉は淵に投ぐべし。利に惑ふは勝すぐれて愚なる人なり。埋うづもれぬ名を、永き世に残さんこそあらまほしかるべけれ。位高くやんとなきをしも、勝れたる人とやは云ふべき。愚に拙ちがき人も、家に生れ時にあへば、高位に昇り奢りを極むるもあり。いみじかりし賢人聖人、自ら卑しき位に居り、時に遇はずして止みぬるまた多し。ひとへに高き官位つかさくらゐを望むも、次に愚かなり。智慧と心こそ、世に勝れたる譽うたれも残さまほしきを、つらく思へば、譽を愛するは人の聞きを喜ぶなり。譽むる人毀る人共に世に留まらず。傳へ聞かん人またく速はやに去るべし。誰をか恥ぢ誰にか知られんことを願はん。譽ほまれは又毀この因なり。身の後の名残りて更に益なし。それを願ふも次に愚なり。但し強ひて智を求め、賢を願ふ人の爲に云はゞ、智慧出でれば偽いつはりあり。才能は煩惱ぼんのうの増長せるなり。傳へて聞き、學びて知るは、まことの智にあらず、如何なるをか智といふべき。不可ふかは一條なり、如何なるをか善と云ふ。まこと



の人には智もなく徳もなく、功もなく、名もなし。誰か知り誰か傳へん。これ徳を隠し愚を守るにあらず、もとより賢愚得失の境に居らざればなり。迷の心を持ちて、名利の要を求むるに斯の如し。萬事は皆非なり、云ふに足らず。願ふに足らず。或人法然上人に、念佛の時睡に侵されて、行を怠り侍る事、如何してこの障りを止め侍らんと申しければ、目の覺めたらん程、念佛し給へと答へられたりける、いと尊かりけり。また往生は、一定と思へば一定、不定と思へば不定なりと言はれけり。これも尊し。又疑ひながらも、念佛すれば往生すとも言はれけり。これも亦尊し。

因幡の國に、何の入道とかや云ふ者の女、容美しと聞きて、人数多言ひわたりけれども、この女只栗をのみ食ひて、更に米の類を食はざりければ、かゝる異様のもの人に見ゆべきに非ずとて、親許さゞりけり。

五月五日賀茂の競馬を見侍りしに、車の前に雜人立ち隔てし見えざりしか

ば、各々下りて埒の際に寄りたれど、殊に人多く立ちこみて分け入りぬべきやうもなし。かゝる折に、向ひなる樗の木に法師の登りて、木の叉に跪居て物見あり。取り付きながらいたう眠りて、墮ちぬべき時に目を覺す事度々なり。これを見る人嘲りあざみて、世の痴者かな、斯く危き枝の上にて安き心ありて眠らんよといふに、我心にふと思ひし儘に、我等が生死の到來只今にもやあらん、それを忘れて物見て目を暮す、愚なる事は猶勝りたるものと言ひたれば、前なる人共、まことに左にこそ候ひけれ、尤も愚に候ふといひて、皆後を見かへりて、此處へ入らせ給へとて、所を去りて呼び入れ侍りにき。斯程の理、誰かは思ひ寄らざらんなれども、折柄の思ひかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人木石にあらねば、時に取りて物に感ずる事なきにあらず。

唐橋中將といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師する僧ありけり。氣のあがる病ありて、年のやうく長くる程に、鼻の中塞がりて、息も出て難



かりければ、様々に繕ひけれど、煩はしくなりて、目眉額なども腫れまどひて、うち覆ひければ、物も見えず、二の舞の面のやうに見えけるが、只恐しく鬼の顔になりて、目は頂の方に付き、額のほど鼻になりなどして、後は坊のうちの人も見えず籠り居て、年久しくありて、猶煩はしくなりて死にけり。かゝる病もあることにこそありけれ。

春の暮つ方、長閑に艶なる空に、賤しからぬ家の奥深く、木立物古りて、庭に散り萎れたる花見過し難きを、さし入りて見れば、南面の格子皆下して寂しげなるに、東に向きて妻戸のよき程にあきたる、御簾の破れより見れば、親好げなる男の年二十ばかりにて打ち解けたれど、心悪く、長閑やかなる様して、机の上に書を繰り廣げて見居たり。如何なる人なりけん、尋ね聞かまほし。

あやしの竹の編戸のうちより、いと若き男の、月影に色あひ判かならねど、艶やかなる狩衣に濃き指貫、いと由緒づきたる様にて、細やかなる童一人を具し

て、遙なる田の中の細道を、稻葉の露に濡ちつゝ分け行く程、笛をえならず吹きすさびたる、あはれと聞き知るべき人もあらずと思ふに、行かん方知らまほしくて、見送りつゝ行けば、笛を吹き止みて、山の際に總門のあるうちに入りぬ。榻に立てたる車の見ゆるも、常よりは目留まる心地して、下人に問へば、しかくくの宮のおはします頃に、御佛事などさぶらふにやと云ふ。御堂の方に法師ども参りたり。夜寒の風に誘はれ来る。空薰物の匂も身に沁む心地す。寢殿より御堂の廊に通ふ女房の、追風用意など、人目無き山里とも云はず心づかひしたり。心の儘に繁れる秋の野らは、置き餘る露に埋もれて、虫の音恨言がましく、遣水の音長閑やかなり。都の空よりは雲の往來も早き心地して、月の晴れ曇ること定め難し。

公世の二位の兄に、良覺僧正と聞えしは、極めて腹悪しき人なりけり。坊の傍に大なる榎ありければ、人、榎の僧正とぞ云ひける。この名然るべからずと



て、かの木を切られにけり。その根のありければ、切杭きりぐみの僧正と言ひけり。いよく腹立ちだて、切杭を捌り捨てたりければ、その跡大なる堀にてありければ、堀池ほりいりの僧正とぞ言ひける。

柳原の邊に、強盜法印と號する僧ありけり。度々強盜にあひたる故に、この名を付けにけるとぞ。

或人清水きよみづへ参りけるに、老いたる尼の行き連れたりけるが、道すがら、くさめくと言ひもて行きければ、尼御前ごぜ、何事を斯くは宣ふぞ、と問ひけれども、答へもせず、猶言ひ止まざりけるを、度々問はれてうち腹立ちて、やゝ、嘔はなびたる時、斯く禁厭まじなはれば死ぬるなりと申せば、養ひ君の、比叡の山に稚兒ちごにておはしますが、たゞ今も嘔び給はんと思へば、斯く申すぞかし、といひけり。有難き志なりけんかし。

光親卿、院の最勝講奉行して侍さむらひひけるを、御前へ召されて、供御ぐごを出だされ

て食はせられけり。物食ひ散らしたる衝重ついがさねを、御簾みすの中へさし入れて罷り出でにけり。女房、あな汚きたな、誰に取れとてか、など申し合はれければ、有職いっせきの振舞やんごとなき事なりと、返すく感ぜさせ給ひけるとぞ。

老來おいりて、始めて道を行ぎやうぜんと待つ事勿れ。古き墳多つかくは、これ少年の人なり。測はからざるに病を受けて、忽ちに此の世を去らんとする時にこそ、始めて過ぎぬる方の誤れる事は知らるなれ。誤りと云ふは他の事にあらず、速にすべき事を緩ゆるくし、緩くすべき事を急ぎて、過ぎにし事の悔くやしきなり。その時悔ゆとも甲斐あらんぞ。

人はたゞ無常の身に迫りぬる事を、心にひしと懸けて、束の間つかまも忘るまじきなり。さらばなどか此の世の濁も薄く、佛道を勉むる心も忠實まめやかならざらん。昔ありける聖ひじりは、人の來りて自他の要事をいふ時、答へて曰く、今火急の事ありて、既に朝夕に迫れり、とて、耳を塞ふたぎ念佛して、終に往生わうじやうを遂げたりと、禪



林の十因に侍り。心戒と云ひける聖は、餘りに此の世のかりそめなる事を思ひて、靜に跪居ける事だになく、常は蹲まりてのみぞありける。

應長の頃、伊勢の國より女の鬼になりたるを率て上りたりと云ふ事ありて、その頃二十日ばかり、日毎に、京白川の人、鬼見にとて出で惑ふ。昨日は西園寺に参りたりし、今日は院へ参るべし、只今は其處々々になど言ひあへり。正しく見たりといふ人もなく虚言といふ人もなし。上下たゞ鬼の事のみ言ひ止まず。其の頃、東山より、安居院の邊へ罷り侍りしに、四條より上さまの人、皆北を指して走る。一條室町に鬼あり、と匂りあへり。今出川の邊より見やれば、院の御棧敷の邊り、更に通り得べうもあらず立ち込みたり。早く跡なき事にはあらざんめりとて、人を遣りて見するに、大かた逢へる者なし。暮るゝ迄斯く立ち騒ぎて、果ては鬨諍起りて、あさましき事どもありけり。その頃おしなべて、二日三日人の病ふ事侍りしをぞ、彼の鬼の虚言は、この徴候を示すなりけり。

りと言ふ人も侍りし。

龜山殿の御池に、大井川の水を引入せられんとて、大井の土民に仰せて、水車を作らせられけり。多くの錢を賜ひて、數日に替み出だして掛けたりけるに、大方旋らざりければ、兎角直しけれども、終に旋らで徒らに立てりけり。さて宇治の里人を召して拵らへさせられければ、安らかに結びて参らせたりけるが、思ふやうに旋りて、水を汲み入るゝ事めでたかりけり。萬に其の道を知れる者は、やんごとなきものなり。

仁和寺に或る法師、年寄るまで石清水を拜まざりければ、心憂く覺えて或時思ひ立ちて、たゞ一人歩行詣でけり。極樂寺、高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて傍への人に逢ひて、年頃思ひつる事果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも参りたる人毎に山へ登りしは、何事かありけん、床しかりしかど、神へ参るゝこそ本意なれと思ひて、山迄は見ずとぞ



言ひける。少しの事にも、先達はあらまほしきことなり。

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名残りとして、各々遊ぶ事ありけるに、酔ひて興に入る餘り、傍らなる足鼎あしがなへを取りて頭に被かぎたれば、塞つまるやうにするを、鼻を押し平ひらめて、顔を差し入れて舞ひ出でたるに、満座興に入る事限りなし。暫かなし奏かなでて後援かんとするに、大方援かれず。酒宴事醒めて、如何いかはせんと惑ひけり。兎角すれば、首のまはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れ満ちて、息も塞つまりければ、うち割らんとすれど、容易たやすく割れず。響なきて堪へ難かりければ、かなはで爲すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子かたびらを打ち掛けて、手を引き杖をつかせて、京なる醫師くすしの許がりみ率りて行きける。道すがら、人の怪み見る事限りなし。醫師の許もとにさし入りて、對ひ居たりけん有様、さこそ異様ひやうなりけめ。物を言ふも、くゞもり聲に響きて聞えず。斯る事は文にも見えず、傳へたる教もなしと云へば、また仁和寺へ歸りて、親しき者老いたる母など、

枕上まくらの上により居て泣き悲めども、聞くらんとも覺えず。かゝる程に或者の云ふやうは、たとひ耳鼻こそ切れ失すとも命ばかりはなどか生きざらん。只力をたてし引き給へとて、鬘むらの帯しほをまはりに差し入れて、金かねを隔かてし、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺け穿うげながら援けにけり。辛き命儲けて、久しく病み居たりけり。

御室みむろにいみじき稚兒ちごのありけるを、いかで誘ひ出だして遊ばんと謀たくむ法師どもありて、能のうある遊び法師どもなど語らひて、風流の破籠わりこやうのもの、懇ろに營み出でし、箱風情はこぶどうの物に認め入れて、雙なればの岡の便たよりよき所に埋み置きて、紅葉散らしかけなど、思ひ寄らぬ様にして、御所へ参りて、稚兒ちごを咬かかし出でにけり。嬉しく思ひて、此處こゝ彼處あそこ遊あそび巡めぐりて、ありつる苔せきの庭にわに並み居て、いたうこそ困たうじにたれ、あはれ紅葉を焼たかん人もがな、臉しほあらん僧そうたち、祈り試みられよなど談合いひあひて、埋みつる木このもとに向きて、數珠ずしゆおし擦すり、印いんことごとく



しく結び出でなどして、苛甚く振舞ひて、木の葉を掻き除けたれど、つやく物も見えず。所の違ひたるにやとて、掘らぬ所もなく、山を求めども無かりけり。埋みけるを、人の見置きて、御所へ参りたる間に盗めるなりけり。法師ども言の葉なくて、聞憎く諍ひ腹立ちて歸りにけり。餘りに興あらんとする事は、必ず無興きものなり。

家の造りやうは夏を主とすべし。冬は如何なる所にも住まる。暑き頃悪ろき住居は堪へ難き事なり。深き水は涼しげなし。浅くて流れたる邊に涼し。細かなる物を見るに、遣戸は部の間よりも明し。天井の高きは冬寒く燈火暗し。造作は用なき所を造りたる、見るも面白く、萬の用にも立ちてよしとぞ、人の定めあひ侍りし。

久しく隔たりて逢ひたる人の、我が方にある事、數々に残りなく語り續くるこそあいなけれ。隔て無く馴れぬる人も、程經て見るは恥かしからぬかば。

次様の人は、白地に立ち出で、興ありつる事とて、息もつきあへず語り興ずるぞかし。よき人の物語するは、人數多あれど、一人に向きて云ふを自ら人も聽くにこそあれ。よからぬ人は誰ともなく數多の中にうち出で、見る事のやうに語りなせば、皆同じく笑ひのゝしる、いと亂がはし。をかしき事をいひても、いたく興ぜぬと、興なきことをいひても、よく笑ふにぞ、品の程量られぬべき。人の容姿の善し悪し、才ある人はその事など定めあへるに、おのが身に引きかけて言ひ出でたる、いと佗し。

人の語り出でたる歌物語の、歌の悪きこそ本意なけれ。少しその道知らん人は、いみじと思ひては語らじ。總ていとも知らぬ道の物語りしたる、傍聞きにくし。

道心あらば住む所にしもよらじ、家にあり人に交るとも、後世を願はんは難かるべきかといふは、更に後世知らぬ人なり。實にはこの世を果敢なみ、必



ず生死しやうじを出でんと思はんに、何の興ありてか朝夕君に仕へ、家を顧る營みのいさましからん。心は縁に引かれて移るものなれば、静ならでは道は行じ難し。其のうつはもの昔の人に及ばず、山林に入りても飢を助け、嵐を防ぐよすが便無くては、あらぬ業なれば、自ら世を食るに似たる事も便に觸ればなどか無からん。さればとて、背ける甲斐なし、左ばかりならば、なじかは捨てしなどいはんは、無下の事なり。流石に一度道に入りて、世を厭はん人、たとひ望ありとも、勢ある人の食欲多きに似るべからず。紙の衾、麻の衣、一鉢の設け、藥の羹、いくばくか人の費をなさん。求むる所は易く、その心早く足りぬべし。形に恥づる所もあれば、さはいへど悪には疎く、善には近づく事のみぞ多き。人と生れたらんしるしには、いかにもして世を通れん事こそあらまほしけれ。偏に食る事を努めて、菩提に赴かざらんは、萬の畜類に變る所あるまじくや。大事を思ひ立たん人は、さがりがたき心にかゝらん事の、本意を遂げずして、

さながら捨つべきなり。暫し此の事果て、同じくは彼の事沙汰し置きて、しかくかの事人の嘲りやあらん。行末難なく認め設けて、年頃もあればこそあれ、その事待たん程あらじ。物騒しからぬやうになど思はんに、得去らぬ事のみいと重なりて、事の盡くる限りもなく、思ひ立つ日もあるべからず。大概人を見るに、少し心ある際は、皆此の豫期にてぞ一期は過ぐめる。近き火などに逃ぐる人は、暫しとやいふ。身を助けんとすれば、恥をも顧みず、財をも捨て遁れ去るぞかし。命は人を待つものかは、無常の來る事は、水火の攻むるよりも速に遁れ難きものを、その時老いたる親、幼き子、君の恩、人の情、捨て難しとて捨てざらんや。

眞乘院に盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。芋魁といふ物を好みて多く食ひけり。談義の座にても、大なる鉢に堆高く盛りて、膝もとに置きつゝ、食ひながら書をも讀みけり。病ふ事あるには、七日二七日など療治とて



籠り居て、思ふやうによき芋魁を選びて、殊に多く食ひて、萬の病を癒しけり。人に食はする事なし、只一人のみぞ食ひける。極めて貧しかりけるに、師匠死にざまに、錢二百貫と坊一つを譲りたりけるを、坊を百貫に賣りて、かれこれ三萬疋を芋魁の錢と定めて、京なる人に預け置き、十貫づゝ取り寄せて、芋魁を乏しからず食しけるほどに、また異様にも用ゐる事なくて、その錢皆になりにけり。三百貫の物を貧しき身にまうけて、斯くはからひける、誠にありがたき道心者なりとぞ人申しける。この僧都或る法師を見て、しろうるりといふ名を付けたりけり。とは何物ぞと、人の問ひければ、さる物を我も知らず、若しあらましかば、此僧の顔に似てんとぞ言ひける。この僧都容美く力強く、大食にて、能書、學匠、辯説、人に勝れて、宗の法燈なれば、寺中にも重く思はれたりけれども、世を軽く思ひたる曲者にて、萬自由にして大方人に隨ふといふ事なし。出仕して饗膳などに着く時も、皆人の前据ゑ渡すを待たず、我前に据

ゑぬれば、頓て獨りうち食ひて、歸りたければ、獨りつい立ちて行きけり。時非時ときひじも人に等しく定めて食はず。我食ひたき時、夜中にも曉にも食ひて、睡たければ晝もかけ籠りて、如何なる大事あれども、人の云事聽き入れず。目覺めぬれば、幾夜も寝れず。心を澄まして嘯き歩きなど、尋常のつねならぬ様なれば、人に厭はれず、萬許されけり。徳の至れりけるにや。御産の時、甌落おとろす事は、定れる事にはあらず。御胞衣えな滯る時の禁厭まじなみなり。滯らせ給はればこの事なし。下さまより事起りて、させる本説なし。大原の里の甌かを召すなり。古き寶藏ほうざうの繪に、賤しき人の子産みたる所に、甌落したるを描きたり。

延政門院いよけな幼こくおはしましける時、院へ參る人に、御言傳ごごんづてとて申させ給ひける御歌、ふたつ文字牛の角文字直な文字曲み文字とぞ君は覺ゆる。こひしく思ひ參らせ給ふとなり。



後七日の阿闍梨、武者を集むる事、いつとかや盗人に逢ひにけり。宿直人とて斯くことしくしくなりけり。一年の相は此の修中の有様にこそ見ゆなれば、兵を用ゐんこと穩ならぬ事なり。

車の五緒は必ず人によらず。程につけて、極むる官位に至りぬれば、乗るものなりとぞ、或人仰せられし。

此頃の冠は、昔より遙に高くなりたるなり、とぞ或人仰せられし。古代の冠桶を持ちたる人は、はたをつぎて今は用ゐるなり。

岡本關白殿、盛なる紅梅の枝に鳥一雙を添へて、この枝につけて参らすべき由、御鷹飼下毛野武勝に仰せられたりけるに、花に鳥附くる術知り候はず、一枝に二つつくる事も存じ候はず、と申しければ、膳部に尋ねられ、人々に問はせ給ひて、又武勝に、さらば己れが思はん様に附けて参らせよ、と仰せられたりければ、花もなき梅の枝の一つを附けて参らせけり。武勝が申し侍りしは、

柴の枝、梅の枝、蕾みたると、散りたるとに附く。五葉などにも附く。枝の長さ七尺、或ひは六尺、かへし刀五分に切る、枝の半ばに鳥を附く。附くる枝踏まする枝あり。黒葛藤の割らぬにて二所附くべし。藤のさきは、火打羽の長けに比べて切りて、半の角のやうに搥むべし。初雪の朝枝を肩にかけて、中門よりふるまひて参る。大砌の石を傳ひて、雪に跡を付けて、雨覆の毛を少しかなぐり散らして、二棟の御所の高欄に寄せかく。祿を出ださるれば、一肩にかけて拜して退く。初雪といへども、春のはなの隠れぬ程の雪には参らず。雨覆の毛を散らす事は、鷹は弱腰を捕る事なれば、御鷹の捕りたる由なるべしと申しき。花に鳥つけずとは、如何なる故にありけん。長月ばかりに、梅のつくり枝に雉をつけて、君が爲にと折る花は時しも分かぬ、と云へる事、伊勢物語に見えたり。作花は苦しからぬにや。

賀茂の岩本、橋本は業平、實方なり。人の常に云ひ紛へ侍れば、一年参りた



りしに、老いたる宮司の過ぎしを呼び留めて尋ね侍りしに、實方は御手洗は影のうつりける所と侍れば、橋本やなほ水の近ければと覚え侍べる。吉水和尙、月をめで花をながめし古へのやさしき人はこゝにあり原、と詠み給ひけるは、岩本の社とこそ承り置き侍れど、おのれらよりは中々御存じなどもこそさぶらはめと、いと恭しく言ひたりしこそいみじく覚えしか。今出川の院の近衛とて、集どもにあまた入りたる人は、若かりける時常に百首の歌を詠みて、かの二つの社の御前に水にて書きて手向けられけり。誠にやんごとなき譽れありて、人の口にある歌多し。作文詩序などいみじく書く人なり。

筑紫に、なにがしの押領使など云ふやうなる者のありけるが、土大根を萬にいみじき薬とて、朝ごとに二つ宛焼きて食ひける事、年久しくなりぬ。或時館の内に人も無かりける隙を計りて、敵襲ひ來りて圍み責めけるに、館の内に兵二人出て來て、命を惜まず戦ひて、皆追ひ返へしてけり。いと不思議に

覚えて、日頃此處に物し給ふとも見ぬ人々の、戦ひし給ふは如何なる人ぞに問ひければ、年來頼みて、朝なく召しづる土大根らにさぶらふ、と言ひて失せにけり。深く信を致しぬれば、斯る徳もありけるにこそ。

書寫の上人は、法華讀誦の功積りて、六根淨に適へる人なりけり。旅の假屋に立ち入られけるに、豆の殻を焚きて、豆を煮ける音のつぶくと鳴るを聞き給ひければ、疎からぬ己れ等しも、怨めしく我をば煮て、辛き目を見するもの哉、と言ひけり。焚かるゝ豆殻のはらくと鳴る音は、わが心よりする事かは、焼かるゝは如何ばかり堪へ難けれども、力なき事なり、斯くな恨み給ひそ、とぞ聞えける。

元應の清暑堂の御遊に、玄上は失せにし頃、菊亭の大臣牧馬を弾じ給ひけるに、座に着きて先づ柱を探られたりければ、一つ落ちにけり。御懷に續飯を持ち給ひたるにて、附けられにければ、神供の參る程に、よく乾て事故無かりけ



り。如何なる意趣かありけん、物見ける衣被きのかつぎの寄りて放ちて、元のやうに置きたりけるとぞ。

名を聞くより、頓て面影は推し量らるゝ心地するを、見る時は、又かれて思ひつる儘の顔したる人こそ無けれ。昔物語を聞きてても、此頃の人の家のそこ程にてぞありけんと覚え、人も今見る人の中に思ひよそへらるゝは、誰も斯く覺ゆるにや。又如何なる折ぞ、只今人の云ふ事も、目に見ゆる物も、我心の内も斯る事の何時ぞやありしかと覺えて、何時とは思ひ出でれども、正しくありし心地のするは、我ばかり斯く思ふにや。

賤しげなるもの。居たるあたりに調度の多き。硯に筆の多き。持佛堂に佛の多き。前栽に石草木の多き。家のうちに子孫の多き。人に逢ひて詞の多き。願ねが文ぶんに作善さぜん多く書き載せたる。多くて見苦しからぬは、文車の文ぶん。塵塚ちりつかの塵。

世に語り傳ふる事、實まことは無興あいなきにや、多くは皆虚言そらごとなり。あるにも過ぎて人

は物を云ひなすに、況して年月過ぎ、境も隔たりぬれば、云ひたき儘に語りなして、筆にも書き留めぬれば、頓て定まりぬ。道々の物の上手のいみじき事など、頑かたくななる人のその道知らぬは、そらるに神の如くにいへども、道知れる人は更に信も起さず、音に聞くと見る時とは、何事も變るものなり。且つ顯はるゝをも願みず、口に任せていひ散らすは、頓て浮きたる事と聞ゆ。又我も眞まことしからずは思ひながら、人の云ひし儘に、鼻の程をどめきて云ふは、その人の虚言そらごとにはあらず。實じつにしく所々うちおぼめき、能く知らぬ由して、さりながら、つましく合せて語る虚言は恐しき事なり。吾がため面目あるやうにいばれぬる虚言は、人痛く諍あらがはず。皆人の興ずる虚言は、一人さも無かりしものかと言はんも、詮なくて聞き居たる程に、證人にさへなされて、いとゞ定りぬべし。兎にも角にもそら言多き世なり。只常にある珍らしからぬ事の儘に心得たらん、萬違よろづたがふべからず。下さまの人の物語りは、耳驚く事のみあり。善き人は



怪しき事を語らず。かくは云へど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは世俗の虚言を懇に信じたるも痴しく、よもあらずなと言ふも詮なければ、大方は實しくあひしうひて、偏に信ぜず、また疑ひ嘲るべからず。

蟻の如くに集りて、東西に急ぎ、南北に走る。高きあり、賤しきあり。老いたるあり、若きあり。行く所あり、歸る家あり。夕に寝て朝に起く。營む所何事ぞや。生を食り利を求めて止む時なし。身を養ひて何事をか待つ。期する處只老と死とにあり。其の來る事速にして、念々の間に止まらず。是を待つ間何の樂かあらん。惑へる者は是を恐れず。名利に溺れて先途の近き事を顧みねばなり。愚なる人はまた是を悲しぶ。常住ならん事を思ひて變化の理を知らねばなり。

つれなく佗ぶる人は、如何なる心ならん。紛るゝ方なく、唯一人あるのみ。

そよけれ。世に隨へば心外の塵に奪はれて惑ひ易く、人に交れば詞よその聞に隨ひてきながら心にあらず。人に戯れ物に争ひ、一度は怨み一度は喜ぶ、其の事定れる事なし。分別妄りに起りて得失止む時なし。惑の上に醉へり。醉の中に夢をなす。走りて忙はしく、惚れて忘れたる事、人皆斯くの如し。未だ誠の道を知らずとも、縁を離れて身を靜かにし、事に與らずして心を安くせんこそ、暫く樂ぶともいひべけれ。生活、人事、伎能、學問等の諸縁を止めよとこそ、摩訶止觀にも侍れ。

世の覺え花やかなるあたりに、嘆きも喜びもありて、人多く行き訪ふ中に、聖法師の交りて、云ひ入れ佇みたるこそ、さらずともと見ゆれ。さるべき故ありとも、法師は人に疎くてありなん。

世の中に其の頃人のもてあつかひぐさに言ひあへる事、いろふべきにはあらぬ人の、能く案内知りて、人にも語り聞かせ、問ひ聞きたるこそ受けられぬ。



殊に片ほとりなる聖法師などぞ、世の人の上はわが如く尋ね聞き、いかで斯ばかりは知りけん、覺ゆる迄ぞ云ひ散らすめる。

今様の事共の珍しきを、言ひ廣めもてなすこそ、又受けられぬ。世に事舊り

たる迄知らぬ人は心にくし。今更の人などの、ある時、こゝもとにいひつけた

る言種、物の名など心得たるどち、片端言ひ交はし、目見合せ笑ひなどして、

心知らぬ人に心得ず思はする事、世馴れず好からぬ人の必ずあることなり。

何事も入り立たぬ様したるぞよき。よき人は知りたる事とて、さのみ知り顔

にやはいふ。片田舎よりさし出でたる人こそ、萬の道に心得たる由の差し答へ

はすれ。されば世に恥しき方もあれど、自らもいみじと思へる氣色頑なり。

よく辨へたる道には必ず口重く、問はぬ限りは云はぬこそいみじけれ。

八毎に我身に疎き事をのみぞ好める。法師は兵の道を立て、夷は弓引く術

知らず。佛法知りたる氣色し、連歌し、管絃を嗜みあへり。されど愚なる己れ

が道よりは、なほ人に思ひ侮づられぬべし。法師のみにもあらず、上達部殿上人、上さま迄おしなべて、武を好む人多かり。百度戦ひて百度勝つとも、未だ武勇の名を定め難し。その故は運に乗じて仇を碎く時、勇者に非ずと云ふ人なし。兵盡き矢窮りて、遂に敵に降らず、死を安くして後、始めて名を顯すべき道なり。生けらん程は武に誇るべからず。人倫に遠く禽獸に近き振舞、その家にあらずば好みて益なき事なり。

屏風障子などの繪も文字も、頑なる筆様して書きたるが、見惡きよりも、

宿の主の拙く覺ゆるなり。大方持てる調度にても、心劣りせらるゝ事はありぬ

べし。さのみ善き物を持つべしにもあらず、損ぜざらん爲とて、品なく見惡

き様にしなし、珍しからんとて、用なき事共爲添へ、煩しく好みなせるをいふ

なり。古めかしきやうにて、痛く事々しからず、費もなくて物柄の善きが善き

なり。羅の表紙は疾く損ずるがわびしきと、人のいひしに、頓阿が、うすも



のは上下はづれ、螺鈿らでんの軸は貝落ちて後こそいみじけれ、と申し侍りしこそ心まさりて覚えしか。一部とある草紙などの同じやうにもあらぬを、見悪しといへど、弘融僧都こうゆうが、物を必ず一具に整へんとするは、拙き者のする事なり。不具なるこそよけれと言ひしも、いみじく覚えしなり。總て何も皆事とよのほ調りたるは悪しき事なり。仕残したるをさて打ち置きたるは、面白く生き延ぶる業なり。内裏造らるゝにも、必ず造り果てぬ所を残す事なりと、或る人申し侍りしなり。先賢の作れる内外ないじの文にも、章段の開けたることのみぞ侍る。

竹林院ノ入道左大臣殿、太政大臣あがに上り給はんには、何の滞りかおはせんなれども、珍らしげなし、一いちの上かみにて止みなん、とて、出家し給ひにけり。洞院ノ左大臣殿この事を甘心かんじんし給ひて、相國の望おはせざりけり。充龍かうりゅうの悔ありとかや云ふ事侍るなり。月満ちては缺け、物盛りにしては衰ふ。萬の事先さきの詰りたるは、破れに近き道なり。

法顯ほふげん三藏の天竺に渡りて、故郷の扇を見ては悲しび、病に臥しては漢の食を願ひ給ひける事を聞きて、さばかりの人の無下にこそ、心弱きけしきを、人の國にて見え給ひけれと、人の言ひしに、弘融僧都、優なまけに情ありける三藏かな、といひたりしこそ、法師のやうにもあらず、心にくく覚えしか。

人の心素直ならねば、偽りなきにしもあらず。されど自ら正直の人、などか無からん。己れ素直ならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。至りて愚なる人は、たましく賢なる人を見てこれを憎む。大なる利を得んが爲に、少しきの利を受けず、偽り飾りて名を立てんとすと謗そしる。己れが心に違たがへるによりて、この嘲りをなすにて知りぬ。この人は下愚かぐの性移るべからず。偽りて小利をも辭すべからず。假にも愚を學ぶべからず。狂人の眞似とて大路を走らば、則ち狂人なり。悪人の眞似とて人を殺さば、悪人なり。驥きを學ぶは驥の類ひ、舜を學ぶは舜の徒なり。偽りても、賢を學ばんを賢と云べし。



惟繼中納言は、風月の才に富める人なり。一生精進にて讀經うちして、寺法師の圓伊僧正と同宿して侍りけるに、文保に三井寺焼かれし時、坊主にあひて、御坊をば寺法師とこそ申しつれど、寺は無れば、今よりは法師とこそ申さめといはれけり。いみじき秀句なりけり。

下部に酒飲まする事は心すべき事なり。宇治に住みける男、京に具覺坊となまめきたる遁世の僧を小舅なりければ常に申し睦びけり。或時迎に馬を遣したりければ、遙なる程なり。口つきの男に先づ一度せさせよとて、酒を出したれば、さし受けさし受け、よいと飲みぬ。太刀うち佩きてかひくしげなれば、頼もしく覺えて、召し具して行く程に、木幡の邊りにて、奈良法師の兵士數多具して逢ひたるに、この男立ち向ひて、日暮れにたる山中に怪しきぞ、止まり候へ、といひて、太刀を引き抜きければ、人も皆太刀抜き矢矧げなどしけるを、具覺坊手を摺りて、現心なく酔ひたる者に候ふ、任げて許し給はらん、

と言ひければ、おのゝく嘲りて過ぎぬ。この男具覺坊にあひて、御坊は口惜しき事し給ひつるものかな、己れ酔ひたる事侍らず、高名仕らんとするを、抜ける太刀空しくなし給ひつる事と怒りて、專斬りに斬り落しつ。さて山賊ありと伺りければ、里人おこりて出で合へば、我こそ山賊よと言ひて、走りかゝりつゝ斬り廻りけるを、數多して手負せ打伏せて縛りけり。馬は血つきて、宇治大路の家に走り入りたり。あさましくて、男ども數多走らかしたれば、具覺坊は梶原に呻吟び伏したるを、求め出で、兒きもて來つ。辛き命生きたれど、腰斬り損ぜられて、不具になりけり。

或者、小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたるけるを、或人、御相傳受ける事には侍らじなれども、四條大納言撰ばれたるものを、道風書かん事、時代や違ひ侍らん、覺束なくこそ、といひければ、さ候へばこそ世に有り難き物には侍りけれ、とて愈秘藏しけり。



奥山に猫またといふ物ありて、人を食ふなると人のいひけるに、山ならねども、これらにも猫の經上りて、猫またになりて、人取る事は有なるものをと云ふ者ありけるを、何阿彌陀佛とかや連歌しける法師の、行願寺の邊にありけるが聞きて、一人歩かん身は心すべき事にこそと思ひける頃しも、ある所にて夜更くる迄連歌して、唯一人歸りけるに、小川の端にて音に聞きし猫また、あやまたず足のもとへふと寄り來て、頓て搔き付く儘に、頸の程を食はんとす。肝心も失せて、防がんとするに力もなく足も立たず。小川へ轉び入りて、助けよや、猫また、よやと叫べば、家々より松明ども灯して、走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。こは如何にとて、川の中より抱き起したれば、連歌の賭物取りて、扇小箱など懷に持ちたりけるも水に入りぬ。希有にして助かりたる様にて、はふく家に入りけり。飼ひける犬の暗けれど、主を知りて飛び付きたりけるとぞ。

大納言法印の召し仕ひし乙鶴丸、やすら殿といふ者を知りて、常に行き通ひしに、或時出で、歸り來たるを、法印何處へ行きつるぞ、と問ひしかば、やすら殿の許罷りて候ふといふ。そのやすら殿は、男か法師かと又問はれて、袖かき合せて、いかゞ候らふらん、頭をば見候はず、と答へ申しき。などか頭ばかりの見えざりけん。

赤舌日といふ事、陰陽道には沙汰なき事なり。昔の人これを忌まず、此頃何者のいひ出で、忌み始めけるにか。この日ある事末通らずといひて、その日いひたりし事、したりし事叶はず、得たりしものは失ひ、企てたりし事成らずと言ふ愚なり。吉日を選びて爲したる業の末通らぬを、數へて見んも又等しかるべし。その故は、無常變易の境有りと見るものも存せず、始ある事も終り無し。志は遂げず、望は絶えず、人の心不定なり、物皆幻化なり、何事か暫くも住する。此の理を知らざるなり。吉日に悪をなすに必ず凶なり。悪日に善



を行ふに必ず吉なりといへり。吉凶は人によりて日によらず。  
 或人弓射る事を習ふに、諸矢を手挟みて的に向ふ。師の曰く、初心の人二つ  
 の矢を持つ事勿れ、後の矢を頼みて初の矢に等閑の心あり、毎度たゞ得失なく  
 この一矢に定むべしと思へ、といふ。僅に二つの矢、師の前にて一つを疎にせ  
 んと思はんや。懈怠の心自ら知らずと雖も、師是を知る。此の誠め萬事に渡る  
 べし。道を學する人、夕には朝あらん事を思ひ、朝には夕あらん事を思ひて、  
 重ねて懇に修せん事を期せり。況んや一刹那のうちに於て、懈怠の心ある事を  
 知らんや。何ぞ只今の一念に於て、直ちにする事の甚だ難き。  
 牛を賣る者あり。買ふ人、明日その價をやりて牛を取らんといふ。夜の間に  
 牛死ぬ。買はんとする人に利あり、賣らんとする人に損ありと語る人あり。是  
 を聞きて傍なる者の云ふ、牛の主まことに損ありと雖も、又大なる利あり。其  
 の故は生ある者死の近き事を知らざる事、牛既に然かなり。人亦同じ。計ら

ざるに牛は死し、計らざるに主は存せり。一日の命萬金よりも重し。牛の價鵝  
 毛よりも輕し。萬金を得て一錢を失はん人、損ありと云ふべからずといふに、  
 皆人嘲りて、その理は牛の主に限るべからずと云ふ。又曰く、されば人死を惡  
 まば生を愛すべし、存命の喜び日々に樂しまざらんや。愚なる人この樂を忘れ  
 て、煩がはしく外の樂を求め、此の財を忘れて危く他の財を貪るには、志滿つ  
 る事なし。生ける間生を樂しまずして、死に臨みて死を恐れれば、この理あるべ  
 からず。人皆生を樂しまざるは、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあら  
 ず、死の近き事を忘るゝなり。若し又生死の相に與らずと云はゞ、實の理を得  
 たりと云ふべしといふに、人いよく嘲ける。

常磐井の相國出仕し給ひけるに、勅書を持ちたる北面遇ひ奉りて、馬より下り  
 たりけるを、相國、後に、北面何がしは勅書を持ちながら下馬し侍りし者なり、  
 斯程の者如何てか君に仕まつり候ふべき、と申されければ、北面を放たれにけ



リ。勅書を馬の上ながら捧げて見せ奉るべし、下るべからずとぞ。

箱のくりかたに緒をつくること、いづ方につけ侍るべきぞと、ある有職の人  
に尋ね申し侍りしかば、軸につけ表紙につくること兩説なれば、いづれも難  
し。文の箱は多くは右につく、手箱には軸につくるも常の事なりと仰せられ  
めなもみといふ草あり。蝮くちばみに刺されたる人、かの草を揉みて附けぬれば  
則ち癒ゆとなん、見知りて置くべし。

その物につきて、その物を費し損ふもの數を知らずあり。身に虱しらみあり。家  
鼠あり。國に賊あり。小人に財あり。君子に仁義あり。僧に法あり。

尊き聖の云ひ置きける事を書きつけて、一言芳談とかや名づけたる草紙を見  
侍りしに、心に合ひて覚えし事ども、

一しやせまし、せずやあらましと思ふ事は、大様は爲ぬはよきなり。

一後世を思はん者は、棋汰瓶きんたがめ一つも持つまじき事なり。持經本尊に至るまで

よきものを持つ、よしなき事なり。

一通世とんせい者しやは、無きに事かけぬやうを計ひて過ぐる、最上のやうにてあるな  
り。

一上藤は下藤になり、智者は愚者になり、徳人は貧になり、能ある人は無能  
になるべきなり。

一佛道を願ふといふは別の事なし。暇ある身になりて、世の事を心にかけぬ  
を第一の道とす。

この外もありし事ども覚えず。

堀川の相國は、美男の樂しき人にて、その事となく過差くわさを好み給ひけり。御  
子某俊卿を大理になして、廳務行はれけるに、廳屋ちやうやの唐櫃からびつ見苦しとて、めで  
たく作り改めらるべき由仰せられけるに、この唐櫃は上古より傳はりて、その  
始めを知らず數百年を経たり。累代の公物くもつ、古弊こへいをもちて規模とす、たゞすく



改められ難き由、故實の諸官等申しければ、その事止みにけり。

久我の相國は、殿上にて水を召しけるに、主殿司土器を奉りければ、椀を参らせよとて、椀してぞ召しける。

或人任大臣の節會の内辨を勤められけるに、内記の持ちたる宣命を取らずして、堂上せられにけり。極りなき失禮なれども、立ち歸り取るべきにもあらず、思ひ煩ばれけるに、六位外記康綱、衣被の女房を語らひて、かの宣命を忍びやかに奉らせけり。いみじかりけり。

井大納言光忠入道、追儼の上卿を勤められけるに、洞院右大臣殿に次第を申し請けられければ、又五郎男を師とするより外の才覺候はじとぞ宣ひける。かの又五郎は老いたる衛士のよく公事に馴れたる者にてぞありける。近衛殿着陣し給ひける時、膝突を忘れて外記を召されければ、火焚きて候ひけるが、先づ膝突を召さるべくや候ふらんと、忍びやかに呟きける、いとをかしかりけり。

大覺寺殿にて、近習の人ども、謎々をつくりて解かれける處へ、醫師忠守参りたりけるに、侍従大納言公明卿、我朝の者とも見えぬ忠守かな、と謎々にせられにけるを、唐瓶子と解きて笑ひ合はれければ、腹立ちて退ん出にけり。

荒れたる宿の人目無きに、女の憚る事ある頃にて、徒然と籠りたるを、或人訪らひ給はんとて、夕月夜の覺束なき程に、忍びて尋ねおはしたるに、犬のこゝとしく咎むれば、下司女の出で、何處よりぞと云ふに、頓て案内せさせて入り給ひぬ。心細げなる有様、いかで過すらんと、いと心苦し。あやしき板敷に、暫し立ち給へるを、持て静めたる氣色の若やかなるして、此方へ、といふ人あれば、たてあけ所狭げなる、遣戸よりぞ入り給ひぬ。内の様はいたく荒涼じからず、心にく、火は彼方に仄なれど、物の綺羅など見えて、俄にしもあらぬ匂、いと懐しう住みなしたり。門よく鎖してよ、雨もぞ降る、御車は、門の下に、御供の人は其處く、と云へば、今宵ぞ安き寢は寢べかんめると、



うち私語さしめくも忍びたれど、程無ければほの聞ゆ。さてこの程の事共細やかに聞え給ふに、夜深とらき鶏も鳴きぬ。來し方行末かけて、眞實まめやかなる御物語に、この度は鶏も花やかなる聲にうち類れば、明け離るゝにやと聞き給へど、夜深とらく急ぐべき所の様にもあらねば少し撓たゆみ給へるに、隙ひま白くなれば、忘れ難き事などいひて、立ち出て給ふに、梢も庭も珍しく青み渡りたる、卯月ばかりの曙、艶あやにかかりしを思し出で、桂の木の大なるが隠るゝ迄、今も見送り給ふとぞ。

北の屋陰やかげに消え残りたる雪の、いたう凍りたるに、さし寄せたる車の轆ながも霜あいたく燦きらめきて、有明の月さやかなれども、隈なくはあらぬに、人離はなれなる御堂の廊なみくに尋常じんじょうには非ずと見ゆる男、女と長押ながしに尻懸けて、物語りする様こそ、何事にかあらん盡つきすまじけれ。傾容かぶしかたちなどいとよしと見えて、得も云はぬ句ひのさと瀟せうりたるこそをかしけれ。氣情けはひなど、はづれく聞えたるも床し。

高野の證空上人、京へ上りけるに、細道にて馬に乗りたる女の行き逢ひたりけるが、口引きける男悪しく引きて、聖ひじりの馬を堀へ落してけり。聖いと腹悪しく咎めて、こは希有けううの狼籍かな、四部の弟子はよな、比丘びくよりは比丘尼びくには劣り、比丘尼びくにより優婆塞うばせは劣り、優婆塞うばせより優婆夷うはいは劣れり。斯くの如くの優婆夷うはいなどの身にて、比丘びくを堀に蹴入れさする、未曾有の悪行なり、と云はれければ、口引の男、如何に仰せやるゝやらん、えこそ聞き知らね、といふに、上人猶息捲いさきて、何といふぞ、非修ひしゆ非學ひがくの男、と荒らかにいひて、極りなき放言ほうげんしつと思ひける氣色にて、馬引き歸して遁げられにけり。貴かりける諍いさひなるべし。

女の物言ひかけたる返事、取敢へずよき程にする男は有り難きものぞとて、龜山院の御時、しれたる女房ども若き男たちの参らるゝ毎に、時鳥ときとぎすや聞き給へる、とて問ひて試みられけるに、某なにがしの大納言とかや、數ならぬ身はえ聞き



候はず、と答へられけり。堀川内大臣殿は、岩倉にて聞きて候ひしやらん、と仰せられたりけるを、これは難なし、數ならぬ身むつかし、など定め合はれけり。總て男をば、女に笑はれぬやうに生し立つべしとぞ、淨土寺の前關白殿は幼くて、安喜門院のよく教へ參らせさせ給ふける故に、御詞などのよきぞと人の仰せられけるとかや。山階、左大臣殿は、あやしの下女の見奉るも、いと恥かしく心遣ひせらるゝとこそ仰せられけれ。女のなき世なりせば、衣紋も冠もいかにもあれ、ひき繕ふ人も侍らじ。斯く人に恥らるゝ女、如何ばかりいみじきものぞと思ふに、女の性は皆僻めり。人我の相深く。食欲甚しく、物の理を知らず、只迷の方に心も早く移り、詞も巧に、苦しからぬ事をも、問ふ時は言はず、用意あるかと見れば、又あさましき事迄問はず語りにいひ出す。深くたばかり飾れる事は男の智慧にも勝りたるかと思へば、その事後より顯るゝを知らず、質朴ならずして拙き者は女なり。その心に隨ひてよく思はれん事は、心

憂かるべし。されば何かは女の恥かしからん。もし賢女あらば、それも物疎くすさまじかりなん。たゞ迷を主として、彼に隨ふ時、優しくも面白くも覺ゆべき事なり。

寸陰惜む人無し。これよく知れるか。愚なるか。愚にして怠る人の爲にいはば、一錢輕しと雖も、これを累ぬれば貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢を惜む心切なり。刹那覺えずと雖も、これを運びて止まざれば、命を終ふる期忽ちに至る。されば道人は、遠く日月を惜むべからず。只今の一念空しく過ぐる事を惜むべし。若し人來りて、我命明日は必ず失はるべし、と告げ知らせたらんに、今日の暮るゝ間、何事をか頼み何事をか營まん。我等が生ける今日の日、何ぞその時節に異ならん。一日の中に、飲食、便利、睡眠、言語、行歩、止む事を得ずして多くの時を失ふ。その餘りの暇、幾何ならぬうちに無益の事をなし、無益の事をいひ、無益の事を思惟して、時を移すのみならず



目を消し月をわたりて一生を送る尤も愚なり。謝靈運は法華の筆受なりしかども、心常に風雲の思ひを觀ぜしかば、惠遠みえん白蓮びくねんの交りを許さざりき。暫くも是れなき時は、死人に同じ。光陰何の爲にか惜むとならば、内にこゝろ意なく、

外に世事なくして、止まん人は止み、修せん人は修せよとなり。

高名かうみやうの木のぼりといひし男をとこ、人を捉おとて、高き木に登のぼせて、梢を切らせしにいと危く見えし程は云ふ事もなくて、下るゝ時に軒だけばかりになりて、過あやまちすな、心して下りよ、と詞をかけ侍りしを、斯かばかりになりては、飛び下るゝとも下りなん、如何に斯く云ふぞと申し侍りしかば、その事に候ふ、目眩くらめき枝危き程は、己れが恐れ侍れば申さず、過あやまちは安き所になりて、必ず仕る事に候ふといふ。あやしき下くだりなれども、聖人の誠めに叶まへり。鞠まりも難き所を蹴出し、て後、易く思へば、必ず落つと侍るやらん。

雙六すうろくの上手といひし人に、その術てだてを問ひ侍りしかば、勝たんと打つべからず、

負けじと打つべきなり。いづれの手か疾く負けぬべきと案じて、その手を使はずして、一日なりとも、遅く負けべき手につくべしといふ。道を知れる教へ、身を修め國を保たん道も亦然しかなり。

闇井くらみ雙六好みて明し暮す人は、四重五逆にも勝れる悪事とぞ思ふと、或聖の申し事、耳みみに留とどまりていみじく覺え侍る。

明日は遠國へ赴くべしと聞かん人に、心靜に爲すべからん業をば、人いひかけてんや。俄の大事をも替み、切せちに歎く事もある人は、他の事を聞き入れず、人の愁喜しうれをも問はず、問はずとてなどやと恨むる人もなし。されば年もやうやう長たげ病にもまつはれ、況んや世をも遁れたらん人、又是に同じかるべし。人間の儀式、いづれの事か去り難からぬ、世俗よこの黙もだし難きに從ひて、是を必ずとせば、願も多く、身も苦しく、心の暇もなく、一世は雜事ざさの小節せうせつに障さへられ、て空しく暮れなん。日暮れ途遠し、吾生既に蹉跎さうたたり、諸縁しよゑんを放はな下くだすべき時なり



信をも守らじ、禮義をも思はじ、この心を得ざらん人は、物狂ひともいへ、現  
 なし、情なしとも思へ、譏るとも苦しまじ、譽むるとも聞き入れじ。

四十にも餘りぬる人の色めきたる方、自ら忍びてあらんは如何はせん。言に  
 うち出で、男女の事、人の上をも云ひ戯るゝこそ、似げなく見苦しけれ。大  
 方聞きにくく見苦しき事、老人の若き人に交はりて、興あらんと物いひ居たる。  
 數ならぬ身にて世の覚えある人を、隔てなき様にいひたる。貧しき所に酒宴好  
 み、客人に饗應せんときらめきたる。

今出川のおほい殿、嵯峨へおはしおるに、有栖川のわたりに水の流れたる所  
 にて、齋王丸御牛を追ひたりければ、足搔の水前板までさゝとかりけるを、  
 爲則御車の後に候ひけるが、希有の童かな、かゝる所にて御牛をば追ふものかと  
 いひたりければ、おほい殿御氣色悪しくなりて、己れ車やらんこと、齋王丸に  
 隣りて得知らじ、希有の男なりとて、御車に頭を打ちあてられにけり。この高

名の齋王丸は、太秦殿の男、料の御牛飼ぞかし。この太秦殿に侍りける女房  
 の名ども、一人は膝幸、一人は軒通、一人は胞腹、一人は乙牛と付けられけり。  
 宿河原といふ所にて、梵論々々多く集りて、九品の念佛を申しけるに、外よ  
 り入り来るぼろくの、若し此の御中にいろをし坊と申す梵論やおはしますと  
 尋ねければ、其の中より、いろをし此處に候ふ、かく宣ふは誰ぞと答ふれば、  
 しら梵字と申す者なり、己れが師何がしと申し人、東國にていろをしと申す  
 梵論に殺されけりと承りしかば、その人に逢ひ奉りて、恨み申さばやと思ひて  
 尋ね申すなりといふ。いろをし、ゆくしくも尋ねおはしたり、さる事侍りき、  
 此處にて對面し奉らば、道場を汚し侍るべし。前の河原へ参りあはん、あなかし  
 こ、脇座氏達何方をも助太刀給ふな、數多の煩ひにならば、佛事の妨に侍るべ  
 しといひ定めて、二人河原へ出であひて、心行くばかりに貫きあひて、共に死に  
 けり。ぼろくといふもの昔は無りけるにや、近き世に、梵論字、梵字、漢字



などいひける者、其の始めなりけるとかや。世を捨てたるに似て、我執深く、佛道を願ふに似て、闘諍とつじやうを事とす。放逸無慚ほういつむぜんの有様なれども、死を軽くして、少しも泥なつまざる方の潔く覺えて、人の語りし儘に書きつけ侍るなり。

寺院の號、さらぬ萬の物にも名を付くる事、昔の人は少しも求めず、只ありの儘に安く付けしるなり。此頃は深く案じ、才覺を顯さんとしたるやうに聞ゆる、いとむづかし。人の名も、目馴れぬ文字をつかんとする、益なき事なり。何事も珍しき事を求め、異説を好むは、淺才の人の必ずある事なりとぞ。

友とするに惡きもの七つあり。一には高くやんごとなき人。二には若き人。三には病なく身強き人。四には酒を好む人。五には武く勇める兵。六には虚言そらごとする人。七には欲深き人。善き友三つあり、一には物くるゝ友。二には醫師くすし。三には智慧ある友。

鯉あつものの羹食ひたる日は、鬢びんそゝけずとなん。膠にかはにもつくるものなれば、粘り

たる物にこそ。鯉ばかりこそ、御前にても切らるゝものなれば、やんごとなき魚なり。鳥には雉きじ双無きものなり。雉きじ、松茸まつだけなどは、御湯殿の上にかゝりたるも苦しからず、その外は心憂き事なり。中宮の御方の、御湯殿の上の黒み棚に鷹の見えつるを、北山入道殿の御覽じて、歸らせ給ひて、頓て御文にて、斯様の物さながらその姿にて、御棚にぬて候ひし事、見ならはず様悪しき事なり、はかなくしき人のさぶらはぬ故にこそ、など申されたりけり。

鎌倉の海に鯉といふ魚は、かの境には双無きものにて、此頃もてなす物なり。それも鎌倉の年寄の申し侍りしは、この魚已等若かりし世迄は、はかなくしき人の前へ出づる事侍らざりき。頭は下部しもべも食はず、切りて捨て侍りしものなりと申しき。かやうの物も世の末になれば、上さま迄も入りなつ業にこそ侍れ。

唐の物は、藥の外は無くとも事缺くまじ。書ふみどもは此の國に多く弘まりぬれば書きも寫してん。唐もろこし船ふねのたやすからぬ道に、無用の物共のみ取り積みて、



所狭くわたし持て來るいと愚なり。遠きものを實とせずとも、又得難き實を奪まずとも、と文にも侍るとかや。

養ひ飼ふ物には馬牛、繋ぎ苦しむるこそ痛ましけれど、無くて叶はぬものなれば如何はせん。犬は守り防ぐ務め、人にも勝りたれば必ずあるべし。されど家毎にあるものなれば、殊更に求め飼はずともありなん。その外の鳥獸、凡て用なき物なり。走る獸は檻に籠め、鎖をさし、飛ぶ鳥は翼を切り、籠に入れられて、雲を戀ひ野山を思ふ憂へ止む時なし。その思ひ我身にあたりて忍び難くは、心あらん人これを樂しまんや。生を苦しめて目を喜ばしむるは、桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せし、林に樂しぶを見て逍遙の友としき。捕へ苦めたるにあらず。凡そ珍しき鳥、怪しき獸、國に養はずとこそ文にも侍るなれ。

人の才能は、文明らかにして聖の教を知れるを第一とす。次には手書くこと、旨とする事は無くともこれを習ふべし。學問に便りあらん爲なり。次に醫術を

習ふべし。身を養ひ人を助け、忠孝のつとめも醫に非ずはあるべからず。次に弓射、馬に乗ること六藝に出だせり。必ずこれを窺ふべし。文武醫の道、誠に缺けてはあるべからず。これを學ばんば、徒なる人と云ふべからず。次に食は人の天なり、よく味を調へ知れる人、大なる徳とすべし。次に細工萬の要多し。この外の事ども、多能は君子の恥づる所なり。詩歌に巧に絲竹に妙なるは幽玄の道君臣これを重くすといへども、今の世には是を持ちて世を治むる事、漸く愚なるに似たり。金は勝れたれども、鐵の益多きに如かざるがごとし。無益の事をなして時を移すを、愚なる人とも、僻事する人ともいふべし。國の爲君の爲めに、止む事を得ずして爲すべき事多し。其の餘りの暇、いくばくならず思ふべし。人の身に止む事を得ずして營む所、第一に食物、第二に着物、第三に居所なり。人間の大事この三つには過ぎず。飢えず寒からず、風雨に犯されずして、靜かに過すを樂とす。但し人皆病あり、病に言されぬればその繼



忍び難し。醫療を忘るべからず。薬を加へて、四つの事求め得ざるを貧しとす。この四つ缺けざるを富めりとす。この四つの外を求め營むを奢りとす。四つ的事儉約ならば、誰の人か足らずとせん。

是せほふ法ほふ法師は、淨土宗に恥ぢずといへども、學匠をたてず、たゞ明暮念佛して安らかに世を過す有様、いとあらまほし。

人おくに後れて、四十九日の佛事に或る聖を請こ侍りしに、説法いみじくして、皆人涙を流しけり。導師歸りて後、聽聞の人ども、いつよりも殊に今日は尊く覺え侍りつると、感じ合へりし返事に、或者の曰く、何とも候へ、あれ程唐の狗に似候ひなん上は、と言ひたりしに、あはれも醒めてをかしかりけり。さる導師の譽めやうやはあるべき。又人に酒勸むるとて、己れ先づ喫たべて人に強ひ奉らんとするは、劍けんにて人を斬らんとするに似たる事なり。二方に又つきたるものなれば、持上もたぐる時先づ我頭を斬る故に、人をば得切らぬなり。己れ先づ醉

ひて臥しなば、入はよも召さじと申しき。劍にて斬り試みたりけるにや、いとをしかりき。

博奕はくちの負極まけまりて、残りなくうち入れんとせんに、相手は打つべからず。立ちかへり續けて勝つべき時の至れると知るべし。その時を知るをよき博奕といふなりと、或者申しき。

改めて益なきことは、改めぬをよしとするなり。

草 然 徒  
雅房まさふさ大納言は、才賢さいけんく善き人にて、大將にもなさばやと思しける頃、院の近習なる人、只今あさましき事を見侍りつと申されければ、何事ぞ、と問はせ給ひけるに、雅房鷹たがに飼はんとて、生きたる犬の足を切り侍りつるを、中垣の穴より見侍りつ、と申されけるに、疎うとましく憎く思召して、日頃の御氣色も違たがひ、昇進たがもし給はざりけり。さばかりの人、鷹たがを持たれたりけるは思はずなれど、犬の足は跡なき事なり。虚言そらごとは不便なれども、かゝる事を聞かせ給



ひて、悪ませ給ひける、君の御心はいと尊き事なり。大方生ける物を殺し、痛め聞はしめて遊び樂まん人は、畜生殘害の類ひなり。萬の鳥獸小き蟲迄も、心を止めて有様を見るに、子を思ひ親を懐しくし、夫婦を伴ひ、妬み怒り、欲多く、身を愛し、命を惜しめる事、偏に愚痴なる故に、人よりも勝りて甚し。彼に苦しみを與へ、命を奪はん事、いかでか痛ましからざらん。凡て一切の有情を見て、慈悲の心無からんは人倫にあらず。

顔回は志人に勞を施さじとなり。凡て人を苦しめ物を虐ぐるごと、賤しき民の志をも奪ふべからず。又幼き子を賤し怖し、言ひ辱しめて興ずる事あり、おとなしき人は、實ならねば事にもあらず思へど、幼き心には、身に沁みて恐ろしく恥しくあさましき思ひ、誠に切なるべし。これを惱して興ずる事、慈悲の心に非ず。おとなしき人の、喜び怒り哀び樂ぶも、皆虚妄なれども、誰か實有の相に着せざる。身を破るよりも心を傷しむるは、人を害ふ事猶甚し。病

を受くる事も多くは心より受く、外より來る病は少し。藥を飲みて汗を求むるには、効能なき事あれども、一旦恥ぢ恐るゝ事あれ、必らず汗を流すは心の仕業なりといふ事を知るべし。凌雲の額を書きて、白頭の人となりし例なきにあらず。

物に争はず、己れを枉げて人に従ひ、我が身を後にして人を先にするには如何かず。萬の遊びにも勝負を好む人は、勝ちて興あらん爲なり。己れが藝の勝りたる事を喜ぶ。されば負けて興なく覺ゆべき事、又知られたり。我負けて人を歡ばしめんと思はゞ、更に遊びの興なかるべし。人に本意なく思はせて、我が心を慰まん事徳に背けり。陸じき中に戯るゝも、人を詐り欺きて、おのれが智の勝りたる事を興とす、これ又禮にあらず。されば始め興宴より起りて、長き恨みを結ぶ類多し。これ皆争を好む失なり。人に勝らん事を思はゞ、只學問して、其の智を人に勝らんと思ふべし。道を學ぶとならば、善に誇らず、ともが



らに争ふべからずといふ事を知るべき故なり。大なる職をも辭し、利をも捨つるは、只學問の力なり。

貧しき者は財を以て禮とし、老いたる者は力を以て禮とす。己が分を知りて及ばざる時は、速に止むを智といふべし。許さざらんは人の誤りなり。分を知らずして強ひて勵むは、己が誤なり。貧しくて分を知らざれば盜み、力衰へて分を知らざれば病を受く。

鳥羽の作つくりみち道は、鳥羽殿建てられて後の號にはあらず、昔よりの名なり。元

良親王、元日の奏賀の聲甚殊勝にして、大極殿より鳥羽の作道まで聞えける由李部王の記に侍るとかや。

夜の御殿は東御枕なり。大方東を枕として、陽氣を受くべき故に、孔子も東首し給へり、寢殿のしつらひ、或は南枕常の事なり。白川院は北首に御寢なりけり。北は忌む事なり。又伊勢は南なり。太神宮の御方を、御跡にせさせ給ふ事

如何と人申しけり。但し太神宮の遙拜は、巽に向はせ給ふ、南にはあらず。

高倉院の法華堂の三昧僧、何某の律師とかや云ふもの、或時鏡を取りて顔をつくぐと見て、我が容かたちの醜みにくくあさましき事を、餘りに心憂く覺えて、鏡さへ疎うとましき心地しければ、その後長く鏡を恐れて手にだに取らず、更に人に交ること無し。御堂の勤ばかりにあひて、籠り居たりと聞き傳へしこそ、有難く覺へしか。賢げなる人も、人の上をのみ計りて己れをば知らざるなり。我を知らずして、外を知るといふ道理あるべからず。されば己を知るを物知れる人といふべし。容醜かたちけれども知らず、心の愚なるをも知らず、藝の拙ちがきをも知らず、身の數ならぬをも知らず、年の老いぬるをも知らず、病の言すをも知らず、死の近き事をも知らず、行ふ道の至らざるをも知らず、身の上の非をも知らねばまして外の謗りを知らず。但し容は鏡に見ゆ。年は數へて知る。我身の事知らぬにはあらねど、すべき方の無ければ、知らぬに似たりとぞ云はまし。容を改



め、齡を若くせよとにはあらず。拙きを知らば、何ぞ頓て退かざる。老いぬと知らば、何ぞ靜に身を安くせざる。行愚おこなひなりと知らば、何ぞ茲これを念ふ事これに在らざる。凡て人に愛樂あいびつせられずして、衆に交るは恥なり。容醜かたちく心おくれにして出て仕へ、無智にして大才に交はり、不堪の藝をもちて堪能の座に列なり、雪の頭を戴きて盛なる人に並び、況や及ばざる事を望み、協はぬ事を憂へ、來らざる事を待ち、人に恐れ、人に媚ぶるは、人の與ふる恥にあらず。食る心に引かれて、自ら身を恥かしむるなり。食る事の止ざるは、命を終ふる大事、こゝに來れりと、確に知らざればなり。

資季すけすねの大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中將に逢ひて、吾主わぬしの間はれん程の事、何事なりとも答へ申さざらんやと云はれければ、具氏如何侍らんと申されけるを、去らば争あらがひ給へと云はれて、はかなくしき事は片端まねも學び知り侍らねば、尋ね申す迄もなし。何と無き漫言まやみごとの中に、覺束なき事をこそ問ひ

奉らめと申されけり。ましてこゝもとの淺き事は、何事なりとも明らめ申さんと云はれければ、近習の人々、女房なども、興あらかひある靜しづかなり、同じくは御前にて争はるべし、負けたらん人は供御ぐごを設けらるべしと定めて、御前にて召し合はせられたりけるに、具氏幼くより聞き習ひ侍れど、其の心知らぬ事侍り。馬の「きつりやうきつにのをかなかくほれいりくれんどう」と申す事は如何なる心にか侍らん、承はらんと、申されけるに、大納言入道、はたと詰りて、是は漫言まやみごとなれば、云ふにも足らず、といはれけるを、もとより深き道は知り侍らず、そゝるごとを尋ね奉らんと、定め申しつ、と申されければ、大納言入道負くすしけになりて、所課しよくわい嚴しくせられたりけるとぞ。

醫師くすしあつしけ、故法皇の御前に侍ひて、供御ぐごの参りけるに、今参り侍る、供御ぐごのいろ／＼を、文字も功能くつうも尋ね下されて、そらに申し侍らば、本草に御覽ごらんじ合せられ侍れかし、一つも申し誤り侍らじ、と申しける、時しも六條の故内



府参り給ひて、有房序ありふさに物習ひ侍らんとて、先づ、「しほ」といふ文字は、いづれの偏にか侍らんと問はれたりけるに、土偏に候ふ、と申したりければ、才の程既に顯れにたり。今はさばかりにて候へ、床しき處なしと申されけるに、驢と笑よみになりて退り出でにけり。

花は盛に月は隈なきをのみ見る者かは。雨に向ひて月を戀ひ、垂れ籠めて春の行方知らぬも、猶あはれに情深し。咲きぬべき程の梢、散り萎れたる庭などこそ見所多けれ。歌の詞書にも、花見にまかれりけるに早く散り過すぎにければ、とも、さばる事ありてまからて、なども書けるは、花を見て、と云へるに劣れることかは。花の散り月の傾くを慕ふ習ひは左る事なれど、殊かたくなに頑かたくななる人ぞ、此の枝彼の枝散りにけり、今は見所なし、などは云ふめる。萬の事も始め終りこそをかしけれ。男女の情も、偏ひとへに逢ひ見るをば云ふものかは。逢はで止みにし憂さを思ひ、假あたなる契りを嘆なげち、永き夜を獨り明かし、遠き雲を思ひや

り、津つ茅まが宿に昔を忍ぶこそ、色好むとはいはほめ。望もち月の隈なきを、千里の外まで眺めたるよりも、曉あけ近くなりて待ち出でたるが、いと深う青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うち時雨しぐれたる村雲隠れの程、又なくあはれなり。椎しほ柴はし白しろ樫かしなどの濡れたるやうなる、葉の上に煙けきたるこそ、身に沁みて、心あらん友もがなと、都戀しう覺ゆれ。すべて月花を左のみ目にて見る者かは。春は家を立ち去らでも、月の夜は闇の内ながらも思へるこそ、いと頼もしうをかしけれ。よき人は偏ひとへに好ける様にも見えず、興なまずる様も等閑なまざりなり。片田舎の人こそ、色濃く萬はもて興なまずれ、花のもとには振ねち寄り立ち寄り、他見あからめもせず目守りて、酒飲み連歌して、果ては大なる枝心なく折り取りぬ。泉には手足さし浸して、雪には下り立ちて跡つけなど、萬の物外よそながら見ること無し。左様の人の祭見し様、いと珍めづらかなりき。見事みこといと遅し、その程は棧さ敷じき不用じきなりとて、奥なる屋にて酒飲み物食ひ、團だん碁ぎ雙六など遊びて、棧敷には



人を置きたれば、渡り候ふ、といふ時に、各々肝潰るゝやうに争ひ走り上りて、落ちぬべきまで藤張り出で、押し合ひつゝ、一事も見洩さじと目守りて、鬼角有りと物毎に云ひて、渡り過ぎぬれば、又渡らん迄と云ひて下りぬ。唯物をのみ見んとするなるべし。都の人の由々しげなるは眠りていとも見ず。若く末々なるは、宮仕に立ち居、人の後に侍ふは、様悪しくも及びかゝらず、わりなく見んとする人もなし、何となく葵懸け渡して濃艶かしきに、明け離れぬ程忍びて寄する車どもの床しきを、其れか、彼れかなと思ひ寄すれば、牛飼下部などの見知れるもあり。をかしくも、きら／＼しくも、様々に行き交ふ。見るとつれ／＼ならず、暮るゝ程には、立て並べつる車共、所なく竝み居つる人も何方へ行きつらん、程なく稀になりて、車共の、亂がはしさも濟みぬれば、塵疊も取り拂ひ、目の前に淋しげになり行くこそ、世の例しも思ひ知られてあはれなれ。大路見たるこそ、祭見たるにはあれ。かの棧敷の前をこゝら行きかふ

人の見知れるが、數多あるにて知りぬ、世の人数も左のみは多からぬにこそ。此の人皆亡せなん後、我身死ぬべきに定りたりとも、程なく待ち付けぬべし。大なる器うつはものに水を入れて、細き孔をあけたらんに、滴ること少しといふとも、怠る間なく漏り行かば、頓て盡きぬべし。都の中に多き人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみならんや。鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、送る數多かる日はあれど、送らぬ日はなし。されば棺ウツイを齧ぐもの、作りてうち置く程なし。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日まで遁れ來にけるは、有難き不思議なり。暫時も世を長閑に思ひなんや。うまい子立て」といふものを、雙六の石にて作りて立て並べたる程は、取られん事何れの石とも知られども、數へあてゝ一つを取りぬれば、その外は遁れぬと見れど、また／＼數ふれば、かれこれ間拔まぬき行く程に、何れも遁れざるに似たり。兵の軍に出づるは、死に近き事を知りて、家をも忘れ身をも忘る。世を背ける



草の庵には、靜に水石を弄びて、これを他所よそに聞くと思へるはいと果敢なし。靜なる山の奥、無常かたききはの敵競かたききはひ來らざらんや。其の死に臨める事、軍の陣に進めるに同じ。祭過ぎぬれば、後の葵不用なりとて、或人の御簾なるを皆取らせられ侍りしが、色もなく覺え侍りしを、よき人のし給ふ事なれば、さるべきにやと思ひしかど、周防の内侍が、懸くれども甲斐なきものは諸共みすに御簾みすの葵の枯葉なりけり、と詠めるも、母屋もつの御簾に葵のかゝりたる枯葉を詠める由、家の集に書けり。古き歌の詞書に、枯れたる葵にさしてつかはしける、とも侍り。枕草紙にも、來し方戀しきもの、枯れたる葵、と書けるこそ、いみじく懐かしう思ひ寄りたれ。鴨長明が四季物語にも、玉だれに後の葵はとまりけり、とぞ書ける。おのれと枯るゝだにこそあるを、名残なくいかゞ取り捨つべき。御帳みらづにかれる藥玉くすたまも、九月九日菊に取りかへらるゝと云へば、菖蒲さやぶは菊の折迄もあるべきにこそ。枇杷の皇太后宮かぐれ給ひて後、古き御帳の内に、菖蒲藥玉など

の枯れたるが侍りけるを見て、折ならぬ根をなほぞ懸けつる、と、辨べんの乳母めのとのいへる返りごとに、菖蒲あやめの草はありながら、とも、江えの侍従が詠みしぞかし。家いへにありたき木は松、櫻、松は五葉もよし。花は一重ひとへなるよし。八重櫻は奈良の都にのみありけるを、此頃ぞ世に多くなり侍るなる。吉野の花、左近の櫻、皆一重にてこそあれ、八重櫻は異様ことづかうの物なり。いと事こと甚こく捻ねぢけたり。植うゑずともありなん。遅おそ櫻さくらまた荒涼すさまじ。虫のつきたるもむづかし。梅は白き、薄紅梅、一重なるが疾く咲きたるも、重なりたる紅梅の、匂ひめでたきも皆をかし。遅おそき梅は櫻に咲きあひて、覺え劣けり氣け壓おされて、枝に萎みつきたる心憂し。一重なるが先づ咲きて散りたるは、心こ疾とく、をかし、とて、京極入道中納言は、猶一重梅をなん軒近く植うゑられたりける。京極の屋の南向きに、今も二本侍るめり。柳又をかし。卯月ばかりの若楓、凡て萬の花紅葉にも勝りてめでたき物なり。橘、桂、いづれも木は物もの古ふるり大なるよし。草は山吹、藤、杜若、撫子、池に



は蓮、秋の草は萩、薄、桔梗、萩、女郎花、藤袴、紫苑、木香、芍薬、龍膽、菊、黄菊も、葛、葛、朝顔、いづれもいと高からず、さしやかなる垣に茂げからぬよし。この外世に稀なるもの、唐めきたる名の聞きにくし、花も見なれぬなどいと懐かしからず、大方何も珍しく有難き物は、よからぬ人のもて興ずるものなり。左様の物無くてありなん。

身死して財残る事は、智者のせざる所なり。よからぬ物貯へ置きたるも拙く、よき物は心をとめけん果敢なし。こちたく多かる況して口惜し。我こそ得め、など云ふ者共ありて、後に争ひたる、様悪し。後は誰にと志す物あらば、生けらん中にぞ譲るべき。朝夕なくて叶はざらん物こそあらめ、その外は何も持たでぞあらまほしき。

悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦の某とかや。双無き武者なり。故郷の人の來りて物語すとて、吾妻人こそ言ひつる事は頼まるれ、都の人は言受けのみよ

くて、實無しと云ひしを、聖、それは左こそ思すらめども、己れば都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心劣れりとは思ひ侍らず。なべて心柔かに情ある故に、人の云ふ程の事、酷甚く辭び難く、萬得云ひ放たず、心弱く言受けしつ。偽せんとは思はれど、乏しく叶はぬ人のみあれば、自ら本意通らぬ事多かるべし。吾妻人は我が方なれど、實には心の色無く情後れ、偏に直よかなる者なれば、始めより否と云ひて止みぬ。賑ひ豊かなれば、人には頼まるゝぞかしと、とわられ侍りしこそ。この聖聲うち歪み荒々しくて、聖教の細やかなる理り、いと辨へずもやと思ひしに、この一言葉の後心にくくなりて、多かる中に寺をも住持せらるゝは、斯く和らぎたる所ありてその益もあるにこそと覺え侍りし。心無しと見ゆる者も、善き一言は云ふものなり。ある荒夷の恐ろしげなるが傍の人にありて、御子はおはすや、と問ひしに、一人も持ち侍らずと答へしかば、さては物のあはれば知り給はじ、情なき御心にぞ物し給ふらんと、いと



恐ろし、子故にこそ萬のあはれは思ひ知らるれ、といひたりし、左もありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、斯る者の心に慈悲ありなんや。孝養の心無き者も、子持ちてこそ親の志は思ひ知るなれ。世を捨てたる人の萬に匹如身なるが、並べて絆多かる人の、萬に誦ひ望深きを見て、無下に思ひ朽たすは僻事なり。その人の心になりて思へば、まことに悲しからん。親の爲、妻子の爲には、恥をも忘れ盗みもしつべきことなり。されば盗人を縛しめ、僻事のみ罪せんよりは、世の人の飢ゑず寒からぬやうに、世をば行はまほしきなり。人恒の産なき時は恒の心なし。人窮りて盗みす。世治らずして凍餓の苦しみあらば、科の者絶ゆべからず。人を苦しめ法を犯さしめて、それを罪なはん事不便の業なり。さていかゞして人を恵むべきとならば、上の奢り費すところを止め、民を撫て農を勧めば、下に利あらん事疑あるべからず。衣食世の常なる上に、僻事せん人をぞ實の盗人とはいふべき。

人の終焉の有様のいみじかりし事など、人の語るを聞くに、唯靜かにして亂れずと云はゞ、心にくかるべきを、愚なる人は怪しく異なる相を語り付け、言ひし詞も振舞も、己れが好む方に譽めなすこそ、其の人の目頃の本意にもあらずやと覺ゆれ。この大事は、權化の人も定むべからず。博學の士も測るべからず。己れ違ふ所なくば、人の見聞にはよるべからず。

梅屋の上人道を過ぎ給ひけるに、河にて馬洗ふ男、あし／＼といひければ、上人立ち留まりて、あな尊とや、宿執開發の人かな、阿字々と唱ふるぞや、如何なる人の御馬ぞ、餘りに尊く覺ゆるは、と尋ね給ひければ、府生殿の御馬に候ふ、と答へけり。こはめでたき事かな、阿字本不生にこそあなれ、嬉しき結縁をもしつる哉とて、感涙を拭はれけるとぞ。

御隨身秦の重射、北面の下野入道信願を、落馬の相ある人なり、よく／＼憤み給へと云ひけるを、いと實しからず思ひけるに、信願馬より落ちて死にけり。



道に長じぬる一言神の如しと、人思へり。さて如何なる相ぞと人の問ひければ、極めて桃尻にして、沛艾はいがいの馬を好みしかば、この相を課おほせ侍りき。いつかは申し誤りたるとぞ云ひける。

明雲座主めいうんざす、相者に逢ひ給ひて、己れ若し兵仗ひやうぢやうの難やあると、尋ね給ひければ、相人、誠にその相おはします、と申す。如何なる相ぞと尋ね給ひければ、傷害の恐れおはしますまじき御身にて、假にも斯く思しよりて尋ね給ふ、これ既にその危あやみの兆きざしなり、と申しけり。果して矢に中りて失せ給ひにけり。

灸治あまた所になりぬれば、神事に穢れありと云ふ事、近く人の云ひ出せるなり。格式等にも見えずとぞ。  
きやくしき

四十以後の人、身に灸を加へて三里を焼かざれば、上氣じやうきの事あり。必ず灸すべし。

鹿茸ろくじやうを鼻にあて、嗅ぐべからず。小さき蟲ありて、鼻より入りて腦を食む

といへり。

能をつかんとする人、よくせざらん程は、怒ひに人に知られじ。内々よく習ひ得てさし出でたらんこそ、いと心にくからめと常に云ふれど、斯くいふ人一藝も習ひ得る事なし。未だ堅固片帆けんこくぺんぱんなるより、上手の中に交りて、譏り笑はるゝにも恥ぢず、つれなく過ぎて嗜なむ人、天性その骨無こつけれども、道に泥まぬいず妄にせずして、年を送れば、堪能の嗜まざるよりは、終に上手の位に至り、徳長たかけ人に許されて、並びなき名を得る事なり。天下の物の上手といへども、始めは不堪の聞えもあり、無下の瑕瑾けんぎんもありき。されども其の人、道の掟正おきてしく、これを重くして放埒はうらちせざれば、世の博士ほんしんにて萬人の師となる事、諸道變るべからず。

或人の曰く、年五十になる迄上手に至らざらん藝をば捨つべきなり。勵み習ふべき行末もなし。老人の事をば人も得笑はず、衆に交りたるもあいなく見苦



し。大方萬の仕業は止めて、暇あるこそ目安くあらまほしけれ。世俗の事に携りて、生涯を暮すは下愚の人なり。床しく覺えん事は學び聞くとも、その趣を知りなば、覺束なからずして止むべし。もとより望む事無くして止まんば、第一の事なり。

西大寺靜然上人、腰屈まり眉白く、まことに徳長けたる有様にて、内裏へ參られたりけるを、西園寺内大臣殿、あな尊の氣色やとて、信仰の氣色ありければ、資朝卿これを見て、年の寄りたるに候ふと申されけり。後日に、尅犬のあさましく老いさらばひて、毛禿げたるを曳かせて、この氣色寧く見えて候ふとて、内府へ參らせられたりけるとぞ。

爲兼大納言入道召捕られて、武士共打ち圍みて、六波羅へ率て行きければ、資朝卿一條わたりにてこれを見て、あな羨まし、世にあらん思出斯くこそ有らまほしけれとぞ云はれける。

この人、東寺の門に雨宿りせられたりけるに、不具者どもの集り居たるが、手も足も屈ぢ曲みうち返りて、何處も不具に異様なるを見て、とり／＼に類ひ無き曲者なり、尤も愛するに足れりと思ひて、目守り給ひける程に、頓てその興盡きて醜く幽鬱く覺えければ、只素直に珍しからぬ物には如かずと思ひて、歸りて後、この間植木を好みて、異様に曲折あるを求めて、目を喜ばしめるつるは、彼の不具者を愛するなりけりと、興なく覺えければ、鉢に栽えられける木ども、皆掘り棄てられにけり。左もありぬべき事なり。

世に従はん人は、先づ機嫌を知るべし。序悪しき事は、人の耳にも逆ひ心にも違ひてその事成らず、左様の折節を心得べきなり。但し病を受け、子産み、死ぬる事のみ、機嫌を計らず、序悪しとて止む事なし。生住異滅の移り變る實の大事は、猛き河の漲り流るゝが如し。暫しも滯らず、直ちに行ひゆくものなり。されば眞俗に付けて、必ず果し遂げんと思はん事は、機嫌を云ふべか



らず。兎角の用意無く、足を踏み止むまじきなり。春暮れて後夏になり、夏果て、秋の來るにはあらず。春は頓て夏の氣を催し、夏より既に秋は通ひ、秋は則ち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり梅も苔みぬ。木の葉の落つるも、先づ落ちて芽ぐむにはあらず、下より萌しつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣下に設けたる故に、待ちとるついで甚だ早し。生老病死の移り來る事、又是に過ぎたり。四季は猶定れる序あり、死期は序を待たず。死は前よりしも來らず、かれて後に迫れり。人皆死ある事を知りて、待つ事而も急ならざるに覺えずして來る。沖の干渴遙なれども、磯より潮の滿つるが如し。

大臣の大饗は、然るべき所を申し受けて行ふ、常の事なり。宇治の左大臣殿は、東三條殿にて行はる。内裏にて有りけるを申されけるによりて、よそへ行幸ありける。させる事の寄せ無けれども、女院の御所など借り申す故實なりとぞ。

筆を取れば物書かれ、樂器を取れば音を立てんと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、賽をとれば攤打たん事を思ふ。心は必ず事に觸れて來る。假にも不善の戯れをなすべからず。明地に聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非を改むる事もあり。假に今この文を廣げざらましかば、この事を知らんや。是れ即ち觸るゝ所の益なり。心更に起らずとも、佛前にありて珠數をとり經を取らば、怠るうちにも善業自ら修せられ、散亂の心ながらも繩床に坐せば、覺えずして禪定なるべし。事理もとより二つならず。外相若し背かざれば、内證必ず熟す。強ひて不信といふべからず。仰ぎて是れを尊むべし。盃の底を捨つる事は如何心得たると、或人の尋ねさせ給ひしに、凝當と申し侍るは、底に凝りたるを捨つるにや候ふらんと申し侍りしかば、左にはあらず、魚道なり、流を残して口の付きたる所を瀆ぐなりとぞ仰せられし。

「みなむすび」と云ふは、糸を結び重ねたるが、蟻といふ貝に似たればいふと



あるやんごとなき人仰せられき。になと云ふは誤なり。  
 門に額かくるを、うつと云ふはよからぬにや。勘解由小路二品禪門は、額か  
 くと宜ひき。見物の棧敷うつもよからぬにや、平張うつなどは常の事なり、  
 棧敷構ふるなどいふべし。護摩焚くと云ふも悪し、修する、護摩するなどいふ  
 なり。行法も、法の字をすみて云ふ悪し、濁りていふと、清閑寺僧正仰せ  
 られき。常にいふ事にかゝる事のみ多し。

花の盛は冬至より百五十日とも、時正の後七日ともいへど、立春より七十五  
 日大様違はず。

遍照寺の承仕法師、池の鳥を日頃飼ひつけて、堂の内まで餌を撒きて、戸一  
 つを開けたれば、數も知らず入り籠りける後、已れも入りて、立て籠めて捕へ  
 つゝ殺しけるよそほひ、おどろしく聞えけるを、草苳る童聞きて人に告げ  
 ければ、村の男ども、起りて入りて見るに、大雁ども紛騒き合へる中に、法師

交りて打ち伏せ涙ぢ殺しければ、この法師を捕へて、所より使廳へ出したりけ  
 り。殺す所の鳥を頸にかけさせて、禁獄せられに付り。基俊大納言別當の時に  
 なん侍りける。

太衝の太の字、點打たずといふ事、陰陽のともがら相論の事ありけり。も  
 りちか入道申し侍りしは、吉平が自筆の古文の裏に書かれたる御記、近衛關白  
 殿にあり。點打ちたるを書きたりと申しき。

世の人相逢ふ時暫くも黙止する事なし、必ず言葉あり。その言を聞くに、多  
 くは無益の談なり。世間の浮説、人の是非、自他の爲に失多く得少し。是を語  
 る時、互の心に無益の事なりといふことを知らず。

東の人の都の人に交はり、都の人の東に行きて身を立て、又本寺本山を繼れ  
 る顯密の僧、凡て我が俗にあらずして人に交はれる、見苦し。

人間の聲みあへる業を見るに、春の日に雪佛を作りて、其の爲に金銀珠玉の



飾りを骨み、堂塔を建てんとするに似たり。その構へを待ちてよく安置して、や。人の命ありと見る程も、下より消ゆる事雪の如くなるうちに、骨み待つこと甚だ多し。

一道に携たづさる人、あらぬ道の席に臨みて、あはれ我道ならましかば、かくよそに見侍らじものをと云ひ、心にも思へること常の事なれど、世いふに悪く覺ゆるなり。知らぬ道の羨しく覺えば、あな羨まし、などか習はざりけん、と云ひてありなん。我智を取り出で、人に争ふは、角ある物の角を傾かたぶけ、牙ある物の牙を噛かみ出す類たぐひなり。人としては善に誇らず、物と争はざるを徳とす。他に勝る事のあるは大なる失なり。品の高さにても、才藝の勝れたるにても、先祖の譽れにても、人に勝れりと思へる人は、たとひ詞に出で、こそ云はれども、内心に若干の咎とがあり、謹みてこれを忘るべし。痴をこにも見え、人にも云ひ消たれ、禍をも招くは只此の慢心なり。一道にも誠に長じぬる人は、自ら明かにその非を

知る故に、志常に満たずして、遂に物に誇る事なし。

年老いたる人の、一事勝れたる才能ありて、此の人の後には誰にか問はんなど云はるゝは、老かたうどの方人にて生けるも徒らならず。左はあれど、それも廢すたれたる所の無きは、一生此の事にて暮れにけりと拙く見ゆ。今は忘れにけりと言ひてありなん。大方は知りたりとも、漫すまろに云ひ散らすは左ばかりの才にはあらぬにやと聞え、自ら誤おのつもありぬべし。定かにも辨へ知らず、など云ひたるは、なほまことに道あるじの主とも覺えぬべし。まして知らぬ事、したり顔に、おとなしく戻もどきぬべくもあらぬ人の云ひ聞かするを、左もあらずと思ひながら、聞き居たる、いとわびし。

何事の式といふことは、後嵯峨の御代迄は云はざりけるを、近き程より云ふ詞なりと人の申し侍りしに、建禮門院の右京大夫、後鳥羽院の御位の後、復内裏うち住したる事を云ふに世の式も變りたる事は無きにもと書きたり。



左したる事なくて、人の許行<sup>がう</sup>くば善からぬ事なり。用ありて行きたりとも、その事果てなば疾<sup>た</sup>く歸るべし。久しく居たるいとむづかし。人と對ひたれば、詞多く、身も草臥れ、心も靜ならず。萬の事障りて時を移す、互の爲め益なし。厭はしげに言はんもわろし。心づきなきことあらん折は、なか／＼其の由をも云ひてん。同じ心に對はまほしく思はん人の、つれ／＼にて、今暫し、今日は心靜になどいはんは、この限りにばあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべき事なり。その事となきに人の來りて、長閑に物語りして歸りぬるいとよし。又父も「久しく聞えさせれば」などばかり云ひおこせたる、いと嬉し。

貝を掩ふ人の、我前なるをばおきて、他所<sup>よそ</sup>を見渡して、人の袖の陰、膝の下迄目を配る間に、前なるをば人に掩はれぬ。よく掩ふ人は、他所<sup>よそ</sup>迄わりなく取るとは見えずして、近きばかり掩ふやうなれど、多く掩ふなり。碁盤の隅に石を立て、弾<sup>はじ</sup>くに、向ひなる石を目守りて弾くは中<sup>あた</sup>らず、我が手許<sup>てもと</sup>をよく見て、此處

なる聖目<sup>みじり</sup>を直に弾けば、立てたる石必ず中る。萬の事外に向きて求むべからず、只此許<sup>こゝもと</sup>を正しくすべし。清獻公が詞に、好事を行じて前程を問ふ事勿れといへり。世を保たん道も斯くや侍らん。内を愼まず、輕<sup>かろ</sup>く放恣<sup>はしさま</sup>にして妄りなれば遠國必ず背く時、始めて謀を求む。風にあたり濕<sup>しつ</sup>に臥して、病を神靈に訴ふるは愚なる人なりと、醫書に云へるが如し。目の前なる人の愁を止め、惠を施し道を正しくせば、その化遠く流れん事を知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも、帥<sup>しゅ</sup>を班<sup>はん</sup>して徳を敷くには如かざりき。

若き時は血氣内に餘り、心物に動きて情欲多し。身を危ぶめて碎け易きこと、珠を走らしむるに似たり。美麗を好みて寶を費し、これを捨て、苔の袂にやつれ、勇める心盛にして物と争ひ、心に恥ぢ羨み、好む所日々に定らず、色に耽り情に愛で、行を潔くして百年の身を誤り、命を失へる例願はしくして、身の全く久しからん事を思はず、好<sup>す</sup>ける方に心引きて、長き世語りともなる、身を



過つ事は若き時の仕業なり。老いぬる人は精神衰へ、淡く疎かにして感じ動く所なし。心自ら静なれば、無益の業をなさず、身を助けて愁無く、人の煩ひ無からん事を思ふ。老いて智の若き時に勝れる事、若くして容の老いたるに勝れるが如し。

小野小町が事、極めて判かならず。衰へたる様は、玉造といふ文に見えたり。この文清行が書けりと云ふ説あれど、高野大師の御作の目錄に入れり。大師は承和の初めにかくれ給へり。小町が盛なる事その後の事にや、猶覺東なし。

小鷹によき犬、大鷹に使ひぬれば、小鷹に悪くなるといふ。大に就き小な捨つる理り、まことに然かなり。人事多かる中に、道を樂むより氣味深きは無し。これまことの大事なり。一度道を聞きてこれに志さん人、何れの業か廢れざらん。何事をか營まん。愚なる人といふとも、賢き犬の心に劣らんや。

世には心得ぬ事の多きなり。ともある毎には、先づ酒を勸めて強ひ飲せたる

を興とする事、如何なる故とも心得ず。飲む人の顔いと堪へ難げに眉を蹙め、人目をばかりて捨てんとし、遁げんとするを捉へて、引き留めてすゝろに飲ませつれば、麗はしき人も忽ちに狂人となりて痴しく、息災なる人も目の前に大事の病者となりて、前後も知らず倒れ臥す、祝ふべき日などは淺間しかりぬべし。明くる日迄頭痛く、物食はずに酔ひ臥し、生を隔てたるやうにして、昨日の事覚え、公私の大事を缺きて煩ひとなる。人をして斯る目を見する事、慈悲もなく禮義にも背けり。かく辛き目に逢ひたらん人、妬く口惜しと思へざらんや。他の國に斯る習ひあんなりと、これらに無き他事にて、傳へ聞きたらんは怪しく不思議に覚えぬべし。人の上にて見たるだに心憂し。思ひ入れたる様に心にくしと見し人も、思ふ所なく笑ひ旬り。詞多く、烏帽子歪み紐はづし、脛高く搔上げて用意無きけしき、日頃の人も覺えず。女は額髪晴れらかに搔き遣り、まばゆからず、顔うちさしげて打ち笑ひ、盃持てる手に取り付き、善



からぬ人は看取りて口にさし當て、自らも食ひたる様惡し。聲の限り出しておのゝ謠ひ舞ひ、年老いたる法師召し出されて、黒く穢き身を肩脱ぎて、目も當てられず振舞りたるを、興じ見る人さへ疎ましく憎し。或は又我身いみじき事共、傍痛く云ひ聞かせ、或るは酔ひ泣きし、下さまの人は罵り合ひ諍ひて、淺間しく恐しく、恥ちがましく心憂き事のみありて、果ては許さぬ物どもおし取りて、縁より墮ち、馬車より落ちて過ちしつ。物にも乗らぬ際は、大路を踏躰ひ行きて、築地、門の下などに向きて、得も云はぬ事ども爲散らし、年老い袈裟かけたる法師の小童の肩を押へて、聞えぬ事ども云ひつゝ、蹠踏めきたる、いと可哀し。斯る事をして、此の世も後の世も、益あるべき業ならばいかゞはせん。此の世にては過ち多く、財を失ひ病を儲く。百薬の長とはいへど、萬の病は酒よりこそ起れ。憂を忘るといへど、酔ひたる人ぞ過にし憂さをも思ひ出で、泣くめる。後の世は人の智慧を失ひ善根を焼く事火の如くして惡を増し、

萬の戒を破りて地獄に墮つべし。酒を取りて人に飲ませたる人、五百生が間手なき者に生るとこそ、佛は説き給ふなれ。斯く疎しと思ふものなれど、自ら捨て難き折もあるべし。月の夜、雪の朝、花の下にても心長閑かに物語して盃出だしたる、萬の興を添ふる業なり。つれづれなる日、思ひの外に友の入り来て、執り行ひたるも心慰む。馴れくしからぬあたりの御簾の中より、御菓子御酒など、善きやうなる氣情して、さし出されたる、いとよし。冬狭き所にて火にて物煎りなどして、隔てなき同士さし向ひて、多く飲みたる、いとをかし。旅の假屋野山などにて、御看何、など云ひて、芝の上にて飲みたるもをかし。いたう痛む人の、強ひられて少し飲みたるもいとよし。よき人のとりわきて、今一つ上すくなしなど宣はせたるも嬉し。近づかまほしき人の上戸にて、ひしひしと馴れぬるまた嬉し。左はいへど上戸は、をかしく罪許さるゝ者なり。酔ひ草臥れて朝寢したる所を、主人の引きあけたるに、惑ひて恍れたる顔ながら、



細き鬢もつりさし出し、物も着あへず抱き持ち、ひきしろひて逃ぐる、かいどり姿のうしろ手、毛生ひたる細脛ほそはざの程、をかしくつきづきし。

黒戸は小松の御門位みかどに即かせ給ひて、昔たゞ人に在おはし、時、まさな事せさせ給ひしを忘れ給はて、常に營ませ給ひける間なり。御薪みかきに煤けたれば黒戸といふとぞ。

鎌倉の中書王にて御鞠ありけるに、雨降りて後未だ庭の乾かさりければ、如何せんがと沙汰ありけるに、佐々木隠岐入道、鋸の屑を車に積み多く奉りたれば、一庭に敷かれて、泥土の煩ひ無かりけり。取り溜めけん用意有難しと、人感じ合へりけり。此の事を或る者の語り出でたりしに、吉田中納言の、乾砂子の用意やは無かりける、と宣ひたりしかば、恥しかりき。いみじと思ひける鋸の屑、賤しく異様の事なり。庭の儀を奉行する人、乾砂子を設くるは故實なりとぞ。

或所の侍さむらいども、内侍所の御神樂を見て人に語るとて、寶劍をばその人ぞ持ち給へるなどいふを聞きて、内裏なる女房の中に、別殿の行幸には書御みづかみの御劍けんにてこそあれ、と忍びやかに云ひたりし、心にくかりき。その人古き典侍たいにしなりけるとかや。

入宋にっそうの沙門道眼上人、一切經けいを持來して、六波羅のあたり焼野やけのといふ所に安置して、殊ことに首楞嚴經しゆりやうこんきやうを講じて、那蘭陀寺なだだじと號す。その聖の申されしは、那蘭陀寺は大門口北向きなりと、江帥の説とて云ひ傳へたれど、西域傳法顯傳などにも見えず、更に見所なし。江帥は如何なる才覺にてか申されけん、覺東なし。唐土の西明寺は、北向勿論なりと申しき。

左義長は、正月に打ちたる毬杖やちやうを、眞言院より神泉苑へ出して焼き上ぐるなり。法成就ほふじやうじゆの池にこそと囃すは、神泉苑の池をいふなり。

降れくこ雪丹波のこ雪、といふ事、米搗き飾ひたるに似たれば粉雪こなゆきといふ。



たまれ、雪と、云ふべきを、誤りてたんばの、とは云ふなり。垣や木のまたに、と謠ふべしと、或物知り申しき。昔より云ひける事にや。鳥羽院をさなおは幼く在しまし

て、雪の降るに斯く仰せられける由、讃岐典侍が日記に書きたり。四條大納言隆親卿、千鮭からせけと云ふものを、供御に参らせられたりけるを、斯くあやしき物参るやうあらじ、と人の申しけるを聞きて、大納言、鮭といふ魚参らぬ事にてあらんにこそあれ、鮭の素干しらほ何條事なごふあらん、鮎あゆの素干は参らぬかは、と申されけり。

人突く牛をば角を切り、人食ふ馬をば耳を切りて其の標しるしとす。標を付けずして人を傷やぶらせぬるは、主ぬしの咎なり。人食ふ犬をば獲とらひ飼ふべからず。これ皆咎あり。律のいましめなり。

相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝ事ありけるに、煤けたる明り障子の破ればかりを、禪尼手づから小刀して、切りまはしつゝ張

られければ、兄せうとの城じやう介のすけ義景よしかげ、其の日の經營けいめいして候ひけるが、給はりて、なにがし男に張らせ候はん、左様の事に心得たる者に候ふ、と申されければ、その男尼が細工によも勝り侍らじ、とて、猶一間づゝ張られけるを、義景皆を張り替へ候はんは、遙たつに容易やすく候ふべし、斑まだらに候ふも見苦しくや、と重ねて申されければ、尼も後は爽々さうさうと張り替へんと思へども、今日ばかりは態と斯くてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ゐる事ぞと、若き人に見習はせて、心附けん爲なり、と申されける、いと有難かりけり。世を治むる道儉約を本とす。女性なれども聖人の心に通へり。天下を保つ程の人を子にて持たれける、誠にたい人にはあらざりけるとぞ。

城じやう陸奥のむつ守泰盛のかみやすもりは、双無さうむき馬乗なりけり。馬を引出ださせけるに、足を揃へて鬮しきつをゆらりと越ゆるを見ては、これは勇める馬なりとて、鞍を置き換へさせけり。又足を延べて鬮に蹴當くさてぬれば、是は鈍くして過ちあるべしとて、



乗らざりけり。道を知らざらん人、斯ばかり恐れなんや。

吉田と申す馬乗の申し侍りしは、馬毎に剛きものなり、人の力争ふべからずと知るべし。乗るべき馬をば先づよく見て、強き所、弱き所を知るべし。次に轡鞍の具に危き事やあると見て、心にかゝる事あらば、その馬を馳すべからず。この用意を忘れざるを、馬乗とは申すなり。これ秘藏の事なりと申しき。

萬の道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人に並ぶ時、必ず勝る事は、擔みなく慎みて、輕々しくせぬと、偏に自由なるとの等しからぬなり。藝能所作のみにあらず、大方の振舞心づかひも、愚かにして謹めるは得の本なり。巧にして恣なるは失の本なり。

或者子を法師になして、學問して因果の理をも知り、説經などして、世渡る便ともせよと云ひければ、教の儘に説經師にならん爲に、先づ馬に乗り習ひけり。輿車持たぬ身の、導師に請ぜられん時、馬など迎へにおこせたらんに、桃

尻にて落ちなんは心憂かるべしと思ひけり。次に佛事の後、酒など勤むる事あらんに法師の無下に能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふ事を習ひけり。二つの業やうく境に入りければ、いよく能くしたく覺えて嗜みける程に、説經習ふべき暇無くて年寄りにけり。この法師のみにあらず、世間の人なべて此の事あり。若き程は諸事に付けて身を立て、大なる道をも成し、能をもつき、學問をもせんと、行末久しく豫期す事ども、心には懸けながら、世を長閑に思ひて打ち怠りつゝ、先づ差當りたる目の前の事のみを紛れて、月日を送れば、ことごとく爲す事なくして身は老いぬ。終に物の上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず、取り返さるゝ齡なられば、走りて坂を下る輪の如くに衰へ行く。されば一生のうち、むねとあらまほしからん事の中に、何れか勝るとよく思ひ比べて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひ捨て、一事を勵むべし。一日の中一時のうちにも、數多の事の來らん中に、少しも益の優らん事を營



みて、その外をばうち捨て、大事を急ぐべきなり。何方いづかたをも捨てじと心にとりもちては、一事も成るべからず。例へば碁をうつ人、一手ひとても徒いたづらにせず、人に先だちて、小を捨て大に就くが如し。それにとりて三つの石を捨て、十の石に就く事は易し。十を捨て、十一に就く事は難し。一つなりとも勝らん方へこそつくべきを、十迄なりぬれば惜しく覺えて、多くまさらぬ石には換へ惡し。此をも捨てず彼をも取らんと思ふ心に、彼をも得ず此をも失ふべき道なり。京に住む人、急ぎて東山に用ありて、既に行きつきたりとも、西山に行きて、その益勝るべき事を思ひえたらば、門より歸りて西山へ行くべきなり。こゝ迄來著きぬれば、この事をば先づ云ひてん。目をさゝぬ事なれば、西山の事は歸りて又こそ思ひ立ためと思ふ故に、一時の懈怠すなばち一生の懈怠となる、これを恐るべし。一事を必ず成さんと思はゞ、他の事の破るゝをも痛むべからず。人の嘲りなも恥づべからず。萬事に換へずしては一の大事成るべからず。人の

數多ありける中にて、或者「ますほのすゝき、まさほのすゝきなど云ふ事あり、渡邊わたのべの聖ひじり此の事を傳へ知りたり、と語りけるを、登蓮法師其の座に侍りけるが聞きて、雨の降りけるに、袋笠やある、貸し給へ、かの薄すすきの事習ひに、渡邊の聖がりの許尋ねまからん、と云ひけるを、餘りに物騒がし、雨止みてこそ、と人の云ひければ、無下の事をも仰せらるゝものかな、人の命は雨の晴間をも待つものかは、我も死に聖も失せなば尋ね聞きてんやとて、走り出て行きつゝ習ひ侍りにけりと、申し傳へたるこそ由々しく有難う覺ゆれ。敏とき時は則ち功ありとぞ、論語ろんごといふ書ふみにも侍るなる。この薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。

今日は其の事をなさんと思へど、あらぬ急ぎ先づ出て來て紛れ暮し、待つ人は障りありて、頼めぬ人は來り、頼みたる方の事はたがひて、思ひ寄らぬ道ばかりは叶ひぬ。煩はしかりつる事は事なくて、安かるべき事はいと心苦し。日々



に過ぎ行く様、豫て思ひつるには似ず。一年の事も斯くの如し。一生の間も亦然かなり。豫てのあらし皆違ひ行くかと思ふに、自ら違はぬ事もあれば、いよく物は定め難し。不定と心得ぬるのみ實にて違はず。

妻といふものこそ男の持つまじきものなれ。いつも獨住みにてなど聞くこそ心にくけれ。誰がしが聲になりぬとも、又如何なる女を取りすゑて相住むなど聞きつれば、無下に心劣りせらるゝわざなり。異なる事なき女をよしと思ひ定めてこそ添ひ居たらめと、賤しくも推し量られ、よき女ならば、此の男をぞ可憐くして、吾が佛と守り居たらめ。例へば、さばかりにこそと覚えぬべし。況して家の内を行ひ治めたる女、いと口惜し。子など出て来て、かしづき愛したる、心憂し。男亡くなりて後、尼になりて年寄りたる有様、亡き跡迄あさまし。如何なる女なりとも、明暮添ひ見んには、いと心づきなく憎かりなん。女のたれも中空にこそならめ。よそながら時々通ひ住まんこそ、年月経ても絶えぬ仲

合ともならめ。あからさまに来て、泊り居などせんは、珍しかりぬべし。

夜に入りて物の光彩無しといふ人、いと口惜し。萬の物の綺羅飾り色節も、夜のみこそめでたけれ。晝は事省ぎ、およすけたる姿にてもありなん、夜は燦かに華やかなる装束いとよし。人の氣色も、夜の火影ぞよきはよく、物云ひたる聲も、暗くて聞えたる、用意ある心にくし。匂も、物の音も、只夜ぞ一際めでたき。さしてことなる事なき夜うち更けて参れる人の、清げなる様したる、いとよし。若きどち心とめて見る人は、時をも分かぬものなれば、殊にうち解けぬべき折節ぞ、私公無く引繕はまほしき。よき男の、日暮れて沐るし、女も夜更くる程にすべりつゝ、鏡取りて顔など繕ひ出づるこそをかしけれ。

神佛にも人のまうでぬ目、夜参りたるよし。

暗き人の人を量りて、其の智を知れりと思はん、更に當るべからず。拙き人の碁打つことばかりに敏く巧みなるは、賢き人のこの藝に愚なるを見て、己れ



が智に及ばずと定めて、萬の道の匠み、我道を人の知らざるを見て、己れ勝れたりと思はん事、大なる誤りなるべし。文字の法師、暗證の禪師、互に量りて己れに如かずと思へる、共に當らず。己が境界にあらざるものをば、争ふべからず。是非すべからず。

達人の人を見る眼は少しも誤る所あるべからず。例へば或る人の、世に、虚言を構へ出だして、人を詐る事あらんに、正直に實と思ひて、云ふ儘に詐らるゝ人あり。餘りに深く信を起して、猶煩はしく虚言を心得添ふる人あり。又何としも思はで、心を付けぬ人あり。又聊か覺束なく覺えて、頼むにもあらず、頼まざるもあらで案じ居たる人あり。又實しくは覺えねども、人の云ふ事なれば左もあらんとて止みぬる人もあり。又様々に推し心得たるよし、て、賢げにうち頷づき、ほく笑みて居たれど、つやく知らぬ人あり。また推し出して、あはれ然るめりと思ひながら、猶誤りもこそあれと怪しむ人あり。又異なるやう

もなかりけりと、手を打ちて笑ふ人あり。又心得たれども、知れりとも云はず覺束なからぬは、兎角の事なく、知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あり。またこの虚言の本意を始めより心得て、少しも欺かず、構へ出したる人と同じ心になりて、力を合はする人あり。愚者の中の戯れだに、知りたる人の前にては、この様々の得たる所、詞にても、顔にても、隠れなく知られぬべし。況して明かならん人の、惑へる我等を見ん事、掌の上の物を見んが如し。但し斯様の推し量りにて、佛法までを準へ云ふべきにはあらず。

或る人久我囃を通りけるに、小袖に大口着たる人、木造の地藏を田の中の水におし浸して、懇ろに洗ひけり。心得難く見る程に、狩衣の男二人三人出て来て、此處におはしましけりとて、此の人を具して往にけり。久我内大臣殿にてぞおはしける。世の常におはしましける時は、神妙にやんごとなき人にておはしけり。



東大寺の神輿、東寺の若宮より歸座の時、源氏の公卿參られけるに、此の關大將にて先を追はれけるを、土御門の相國、社頭にて警蹕いか侍るべからん、と申されければ、隨身の振舞は、兵仗の家が知る事に候ふ、とばかり答へ給ひけり。さて後に仰せられけるは、この相國北山抄を見て、西宮の説をこそ知られざりけれ。眷屬の惡鬼靈神を恐るゝ故に、神社にては、殊に先を追ふべき理ありとぞ仰せられける。

諸寺の僧のみにもあらず、定額の女孺といふこと延喜式に見えたり。すべて數定まりたる公人の通號にこそ。

揚名やうめいのすけすけにに限らず、揚名やうめいのさくわんさくわん目といふものもあり。政事要略にあり。

福川の行宣ぎやうせん法印はういんが申し侍りしは、唐土は呂の國なり、律の音なし、和國は單律の國にて、呂の音なしと申しき。

吳竹くれたけは葉細く、河竹かはたけは葉廣し。御溝みかほに近きは河竹、仁壽殿にじうでんの方によりて植ふ

られたるは吳竹なり。

退凡たいぼん下乗げじやうの卒都婆そとば、外なるは下乗、内なるは退凡なり。

十月をかみなづきといひて、神事に憚るべき由は記したるものなし。本文も見えず。但し當月諸社の祭なき故に、この名あるか。この月萬の神たち、太神宮へ集り給ふなどいふ説あれども、その本説なし。さる事ならば、伊勢には殊に祭月とすべきに、その例もなし。十月諸社の行幸、その例も多し。但し多くは不吉の例なり。

勅勘ちくかんの所に鞆ゆきかくる作法、今は絶えて知れる人なし。主上の御惱、大方世の中ちゆうの騒さわがしき時は、五條の天神に鞆をかけらる。鞍馬に鞆の明神といふも、鞆かけられける神なり。看督かんとく長の負おのひたる鞆を、その家かにかけられぬれば、人出で入らず。この事絶えて後、今の世には封をつくることになりけり。

犯人ぼんにんを答こたへにて打つ時は、拷器がうきによせて結むすひつくるなり。拷器の様も、よする



作法も、今は辨べ知れる人なしとぞ。

比叡山に大師勸請の起請文といふ事は、慈惠僧正書き始め給ひけるなり。起請文といふ事、法曹には其の沙汰なし。古の聖代、凡て起請文につきて行はるる政はなきを、近代此の事流布したるなり。又、法令には、水火に穢れをたてず、人物には穢れあるべし。

徳大寺右大臣殿、檢非違使の別當の時、中門にて使廳の評定行はれける程に官人章兼が牛放れて、廳の内へ入りて、大理の座の濱床の上に登りて、齧うち噛みて臥したりけり。重き怪異なりとて、牛を陰陽師の許へ遣すべき由、各申しけるを、父の相國聞き給ひて、牛に分別なし、足あれば何處へか登らざらん、わうじつ 羸の官人、たましく出仕の微牛を捕へらるべきやうなしとて、牛をば主に戻して、臥したりける疊をば替へられにけり。あへて凶事なかりけるとなん。怪しみを見て怪しまざる時は、怪しみ却りて破るといへり。

龜山殿建てられんとて、地をひかれけるに、大なる蛇くちたは數も知らず凝り集りたる塚ありけり。此所の神なりといひて、事の由を申しければ、如何あるべきと勅問ありけるに、古くよりこの地を占めたるものならば、左右無く掘り捨てられ難しと、皆人申されけるに、この大臣一人、王土に居らん蟲、皇居を建てられんに何の祟をか爲すべき、鬼神は邪なし、咎むべからず、たゞ皆掘り捨てべしと申されたりければ、塚を崩して、蛇をば大井川に流してけり。更に祟なかりけり。

經文などの紐を結ふに、上下よりたけき 漆にちがへて、二筋の中より、輪索の頭をなこ 輪様に引き出す事は常の事なり。左様にしたるをば、華嚴院の弘舜僧正解きて直させけり。これは此の頃やうの事なり。いと見にくし。美はしくは、只くるくくと巻きて、上より下へ輪索の先を挿むべしと申されけり。古き人にて、かやう 斯様の事知れる人になん侍りける。



人の田を論ずるもの、訴に負けて妬きに、その田を刈りて取れとて、人を遣はしけるに、先づ道すがらの田をさへ刈りもて行くを、これは論じ給ふ所にあらず、如何に斯くは、と云ひければ、刈る者共、其所とても刈るべき道理なければ、僻事せんとてまかる者なれば、何處をか刈らざらん、とぞいひける。道理いとをかしかりけり。

呼子鳥は春のものなりとばかり云ひて、如何なる鳥とも定かに記せるものなし。ある眞言書の中に、呼子鳥鳴く時、招魂の法をば行ふ次第あり。是は鶴なり。萬葉集の長歌に、霞たつ長き春日の、など續けたり。鶴鳥も喚子鳥の異様に通ひて聞ゆ。

萬の事は頼むべからず、愚なる人は深く物を憑む故に、怨み怒る事あり。勢ありとて憑むべからず、剛き者先づ減ぶ、財多しとて憑むべからず、時の間に失ひ易し。才ありとて憑むべからず、孔子も時に遇はず。徳ありとて憑むべからず、顔回も不幸なりき。君の寵をも憑むべからず、誅を受くること速なり。奴従へりとして憑むべからず、背き走る事あり。人の志をも憑むべからず、必ず變ず、約をも憑むべからず、信ある事少なし。身をも人をも憑まざれば、是なる時は喜び、非なる時は怨みず。左右廣ければ障らず、前後遠ければ塞がらず、狭き時は拉げ砕く。心を用ゆる事少しきにして、厳しき時は物に争ひて破る。緩くして柔なる時は、一毛も損せず。人は天地の靈なり、天地は限る處なし。人の性何ぞ異ならん。寛大にして窮らざる時は、喜怒これに障らずして、物の爲に傾はず。

秋の月は限りなくめでたきものなり。いつとても月は斯くこそあれとて、思ひわかざらん人は無下に心憂かるべき事なり。

御前の火燭に火を置く時は、火箸して挟む事なし。土器より直に移すべし。されば轉び落ちぬやうに心得て、炭を積むべきなり。八幡の御幸に、供奉の人



淨衣じやういを着て、手にて炭すすをさしければ、ある有職の人、白きものを着たる日は火箸ひしを用ゐる苦しからずと申されけり。

想夫戀といふ樂は、女男を戀ふる故の名にはあらず。もとは相府蓮、文字の通へるなり。晋の王儉、大臣として、家に蓮を植えて愛せし時の樂なり。これより大臣を蓮府れんぷといふ。廻くわいこつ忽くわいこつも廻くわいこつ鶴こつなり、廻鶴國とて夷えいの剛こはき國あり。その夷、漢に伏して後に來りて、己れが國の樂を奏せしなり。

平のぶときの宣時朝臣、老の後昔語に、最明寺入道或宵の間に呼ばるゝ事ありしに、頓てと申しながら、直ひたれ垂れの無くて兎角せし程に、又使來りて、直垂などのさぶらはぬにや、夜なれば異様ことやうなりとも、疾く、とありしかば、萎なえたる直垂うちくゝの儘にて罷りたりしに、銚子かほらけに土器取り添へて持て出で、この酒を獨り喫たべんが、寂々さむかしければ申しつるなり、看みこたなければ、人は静まりぬらん、さりぬべきものやある、と何處いづまでも求め給へ、とありしかば、紙燭しそくさして隈々くま々な

求めし程に、臺たいごう所の棚に、小土器こがはらけに味噌の少し着きたるを見出で、是れぞ求め得てさぶらふと、申ししかば、事足りなんとて、心よく數藏すんぞうに及びて、興きように入られ侍りき。その世には斯くこそ侍りしか、と申されき。

最明寺入道、鶴岡の社參の序に、足利左馬入道の許へ先づ使を遣して、立ち入られたりけるに、饗應あうじやうけられたりけるやう、一獻いつこんに打鮑うちあはす、二獻に蝦、三獻に搔餅かいちもちにて止みぬ。その座には亭主夫婦、隆辨僧正、主方あるじがたの人にて座せられけり。さて年毎に賜はる、足利の染物、心もとなく候ふと申されければ、用意してさぶらふとて、色々の染物三十、前にて女房どもに、小袖に調なぜさせて後に遣されけり。その時見たる人の近く迄侍りしが、語り侍りしなり。

ある大福長者の曰く、人は萬づをさし置きて、一向ひたむに徳をつくべきなり。貧しくては生けるかひなし。富めるのみを人とす。徳をつかんと思はゞ、須すべらく先づ其の心づかひを修行すべし。其の心と云ふは他の事にあらず。人間常住の



思ひに住して、假にも無常を觀ずる事勿れ。是れ第一の用心なり。次に萬事の用を叶ふべからず。人の世にある自他につけて所願無量なり。欲に従ひて志を遂げんと思はゞ、百萬の錢ありといふとも、暫くも住すべからず。所願は止む時なし。財は盡くる期あり、限りある財をもちて、限りなき願に従ふ事得べからず。所願心に萌す事あらば、我を滅すべき惡念來れりと、堅く慎み恐れて、小用をもなすべからず。次に錢を奴の如くして、使ひ用ぬる物と知らば、長く貧苦を免るべからず。君の如く、神の如く畏れ尊みて、從へ用ゐる事勿れ。次に恥に臨むといふとも、怒り怨むる事なかれ。次に正直にして約を堅くすべし。この義を守りて利を求めん人は、富の來る事火の乾けるに就き、水の下れるに従ふが如くなるべし。錢積りて盡きざる時は、宴飲聲色を事とせず、居所を飾らず、所願を成ぜざれども、心永へに安く樂しと申しき。抑、人は、所願を成ぜんがために財を求む。錢を財とする事は、願を叶ふるが故なり。所願あれど

も叶へず、錢あれども用ゐざらんは、全く貧者と同じ。何をか樂とせん。この掟は只人間の望を絶ちて、貧を憂ふべからずと聞えたり。欲をなして樂とせんよりは、如かじ財なからんには。癰疽を病む者、水に洗ひて樂とせんよりは、病まざらんには如かじ。こゝに至りては貧富分く所なし。究竟は理即到に等し大欲は無欲に似たり。

狐は人に食ひ付くものなり。堀川殿にて、舍人が寢たる足を狐に食はる。仁和寺にて、夜本寺の前を通る下法師に、狐三つ飛び懸りて食付きければ、刀を抜きてこれを拒ぐ間、狐二疋を突く。一つは突き殺しぬ。二つは遁げぬ。法師はあまた所食はれながら、事故なかりけり。

四條黃門命ぜられて曰く、龍秋は道にとりてはやんごとなきものなり。先日來りて曰く、短慮の至り極めて荒涼の事なれども、横笛の五の穴は聊か訝しき所の侍るか、私かにこれを存ず、其の故は、千の穴は平調、五の穴は下無



調なり。その間に勝絶調を隔てたり。上の穴雙調、次に鳧鐘調をおきて夕の穴黃鐘調なり。その次に鸞鏡調をおきて、中の穴盤涉調、中と六とのあはひに神仙調あり。かやうに間々に皆一律をぬすめるに、五の穴のみ上の間に調子を持たずして、しかも間を配ること等しき故に、その聲不快なり。さればこの穴を吹く時は必ず除く、除けあへぬ時は物にあはず、吹き得る人難し、と申しき。料簡の至り誠に興あり。先達後生を恐るといふ事、この事なり、と侍りき。他日に景茂が申し侍りしは、笙は調べおほせてもちたれば、只吹くばかりなり。笛は吹きながら、息のうちにて且つ調べもて行くものなれば、穴毎に口傳の上に、性骨を加へて心を入るゝ事、五の穴のみに限らず。偏に除くとばかりも定むべからず。悪しく吹けば、いづれの穴も快からず。上手はいづれをも吹き合はす。呂律の物にかなはざるは人の咎なり。器物の失にあらずと申しき。

何事も邊土は卑しく頑なれども、天王寺の舞樂のみ都に恥ぢずといへば、

天王寺の伶人の申し侍りしは、當寺の樂はよく圖を調べ合せて、物の音のめてたく整はり侍る事、外よりも勝れたり。故は、太子の御時の圖、今に侍るを節奏とす、所謂六時堂の前の鐘なり。其の聲黃鐘調の最中なり、寒暑に従ひて上り下りあるべき故に、二月の涅槃會より聖靈會迄の中間を指南とす、秘藏の事なり。此の一調子をもちて、いづれの聲をも整へ侍るなりと申しき。凡そ鐘の聲は黃鐘調なるべし。これ無常の調子、祇園精舎の無常院の聲なり。西園寺の鐘、黃鐘調に鑄らるべしとて、あまたしび鑄替へられけれども、叶はざりけるを、遠國より尋ね出されけり。法金剛院の鐘の聲、又黃鐘調なり。

建治弘安の頃は、祭の日の放免のつけ物に、異様なる紺の布四五端にて馬を造りて、尾髪には燈心をして、蜘蛛の團かきたる水干に著けて歌の心など云ひて渡りしこと、常に見及び侍りしなれども、興ありてしたる心地にてこそ侍りし



かと、老いたる道志共の今日も語り侍るなり。此頃はつけ物年を送りて、過差殊の外になりて、萬の重き物を多くつけて、左右の袖を人に持たせて、自からは鋒なだに持たず息つき苦しむ有様いと見苦し。

竹谷たけのやの乗願房、東二條院へ参られたりけるに、亡者まことじやの追害には何事か勝利多き、と尋ねさせ給ひければ、光明くわうみやうし眞言ごんはういんだらに言寶篋印陀羅尼と申されたりけるを、

弟子ども如何に斯くは申し給ひけるぞ、念佛に勝る事候ふまじとは、など申し給はぬぞと申しければ、我宗なれば左こそ申さまほしかりつれども、正まさしく稱しょう名みやうを追福に修して、巨益こやくあるべしと説ける經文を見及ばれば、何に見えたるぞと、重ねて問はせ給はゞ、如何いか申さんと思ひて、本經ほんけいの確たしかなるにつきて、此の

眞言陀羅尼をば申しつるなりとぞ申されける。  
田鶴たづのおほいどのは、童名たづ君なり、鶴つるを飼ひ給ひける故にと申すは僻事なり。

陰陽師有宗入道、鎌倉より上りて尋れまうて來りしが、先づさし入りて、この庭の徒らに廣き事あさましくあるべからぬ事なり、道を知るものは植うる事を勤む、細道一つ残して、皆畠に作り給へ、と諫め侍りき。誠に少しの地をも徒に置かん事は益なき事なり。食ふ物藥種など植え置くべし。

多おほ久ひさ資すけが申しけるは、通憲入道、舞の手の中に興ある事共を選びて、磯いその禪師と云ひける女に教へて舞はせけり。白しろき水干みづまきに鞘卷さやまきをさしせ、烏帽子うまづかをひき入れたりければ、男舞とぞ云ひける。禪師が娘むすめ靜しづかといひける、此の藝ぎを繼つげり。これ白拍子の根源なり。佛神の本縁を誦ふ。其の後源ごんげんの光行みつゆき、多くの事を作れり。後鳥羽院の御作もあり。龜菊かめきくに教へさせ給ひけるとぞ。

後鳥羽院の御時、信濃しんぬの前司ぜんじ行長ぎやうぢやう稽古ぎんこの譽れありけるが、樂府がふの御論議ごろんぎの番に召されて、七徳の舞を二つ忘れたりければ、五徳の冠者と異名をつきけるを、心憂き事にして、學問を捨て、遁世したりけるを、慈鎮和尚、一藝ある者



をば下部しもべ迄も召し置きて、不便にせさせ給ひければ、此の信濃入道を扶持し給ひけり。此の行長入道平家物語を作りて、生佛といひける盲目に教へて語らせけり。さて山門の事を殊にゆしく書けり。九郎判官の事は委しく知りて書き載せたり。蒲の冠者の事は能く知らざりけるにや、多くの事共を記し洩らせり。武士の弓馬の業は、生佛東國のものにて、武士に問ひ聞きて書かせけり。かの生佛が性つれづれ質つぎの聲を、今の琵琶法師は學びたるなり。

六時禮讃は、法然上人の弟子安樂といひける僧、經文を集めて作りて勤つとめにしけり。其の後太秦うづまさの善觀房といふ僧、節博士ふしはかせを定めて聲しやうみやう明あきらになせり。一念の念佛の最初なり。後嵯峨院の御代より始められり。法事讃も、同じく善觀房始めたるなり。

千本せんぼんの釋迦念佛は文永の頃如輪上人これを始められけり。

善き細工は少し鈍き刀を使ふといふ。妙觀が刀はいたく立たず。

五條の内裏には化物ありけり。藤大納言殿語られ侍りしは、殿上人ども黒戸にて碁をうちけるに、御簾を掲げて見る者あり。誰そと見向きたれば、狐、人のやうについゐて差覗きたるを、あれ狐ととと駭おそまれて、惑ひ遁げにけり。未練の狐化け損じけるにこそ。

關の別當入道は、双無はうむき庖丁はうてうしや者なり。或人の許にて、いみじき鯉こひを出したりければ、みな人別當入道の庖丁を見ばやと思へども、容易くうち出でんも如何と躊躇たためらひけるを、別當入道さる人にて、此の程百日の鯉を切り侍るを、今日缺き侍るべきにあらず、枉かまげて申し受けんとて切られける、いみじくつきんくしく興ありて、人ども思へりけると、或人北山太政入道殿に語り申されたりければ、斯様の事、己は世に煩うるさく覺ゆるなり、切りぬべき人無くば、給たべ、切らんと云ひたらんは猶よかりなん、何條なんてう百日の鯉を切らんぞと宣ひたりし、をかしく覺えしと人の語り給ひける、いとをかしの大方ふるまひて興あるよりも



興なくて安らかなるが勝りたる事なり。賓客まればとの饗應ついでなども、序ついでをかしきやうにとりなしたるも、誠によけれども、唯其の事と無くて取り出でたるいとよし。人に物を取らせたるも、ついでなくて是を奉らんといひたる、誠の志なり。惜むよしして請はれんと思ひ、勝負の負け業にことづけなどしたるむつかし。凡て人は無智無能なるべきものなり。或人の子みまの見様みさまなど悪しからぬが、父の前にて人と物云ふとて、史書の文を引きたりし、賢さかしくは聞えしかども、尊者の前にてはさらずとも覺えしなり。

又或る人の許にて、琵琶法師の物語を聞かんとて、琵琶を召しよせたるに、柱ちゆうの一つ落ちたりしかば、作りて付けよと云ふに、或る男の中に悪しからずと見ゆるが古き柄杓ひさくの柄ありやなどいふを見れば、爪おふを生したり。琵琶など弾くにこそ、盲法師の琵琶、その沙汰にも及ばぬ事なり道に心得たる由にやと傍かたはら痛いたかりき。柄杓の柄は檜物木とかや云ひて、善からぬ物にとぞ或人仰せられし。

若き人は、少しの事も善く見え悪く見ゆるなり。

萬の咎とがあらじと思はゞ、何事にも誠ありて、人を別かず恭しく、詞ことば少なからんには如かじ。男女老少皆左る人こそ善けれども、殊ことごとに若く貌かたちよき人の事美はしきは、忘れ難く思ひつかるゝものなり。萬の咎は馴れたる様に上手めき、所得うけとたる氣色けしきして、人を蔑ないがしろにするにあり。

人の物を問ひたるに、知らずしもあらじ、有りの儘に云はんは痴をこがましとにや、心惑はすやうに返事したる、善らぬ事なり。知りたる事も、猶定かと思ひてや問ふらん。又實まことに知らぬ人もなか無からん。うらゝかにいひ聞かせたらんは、おとなしく聞えなまし。人は未だ聞き及ばぬ事を、我知りたる儘に、さても其の人の事のおさましきなどばかり云ひやりたれば、如何なる事のあるにかと、推し返し問ひにやるこそ心づきなけれ。世に古りぬる事をも、自ら聞き漏らす事もあれば、覺束しづなからぬやうに告げやりたらん、悪しかるべき事かは。斯



様の事は物馴れぬ人のある事なり。

主ある家には、漫なる人、心の儘に入り来る事なし、主なき所には、道行人安りに立ち入り、狐鼻やうのものも、人氣に塞かれれば所得顔に入り住み、木精など云ふ怪しからぬ形も顯はるゝものなり。又鏡には色形なき故に、萬の影來りて映る。鏡に色形あらましかば、映らざらまし。虚空よく物を容る我等が心に念々のほしき儘に來り浮ぶも、心と云ふ物の無きにやあらん。心に主あらましかば、胸の内に若干の事は入り來らざらまし。

丹波に出雲といふ所あり。大社を遷してめでたく造れり。志太の何某とかや知る所なれば秋の頃聖海上人、其の外も人あまた誘ひて、いざ給へ出雲拜みに、かいもちひ召さんとて具しもて行きたるに、各々拜みて由々しく信を起したり。御前なる獅子狛犬、背きて後様に立ちたりければ上人いみじく感じて、あなめでたや、此の獅子の立ちやういと珍し、深き故あらんと涙ぐみて、如何に殿原、殊

勝の事は御覽じ咎めずや、無下なり、と云へば、各々怪しみて、まことに他に異なりけり。都の土産に語らんなど云ふに、上人猶床しがりて、おとなしく物知りぬべき顔したる神官を呼びて、この御社の獅子の立てられやう、定めて習ひある事に侍らん、ちと承らばやと云はれければ、その事に候ふ、さがなき重どもの仕りける、奇怪に候ふ事なりとて、さし寄りて据え直して往にければ、上人の感涙徒になりけり。

柳箱に据うるものは、縦さま横さま、物によるべきにや。巻物などは縦様に置いて、木の間より紙捻を通して結ひつく。硯も縦さまに置きたる、筆轉ばず、よしと、三條右大臣殿仰せられき。勘解由小路の家の人々は、假にも縦様に置かるゝ事なし、必ず横様に据えられ侍りき。

御隨身近友が自讃とて、七箇條書きとゞめたる事あり、皆馬藝、させる事なき事共なり。そのためしを思ひて、自讃の事七つあり。



一、人あまた連れて花見歩きしに、最勝光院の邊にて、男の馬を走らしむるを見て、今一度馬を馳する者ならば、馬倒れて落つべし、暫し見給へとて立ち止まりたるに、又馬を馳す。とゞむる所にて馬を引き倒して、乗れる人泥土の中に轉び入る。その詞の誤らざる事を人皆感ず。

一、當代未だ坊におはしまし、頃、萬里小路殿御所なりしに、堀川大納言殿伺候し給ひし、御曹司へ用ありて参りたりしに、論語の四五六の卷を繰り廣げ給ひて、只今御所にて、紫の朱を奪ふ事を惡むといふ文を御覽せられたき事ありて、御本を御覽ずれども、御覽じ出されぬなり、猶よく、引き見よと仰事にて求むるなりと仰せらるゝに、九の卷のそこゝの程に侍ると申したりしかば、あな嬉しとて持て参らせ給ひき。か程の事は見ども、常の事なれど、昔の人は聊かの事をも、いみじく自讃したるなり。鳥羽院の御歌に、袖と袂と一首の中に悪しかりなんやと、定家卿に尋ね仰せられたるに、秋の野の草

の袂か花薄穂に出て招く袖と見ゆらん、と侍れば、何事か候ふべきと申されたる事も、時にあたりて本歌を覺悟す、道の冥加なり、高運なりなど、ことごとくしく記し置かれ侍るなり。九條相國伊通公の款狀にも、異なる事なき題目をも書き載せて、自讃せられたり。

一、常在光院の撞鐘の銘は、在兼卿の草なり。行房朝臣清書して、型にうつさせんとせしに、奉行の入道かの草をとり出で、見せ侍りしに、花の外に夕をおくれば聲百里に聞ゆ、といふ句あり。陽唐の韻と見ゆるに、百里あまりかと申したりしを、よくぞ見せ奉りける、己れが高名なりとて、筆者の許へ云ひ遣りたるに、誤り侍りけり。數行と直さるべしと返事侍りき。數行も如何なるべきにか、もし數歩の心か、覺束なし。

一、人あまた伴ひて、三塔巡禮の事侍りしに、嵯川の常行堂の中、龍華院と書ける古き額あり。佐理行成の間、疑ひありて、未だ決せずと申し傳へたりと



堂僧ことごとくしく申し侍りしを、行成ならば裏書あるべし、佐理ならば裏書あるべからずといひたりしに、裏は塵積り、蟲の巢にていふせげなるを、よく掃き拭ひておの／＼見侍りしに、行成、位署、名字、年號さだかに見え侍りしかば、人皆興に入る。

一、那蘭陀寺にて、道眼聖談義せしに、八災といふ事を忘れて、誰か覺え給ふと云ひしを、所化皆覺えざりしに、局の内より、これこれにやといひ出しければ、いみじく感じ侍りき。

一、賢助僧正に伴ひて、加持香水を見侍しに、未だ果てぬ程に僧正かへりて侍りしに、陣の外まで僧都見えす。法師どもをかへして求めさするに、同じ様なる大衆多くて、え求め逢はずといひて、いと久しくて出でたりしを、あなわびし、それ求めておはせよと云はれしにかへり入りて頓て具して出でぬ。

一、二月十五日、月あかき夜うち更けて、千本の寺に詣て、後より入りて、

一人顔深く隠して聽聞し侍りしに、優なる女の、姿匂ひ人より異なるが、分け入りて膝に居懸れば、匂なども移るばかりなれば、便あしと思ひてすり退きたるに、猶居寄りて同じ様なれば、立ちぬ。その後ある御所様の古き女房の、そゞろごと云はれし序に、無下に色なき人におはしけりと、見おとし奉る事なんありし。情なしと恨み奉る人なんあると宣ひ出したるに、更にこそ心得侍られと申して止みぬ。此の事後に聞き侍りしは、かの聽聞の夜、御局の内より人の御覽じ知りて、侍らふ女房を作り立て、出し給ひて、便よくば詞などかけんものぞ、其の有様参りて申せ、興あらんとて謀り給ひけるとぞ。

八月十五日、九月十三日は婁宿なり。この宿清明なる故に、月を弄ぶに良夜とす。

信夫の浦の海人のみるめも所狭く、くらぶの山も守る人繁からんに、わりなく通はん心の色こそ、淺からずあはれと思ふふし／＼の、忘れ難き事も多から



め。親同胞許して一向に迎へすまたらん、いと眩かりぬべし。世にあり侘ぶる女の、似げなき老法師、あやしの東人なりとも、賑はしきにつきて、誘ふ水あらばなどいふを、媒人何方も心悪き様に云ひなして、知られず知らぬ人を迎へもて來らんあいなさよ、何事をかうち出づる言の葉にせん。年月のつらさを、分け越し端山なども相語らはんこそ、盡きせぬ言の葉にてもあらめ。凡て他所の人のとりまかなひたらん、うたて心づきなき事多かるべし。よき女ならんにつけても、品下だり醜く年も長けなん男は、斯くあやしき身の爲に、あたら身を徒らになさんやはと、人も心劣りせられ、我身は對ひ居たらんも、影恥しく覺えなん。いとこそあいなからめ。梅の花香しき夜の臘月に佇み、御垣が原の露分け出でん有明の空も、我身さまに忍ばるべくもなからん人は、たゞ色好まざらんには如かじ。

望月の圓かなる事は、暫くも住せず、頓て缺けぬ。心止めぬ人は、一夜の中

にさまで變る様も見えぬにやあらん、病の重るも、住する隙なくして死期すてに近し。されども未だ病急ならず、死に赴かざる程は、常住平生の念に習ひて生の中に多くの事を成じて後、靜かに道を修せんと思ふ程に、病を受けて死門に臨む時所願一事も成ぜず、云ふ甲斐なくて年月の懈怠を悔いて、此の度もし立ちなほりて命全くせば、夜を日につぎて此の事彼の事怠らず成じてんと、願を起すらめど、頓て重りぬれば、我にもあらず取り亂して果てぬ。この類のみこそあらめ、此の事先づ人々急ぎ心に置くべし。所願を成じて後、暇ありて道に向はんとせば、所願盡くべからず。如幻の生の中に何事かなさん。總て所願皆妄想なり、所願心に來らば、安心迷亂すと知りて、一事をもなすべからず。直に萬事を放下して道に向ふ時は、障りなく所作なくて、心身長く靜なり。

永へに違順に使はるゝ事は、偏に苦樂の爲なり。樂といふは好み愛する事なり。これを求むること止む時なし。樂欲する所、一には名なり。名に二種あり、



行跡と才藝との譽れなり。二には色欲、三には味なり。萬の願此の三には如かず。是れ顛倒の相よりおこりて、若干の煩ひあり求めざらんには如かじ。

八つになりし年、父に問ひて云はく、佛は如何なるものにか候ふらんといふ。父が曰く、佛には人のなりたるなりと。又問ふ、人は何として佛にはなり候ふやらんと。父又、佛の教によりてなるなりと答ふ。又問ふ、教へ候ひける佛をば何が教へ候ひけると。又答ふ、それもまた先の佛の教によりて成り給ふなりと。又問ふ、その教へ始め候ひける第一の佛は、如何なる佛にか候ひけるといふ時、父、空よりや降りけん、土よりや湧きけんと言ひて笑ふ。問ひ詰められて得答へずなり侍りつと、諸人に語りて興じき。

### 徒然草終



## それ／＼草序

夢ならぬ晝の夢、現ならぬ夜の現、よしや唯よし幻の宿世ならん。予ある夜の夢に、などか驛路を思ひ出し、身は空蟬の颺々乎として、なく／＼志賀津のふしどを後に、舟に行くとも馬にあゆむとも、空定めなき心の旅、坂は照る／＼鈴鹿は曇りて、杖つき坂の落馬はいとへど、其八橋の五文字はおもひ出でぬにもあらず。星崎の闇は後目にかけて、楽しみ其中にや覺えつゝ、漸浮鳥が原を附に踏みて、いたう降り行く時雨より、空に笠きる富士の山の行方もしらぬ思をかされ、由井が濱邊を鳴き渡る鶴が岡の松の風、梅が香誘ふ星月夜の覺東なき道すがら、其代をかぞへ其世をとふに、三つ九つの讓も、三盃の酒は谷々の茶店に替りて、唯牛飼が爲に雪の日を防ぐと見えたり。はた征伐の一局の碁も、田島の爲に破れて、彼の銀の猫の嘯しあしたのしとれば、いつの日の



捨草ぞや。野鼠の栖と成りて、こゝに盛長かしこに秩父、猛將勇士の字を傳へて、いづれをいづれ□まで來るしなりとも成りぬ。やをらそれとはあらで、晴をあらそふ藪だゝみの塵の粉祝ふ福の神が、千秋をうたふ夜もすがら夢をくするはす是非の胸中にも、さすが頼みなきにしもあらざりけり。尙、心一つのおなひにて、既に繁花の府に入ると覺え侍りしが、げに旅の心にやつかれぬらん。寒熱誘ふ冷風の鼻をつく折ふし、枯尾花を分け出づる老翁の笑然として、我にうらなくとも煎湯の炭つきながら、賤の屋出でざる見ぬ世の俗語いなばきはしる蛋取咄し、おのが猿智恵なにはのよしあし、分あらばこそ老翁述べれば我いさみ、我辯ずれば老翁すゝみ、笑ひ笑ふに、おのづから寒熱や、夢もひとしくさめがてに、老翁扉に立ふさがりて、人ごといはゞ目代をけといふ聲ばかりに失せてけり。しばし茫然として眠る所を見まはせば、正しく武江の市中にして、名は古郷に近く通ふ京橋の邊にぞありける。敢て枕に残るは此一部、拙くもそ

れ、草と願號し、しかも我が筆なりけらし。おもへば此夢去年の霜夜、思へば熱氣さめしは今日如何んぞ。寶永申之元年 指中秋三五の空、江南觀柱坂の散人自ら述べ笑つて又虚々然たりぬ。







地を得たり、尻へこき蟲が尻へも己おのが音ねにして、千秋まじはりの交まじなすも實まことにをかしくこそ侍まじれ。

桃はは仙せん靈れいの不老不死しゆくを祝しゆくするに、大芹おほせりは人を害がいし、芭蕉はは破やぶれ行くに、楠くすのきは鐵石てつせきともなりぬ。

年行かぞの諺ことわざ數かずへつゞけて多おほき中に、既に暮くれ行く年の末すえ、世人よじん取り遣つかりの品しなあらためんと、しかも短みづかき朝あさづく日ひ、身みは鷓鴣せんざいの市中しちゆうの巷やうを、かせにして飛とび走はれば、心こころ體たい疲つかれ寝ねもやらず、ばらくくく鷄どりに、荒玉あらくまの薄霞うすあせづく春はるを迎むかへ、先まづづ大節おほせつの伊勢海老いせえび柎たひ々々を祝いわし、蓬萊山ほうらいさんの木きの實みを摘とみそめ、大服おほぶくに咽のどを潤うるほし、猶なほ壽じゆの言ことの葉はしげき雜煮ざんじゆの餅飽もちあくまで食くらひ、酒肴さかにのみあふれたり、や、身を安やすくして眠ねりなば、病やまもうかるべきに、寶引ほうびきといふもの免ゆるし與あへ、諫いさめずして起おこし

置き、男子によしに玉打たまうちつ事こと教おしへて身を働はたらかしめ、女子によしに遣やり羽は子ごさせて身をあだになさず、七日なな日には雑水ざんすいをもて脾胃ひみを助け、十五日じふごにいたりては左義長さぎやうにいさめ、大綱おほつなをひかせつゝ寸時すんじの光陰くわんいんたゞにはやらず、小豆あづきの粥あじ與あへて腹はらを□になさしめ、すぐまに世よの業わざにうつらせたり。且かつ、盆ぼんは極暑ごくあつに心氣定こころきさだかならぬさへあるに、秋あきもや、陰氣いんきにうつりて、陽氣やうきの失うせなんことを思おもひ、七夕せつしに心を動うごかし、切きり籠かごに陽ひを誘いはせ、踊おどに人氣いんきの勢いきほひを極まめつゝ、雪月せつげつ花郭わかくわ公こう、折々せつせつの風景ふうけいにすがりまりて行く、日夜にちや朝暮あさゆふたゆみなき教おしは、唯ただ無事むじならん諺ことわざにや、一日いちにちの無事むじを慎しんんで、一月いちげつの無事むじを知しり、一年いちねんの無事むじを知らば、正ただに生前せぜんめでたからんか。

雨降あめふり地ちかたまるとなん、唐たうの人ひとは吉事きちじに慎しんみ、凶事きゆうじには樂たのしむとかや。まことに、富人ふじんの筋すぢ貧賤ひんせんの筋すぢとて、いつ迄いつまでも傳つたへありなば、なんぼう恨うらめしくあ



りぬべきに、富貴の輩は明日の變に恐れて卑く慎み、貧賤は明日の變を便にい  
きほひ立て、自ら貧福不二の交をなす事を常とする天の理の分けて尊く侍るな  
り。

下民の樂を思へば、先づ貴人に生れざる故に國廣し。又女に生れざる故に家  
廣し。又坊主にならざる故に人倫廣し。斯くの如く三つの徳を得て、剩へ恥を  
知られば、終に恥もかゝらずとなり。

雁家鴨の姿等しくは生ずれつれども、人家鴨をたすけて、雁はゆるさず、そ  
の罪己が味にかはありぬらん。

世の中は、名に倒ふるゝ人あれば、容に倒ふるゝ人もあり。あるは辯口に倒

ふるゝ人あれば、分別に倒ふるゝ人もあり。一あるは丁子頭の相に倒ふるゝ人あ  
れば、夢に倒ふるゝ人もあり。牛は角に倒ふれて浮鼻づらを貫かれて、蛙は口ゆ  
糸終に蛇の爲に吞まるゝとなり。

新世帯の人、一世を極むるには、犬々三年人一代、人々三年犬一代、此二つの  
語を能く考へ知るべしと傳へし人あり。

生前の安きを願はし、燒失せずして二間に三間の家一軒、死せずして男子一  
人、損失せずして銀一貫目、かくあらまほしきとなり。

誰人の云ひ置きけん。親は苦勞して死し、其子は楽しみて死し、其孫は乞食  
して死すとかや、哀れなり。



天道人を殺さず、果報は寝て待てと云ひ傳へて、渡世を知らず寝て暮らし、終に天に殺され恨むるもの多かりし。眼耳鼻舌身手足の自由、手づまを盡して與へ給ふ。其限りあるまで暇なく、明け暮れ不退に働きなば、稼ぎに追ひつく貧乏なく、天必ず人を殺すまじきとなり。

誰人の作にやありけん。狂歌に「世の中は寝たほど樂は無きものを知らぬ安房が起きて働く」と云ひ捨てし、其の極意の程なほ床しく侍るとぞ。

近江の鯉は淀に出て名あり。千貫の鷹も放さずはとらず。藁屋の雨は出て聞けとかや。良に小國のかたはらにも、自然に器量の性得たるはあれど、繁昌の地を終に知らず、鳥なき里の蝙蝠と呼ばれ、世外に埋もれ行くもの多し。うち

みらくは其親の愚にもあらざらん。

人は三十歳までを盛とかや。義經正成名將數多、女官には清紫の二女、伊勢赤染の類選むに數多、いづれ譽高きは、なべて三十歳前後となり。かくはあれど、不器量を若き故とゆるし、愚智を律義人と名附けゆるす世に、安房の空名とは、かゝる事にかは侍らん。

和人の畫ける唐人の繪は、能く似るといへども、それ／＼の裝束を取り拂ひ見るに、終に和人なり。唐人の畫ける唐人の繪は、裸にして見れども、正しくもとの唐人なり。人の貴賤虚實を見るに、皆かくありやせんと、恥かしき事に侍るなり。



古より、長きものにはまかれ、太きものには吞まるべしといへども、かまど 將軍いふ人、安房のむくろ腹貧乏の瘦我さへ悲しきに、盲目蛇に恐れず、くそむし 糞蟲の高あがり、嗅きもの身しらずして、南風に立ちふさがるもの、下賤に多く聞え侍りぬ。

月夜に釜ぬかれたる顔はあはれに、馬はなしたる顔はあやしからん。

俗語の中に、家は弱くとも主は強かれ、世帯佛法腹念佛、狂人水をこぼさずといふは頼母し。不精者の節句働き、晝は麩此拾うて夜は田を打ち、細工貧乏他だからと成り、隣のぬかたきする人、宵まどひに朝臥せり、腰拔の居はからひ、瘦法師の酢好みするは、覺束なく侍るなり。

新座の穢多は皮をはぎ、馬の目をくじり、或は虱の皮をはぎ、あるは佛の箔をこそげ、一文惜みの百を知らず、芥子を割つて富める人ありといへども、欲の鴨勝をさかれんよりは、酒屋は水を流すべからず。折々酒を流すべしといへり。

穢く働きて、淨く喰ふべしとは、身を灰猫にもて稼ぐとにや。又屏風と商人は直にしては立たずとなん云へるは、謀計重欲なせよとにはあらず、其買の字の上に十一を置きて、賣の文字を能く考へ知るべきとなり。

人を思ふは身を思ふ、聲なうて人をよぶ、藤の森の店屋、十禪寺の嗣はれ、草津の姥が餅は、小利得ながら然も富めり。焙烙の一倍とて、賣りだにすれば利ありといふ商人は燒石に水、日々に貧し。



貧乏に過ぎたるは智恵、安房に過ぎたるは銀、鹿に過ぎたるは角ならんか。

裸にて物は落さず。肌足にて草履は破らず。食うたものは返へらずといふ人あり。

淵の上の雨は、好まぬに溜り、銀が銀を儲けて、安房も賢しきに呼ばれ、賢しきも貧より安房に呼ばるゝとなり。渡世の善悪を論ずるも、少しにても財寶あるうちの思案こそ思案なれ。善は急げ、悪は延べよといふ事あればなり。

蟹は甲に随ひて穴を掘るとかや。大人は大功に換へて、先祖の國をだも、速に他に居を移し給ふ。下賤は動くに足らぬ居所をも、なまなか位牌所なりと覺えて、井の内の蛙大海を知らず、市中に出て、大家の主ともならん志は曾て無く、

終に極貧に躄りて、居所とも跡打鳥に失せ行くは、口惜しき事に侍るなり。

人不如意の時、またの時節あらんと、悟り顔にて家を賣り、職に離るゝ人世に多し。いきほひ既に盡きて、鼠の糞を引く如く、憂き時連るゝ友もなく、廣き世に捨てらるゝとなり。今是を、智者は膝を抱き、勝をくゞりて、假にも職を捨てず。家は朽ち倒るまで、居所を動かさずして、終に浮木の時なん得る事多しといへり。

魚を生け置くに、濁りにあるは、一年待たずして肥えほこり、一清きにあるは、數十年経ても瘦せ衰ふ。人の身も、塵の市中の埃に染み、油火薪の穂先に心を配らば、速く富貴にならんとぞ。



有る袖は振らるゝとて、富貴の人は堪忍強く見えて、堪忍弱し。貧者は堪忍無きに似て、しかも堪忍強し。衣服無く寒けれども堪忍し、雑水のみ喰うて、身は瘦れども堪忍し、屋根漏り壁落つれども堪忍し、身を賣りせつなければども堪忍し、借錢乞の悪口に腹立てども堪忍し、道を行くに足痛めども堪忍し、佛を信じ極樂へ行くとは聞けど堪忍し、斯くの如く貧者は、自然に堪忍を得たりといはん。

下人は、寐た程楽しみは無しとて、一睡の中、貴賤、賢愚、貧福の隔もなく、罪も報も不二の夢、楽しみ其中にやありぬらん。や、曉の鶏鐘に、其思ひ出を浮世にかへし、人倫各々極まるこそをかしけれ。

日終、一石の荷の持賃を得て世渡るもの、我が子だに成長せば、親子して二石の持賃を得て、富貴に送らんものと楽しみ待つうち、漸く其子五斗の荷を

持てば、親既に弱りて五斗さへ力に餘り、其子一石の力にいたれば、親また足立たずなりて、唯昔の力のみ自慢して、終に變らぬ貧苦に果て行くは、一しは哀れに侍るなり。

不仁づけば智恵づく。貧の盗みに戀の歌。獵は鳥が教へるといへども、下司の智恵は後につきて、漸く負うた子に瀬を教へらるゝ身は、しかも獨活の大木、蓮木刀とかや。まことに頑きものに科なしといはん、口惜しとやいはん。

世に藥鏝といふ人、消炭といふ人あり。早請合變替の基を知らず、木に餅をならす、其言葉を用ひ、便にせば、必ず油斷強敵となりて、日暮れて道を急ぐとも叶ふまじきとなり。



燈臺とうだいもと本暗きもの、闇の夜に臆病者、又無分別者むぶんべつとて、人の恐るゝとは實にじつに鬼の來ぬ間に洗濯すべきとなり。

捨てしならぬものには、盲目まうもくに杖、乞食こつじきに菰、陰坊おんぼうに三昧さんまいならんか。

佛神とて盛衰なきにしもあらねば、流行はやり出させ給ふ時、幸きんに祈願きぐわんせば、専らせんら靈驗れいげんあらんとぞ。

或人ある天道に福德を祈りて、其の驗しるし無かりければ、古の天道いにしへと今の世の天道は、各別違ひ侍りといへり。

或人の了簡れうけんに、心にそまぬ方へ、所用ありて行くには、廁かばへこゝろざす思ひに

て行かば、心易からんといへり。

三つ子の手まめに任せ、帳を能く記しるし、文通こまかに細なる人あれば、筆まめなりと云ひ、養生やうじやうを知りて灸する人あれば、灸好すきなりと云ひ、家職かじくに油断ゆだんなき人あれば、氣まめなりと云ひて、其苦勞かつは曾かて察せず、剩おのれへ己が用事もちが迄もて頼むは、胸ふくるゝ事に侍るなり。

人の心の置き所を見るに、其口にあり、鼻にあり、目にあり、耳にあり、額ひたいにあり、頂いたゞきにあり、背せなかにあり、盗ぬすびとといへば手を指出さしたす、されば臍ほそにある人床ゆかしくこそあれ。

人の一句一言いっくいちごんに、三つの輕重けいじやう聞ゆ。たとへば、惡にくしといふ其詞ことばは變からねども、



唯軽く云ふと、重く云ふと、押して云ふにありぬらんか。

物を欲がる人へは、隠し惜み、請けぬ人へは、借り調へても惜まず。人の常皆斯くならんかし。

人の方へ折々音信の志あれば、賣僧者と悪めども、草土産に國傾くとかや。請くる人もかたましきよりましならん。世のわざ皆請けつ施しつするにこそ、自ら中和して、互に調ふ事易しとなり。

目の中へ塵など入りて痛む時、人の目はよくなれ、烏が目はあしくなれと咒へば、必ず痛み止むとかや。身をつめりて他の痛さを知らずや。かはいかはいと烏の鳴くも道理なり。

ある人物語つのでりて相手に向ひ、汝必ず偽いふ事なかれといへば、其人聞きも敢ず、實さへあまりて盡し難きに、何とて偽いふべきやといへり。

世に成就の人は稀なり。愚蒙の人にも一つの益あらば、九つを捨て、其一つをとり用ひなば、親疎朋友の中も偏に無事ならん。門脇の姥にも用あればとなり。

大根は、甘きをもてよしとすれども、吾妻の方には、蕎麥切の爲に辛きをもてよしとせり。己が好む筋より、能きを悪しきに云ひなし、悪しきを能きに云ひなす事、世に多く聞え侍るなり。



鶏にはとりは、人倫に身をまかすといへども、人の愛あいにしも打ち解けず。愛なきとて、さのみ恐るゝにもあらず、世人の交まじはりも斯くあらまほしきとなり。

親しき人、たま〜来て歸るに、泣く程にも思ひ、推して留とめ置きたく侍るも、歸りたる後あとは、あち心やすしと云へる。

好すきの赤烏帽子、上林かんばやしの赤手拭てのこひは可笑しけれども、こゝに貧乏ぼくの木きずき、紙かみこ子こ著きて川へはまりし姿、又瘦子やせこにはすれうらなきの姿、弱よきもの歩あにとられし姿、誠に捨すつる神のあらば、拾ひろふ神もあれかしと云へり。

俄いつ富貴を好む人、願ねがあまたに入いて、其利徳ばかり先さきだて、不成就ふじやうじゆの夕ゆふを忘れ、少すこしの幸さいはひにも、末すえの果福のみ取りこし、今日明日けふあすと待つうち、光陰ひかりかげあだに財寶さいほう

石車いしくるまにかゝりて、終つひに粉になすとかや、より〜諫いさむる人はあれど、更さらに聞き入れずして、唯羽はねを失なふ天狗のごとく、邪智よこしまばかりつゝのりて、日南ひなたに氷こ、いつの間にかは淺間あさましく消え行くとなり。

世よに大氣おほきを起おこして、訟うつたへ願ねがふ人あればこそ、無量むりやうの財寶さいほうもあらはれ、國家こくがの潤うるほひともなれり。かゝる功徳こうとくをも、己おのが方寸はうすんの狭せまきを知らで、廣ひろき恩厚おんこうを還かへつてさける事、愚おろとや云はん、科とがとや云はん。

誓願せいぐわん寺じの場にはへ日毎ひごとに出いて、往來ゆきの人に一錢いちせんづゝ乞こひ請こけ、一刀三禮たうさんらいの佛ぶつを作つくるもの、鶴つるの粟あわの其一錢いちせんを拾ひろうて、恙つがなく渡世とせしながら、終つひに佛も成就じゆじゆなきしむ。人の願ねがも斯ごとくはあらまほしきものとなり。



以上の人の業は習ひがたく、下賤の業は習ひ易し。又上にありて、下の苦勞は察しがたく、上の樂は察し易しとかや。貴賤苦樂ともに、其道々に入らずしては、慈悲もあはれも尊さも、知る事なす事難からんとぞ。

亂世の後必ず豊年なりと云へり。仕官の方々は妻女に別れ、數年戰場にありて、討死病死大にして、尙又出生の子孫をたつ事民も同じ。不増不減とはいへども、晝夜の減少のみ、唯人倫三合の時をさして云ふならんか。

むかしの京は、高位高官の宮女も、煤竹の布子織物の手覆にておはせしとかや。民は八木百錢に一斗の時、雑水喰うて悦びしとなり。

米穀高直なる時節に、必ず下直の米を喰ふべからず、高直なる其能きを

喰ふに益あり。又下直なる時節には、下米の下直なるを喰ふに益ありと云へり。

官に尊くおはします御方とかや。御膳をめさるゝ折ふし、飯臺の内にこぼれ入りたるには、御目もやらせ給はず、疊に落ち散りたるは、是大道なりと仰せられて、拾はせ召させつるとなり。いと有難き事に聞え侍るなり

高き心の高きにありては、自由を得がたし。高きを退き、卑きにあらば、其自由を得ながら、しかも水たまるべしと云へり。

好物とて、飽くまで喰へども、足らざる程に喰うてこそ、尙好物と云はん。

藥喰とて、人に分けぬれば、必ず藥にならじとばかり云ひ傳へて、親しき



友妻子等にも、其匂ばかり嗅がせやりて、唯獨喰ふ。心ある人にあるまじき事にや。同食同服、いづれか腹ふくれざる物ありやと云へり。

豆腐味噌油は、世に生敷物と云ひ傳へて、其まゝ喰ふに、必ず腹中に障り、又其元能く煮て造れる物と覺ゆる人には、生にて喰へども、曾て障らじとなり。

下戸の建てたる蔵なしといへども、初めは人が酒を飲み、半は酒が酒を飲み、後は酒が人を飲む。又死ぞこなひなしといへども、人が薬を呑み、薬が薬を呑み、薬が人を呑む。又貧樂といへども、人が貧になり、貧が貧になり、貧が人をほろぼす。或は實が偽にもなり、非が理の一倍にもなる。されごとが喧嘩にもなり、嫁が姑にもなり、伯父が甥の草刈にもなるとなん。人は盜、火は燒亡用心すべしとなり。

賣買の道を得たる人の物語に、菜種は菜種が相場を持ち、ころびの實は、相場がころびを持つと云へり。一切の木の實に出来不同のあるにやあらんか。

米穀踏み白げるに、油断なく平等に踏めば、米肥えてへらず、油断して不同に踏めば、米瘦せて減少多しといへり。人又身働くものは、息災にして肥えぬ。隙の身は病みやつれて、しかも短命とぞ。

煎餅賣は、自然に煎餅の姿をうつし、花賣は無常の相をあらはし、御子神主は鑽尾を見せ、六尺は鉢巻に情をあづけ、鎧持は髭を是として生前恥なく、息災なるこそをかしけれ。



習ふよりなれよと云ひ傳へて、針醫は皮を隔て、邪氣を知り、大工は壁を隔て、間渡しを知り、指物屋は器物の其程々の鐵鉋の心を知り、屋根屋は竹釘の力を知り、明星が茶屋は諸人の生國を見あかし、海士舟人は水の心を知り、馬士は數多の馬を見知り、子供は習はずして戀を知る。いづれ數ふるにも足らざりけり。

雷は夏鳴り、地震は時知らず動り、牛馬は人倫に身を任すと知ればこそ、さのみしも疑はず、世に初めて及ばず、如何ばかり恐れざらん。皆知ると知らざるとにあればとなり。

雷に臍つかまれと言ひ傳へて、面々其言葉を用ひ、恙なきは尊し。雷落ちる時、必ず臍もと空虚にして、一息切斷する事あり。愚昧の者に對して、大

乗の理は教へ難く、唯方便の實語ならんか。

月遠山の類に遠目をつかふに、必ず臍もと空虚にして、眼もたゆく早く勞るなり。唯月も山も此方へ引き請け見まくほしく侍るとぞ。

古の人、曾て手形證文を知らず、唯一言の契約迄にて、諸事の虚實堅く極めしとかや。いつの代の折よりか、神文に及んでも確ならぬ人もありといへり。

借る時の地藏顔も、返す時には焔魔顔に變じ、貸し借りも遠きを捨て、唯近きのみ專に論ずるは、いつの世の教へにや。口惜しき事に侍るとぞ。



我他、後紐の頃までは、貧福の隔もなく、こよなる伴ひ遊びしも、成長に  
 随ひ、賢愚貧福その功德に素して、雲泥の如く隔て行くこそ口惜しけれ。

偶、道に志の人あれば、愚人必ず他の一寸をのみ咎めて、己が九寸の過失  
 を知らず。唯邪智に任せて、様々嘲るといへども、其九百九十九人の其愚をと  
 らずして、世外に徳を隠す、其手に一人の賢を相手に思ひ、修行せば心廣く、  
 體やすからんものとなり。

文盲の人、讀書する人のほとりにありて、論語讀の論語讀まずならんなど嘲  
 りけるに、讀書の人の狂歌に、「論語讀の論語讀まずは頼母しや、論語讀まず  
 の論語讀まれば」と興じ贈りしとなり。

儒釋もろく學者の中に、遠きをのみ知りて、近きを知らざる人多しとかや。  
 學問は、唯米炊學文に功德ありとなん云へり。

自然に文字世に極り、萬人萬物の假名となりて、世界無盡に通用し、貴くも  
 又儒釋等の諸道、世の諺も是れにあづけ傳へて、ほがらかに其所愚をたすけ、  
 萬代不易の自由自在は、唯此道の徳ならんぞ。

大乘寺の月舟和尚は、白山の麓に入湯の比、路の傍に赤き花見えたり。何ぞ  
 と尋ねられしに、案内の百姓、あれこそふりと云へる花に侍ると云ひければ、  
 弟子達見て、是れは百合といふ物ぞと争ひ笑ひしを、和尚聞きもあへず、此花  
 誠にふりなりとの給ひしとかや。いと殊勝にぞ覺え侍る。



森羅萬像、なべて己に異なれば、互に疑ひ争ふとかや。晝は夜を疑ふやらん。星は螢を疑ふやらん。雲は煙を疑ふやらん。風は息を疑ふやらん。雷は石臼を疑ふやらん。糞は伽羅を疑ふやらん。苦は甘を疑ふやらん。病は藥を疑ふやらん。酌子は定木を疑ふやらん。男は女を疑ふらん。化物は佛を疑ふとなり。

都近き田舎にて、仕事の折々權兵衛が、からうすにて埒あかぬといへば、さればこそと、互に決して云ふ事なし。其故を問ふに、云ふものも知らず、聞くものも知らず。彼の僧都の言の葉一しは貴く侍るなり。

能く寝入りし者、九度まで打たれて起きざるも、十度に及びて眼を覺ますは、是れ九度の功なりと云へり。萬の修行も、世の諫も、皆斯くの道理ならんか。

乾坤にも満ちあまる人倫に、毛髮似たるもなしと疑へども、數多の者、一服一度に胎み、一刹那の拍子もたがはず、一服一度に出生せば、若し似たる人もあらんか。唯似ざるこそまことならん。

鎖はあげ易く、封は切りにくしとかや。本有の實相いと尊き事に侍りぬ。

學者筆道弓馬劍術軍學強力等は、諸藝の最上、しかも實用にして、名は天下に獨歩すといへども、終に一郡の主にもいたらず。唯調法の名のみありて空しく、行は本意なしといへども、めでたき事にもあらざらんか。

劍は、朝敵國賊惡人を治め、六具は、身命の器と頼めども費少し。繪畫墨跡茶入等の高直なるは、唯靜謐の代のためしならんか。



手跡は、筆道くさきのみとりて、能書と見れども、唯己々の自性をあらはし、自然に其風流盡すを實とせんか。

學者は手習なくして、能書多し。不學の輩は、年をかされ學べども、其功より至りがたし。手跡は、唯心の高きに隨ふものならんか。

芭蕉老人の門人、ある夜草庵にあつまり、風雅の高論ありし時、一人さし出で、我れ古書の端々見侍るに、清少納言の草紙を、實に試みず、床しく侍るといふを、翁聞きて、汝試みんことを、切に思はば、其心にて新に趣向あらまほしきといへり。

渡邊の綱は、羅生門にむかふ時、恐ろしくやありけん。禁札は建ててもやらず、

既に退かんとせしに、心の問はば如何答へむとの歌を、急度思ひ出でしより、勇猛鬼神にすぐれて、終に鬼の腕を打ちて歸りしとなり。されば、綱が鬼を斬らず、歌こそ鬼を打ちたりと、其比の世人云ひ合へりとなり。

殿上の沙汰は、和歌にありや。中民の安堵は、連歌にありや。下賤の笑は、俳諧にありや。なべて神樂の道に入れしむるは、有難く覚え侍るなり。

ある人俳諧を好みて、我れ一世のうちに、秀句一つ得て死しなば、如何ばかり本意ならんと云へば、傍の人、我れは秀句を得て、尙無事長命ならん事を願ふなりと云へり。

俳諧はもとより、詩歌の詞も嫌はず、あらゆるの俗語とて用ひずと云ふこ



となく、大道だいどうにして、しかも貧賤ひんせんの哀情を知る。其目足もくそくなりといへども、唯大道なりとばかり覺えて、先達の貞實を、曾て知らぬ俳人世に多く、却て實じつを失ふ人もあらんとぞ。

諸人の物を聽くに、三つありとて、上品じやうばんの人ひとは、神たましひに聽きき、中品ちゆうどんの人ひとは、心に聽きき、下品げほんの人ひとは、耳みみにて聽きくとかや。既に石いしに掘ほるは、萬代ばんだいを經へても變からなず、板いたに書かくは、火かにも燒やけ、雨露うろにも朽くつる。紙かみに書かくは、蟲むしもつづり、朽くち易やすしとなり。

盲目めくらの垣視のぞきとは、愚眼ぐがんの名なにして口惜くしやくしく、盲耳つんぼの立ち聞ききとは、愚智ぐちの名なにして無念むねんなる俗語じやくごなり。

座頭ざとうの坊ぼくの手づから提燈ちていとうを提たげ行くを、人不思議ひとふしぎの事ことに思おもひ、座頭ざとうの坊ぼくの提燈ちていとう無益むやくならんと云いへば、さもあれ、是こゝれは向むかうより來きる人々ひとびとの我われれに行いき當あたるべきやと、偕斯あいつくは侍さむらいると云いへり。可笑わらわしくも心得こころえべき事ことか。

町まちの年寄としよりは、其器量きりやうにあるべけれども、多くは好きすき好みこのみで、必ず出でる杭くわの打うちたるとは知らず、大勢おほぜいの座ざ上じやうに居ゐながら、無別法むべつぽうの底そこ叩たたくこそ氣きの毒どくなれ。

世あつかひに愛すきを數寄すき好このむ人ひと、其思慮しりよふん分別べつべつを極たぎめても、必ずあたり難たし。唯對たいする人ひとの言葉ことばに隨したがひ、其度毎たびごとに應こたじ、挨拶あいさつせば、さのみ力ちからを入いれずして、しかも早はやく得心とくしんせんか。又愛あつかひに出でてんと思おもはば、損失そんしつ厭いとふ事こと勿なれとなれ。

人の老若らうじやくの挨拶あいさつをし侍さむらいるに、四十迄しじゅうしの人ひとを若わかく云いへば、若輩わくぱいにあたりて、賢



き人は悦ばず。又六十餘の人をさすには、其年より二つ三つ若くいふに、必ず悦び深しとなり。

下賤げせんの者病家びやうかに於いての挨拶は、不養生ふじやうせいの人、稀々まれ本復ほんふくせし其例そのれいのみとりて、一筋ひとすぢに悪食あくじよく不養生ふじやうせいを諫いさむる。又善行ぜんぎやう曾かつて知らぬ倭人わいじんの、稀々まれ其夕邊ゆふへ死しの島しまかりしをのみ例ためしに、只管ひたすら悪行あくぎやうを諫いさむる。覺束かくくわなくも犬いぬの蚤のみ、危あやきは鰐わいの口くちならんとぞ。

或人の云ふ、病家に於て、常に出入下手の醫者の、ねんごろに附添つけぞへふは、これ生靈せいりやうの如し。又心悪しき折せから、世事多きは、ひとへに外邪がいじやの如しといへり。

下手へたの醫者いしやの多くの人を殺ころし惱なやませども、罪つみに落ちたる例ためしもなく、恨うらむる人

とて世になきは、是皆醫の聖徳、何ぼう尊たうき事にあらざらんやと云ふ人あり。

夏の咳氣がいきは、憎にくう聞きえて淋しみし。冬の咳氣がいきは。哀あはれに聞きえて姦かんし。田舎いんがの僕べいに藥くすりを煮にじさせ侍まじるに、生姜しやうがなきとて唐辛たうがらしを入れしとなり。一寸いちゆんの蟲むしに五分ごぶんの魂たま入れ過ぎたる類たぐひならんとぞ。

癩おしは出い生のあしたより耳盲みみくらひて、人の言語會げんごて聞きしらぬならんを、唯物ただもの云いはぬものとばかり覺ゆる人ありとなり。

平家へいけ、諷ふう舞まひ、説教せつけう、上瑠璃じやうるり、小歌こた、此音曲このんきよく、六つむつの名目なめくばかりにすがりて、其節々ふしんは争あふといへども、其糟かすを吸すふにあらん。無形無盡むぎやうの中に、唯六つただむつの名目なめくのみに極たぎむるべきや。六つむつを出いでて、など新あらたに名目なめくを立てざらんとぞ。



諸の文句を聞くに、智仁勇靈の武將等、多くは幽靈に作りなして弄びぬ。麟經、頼政、兼平、景清等の輩、草葉の陰にて何ぼう恨めしくあらんとぞ。

森羅萬像極無名にして己が様々の相に隨ひて、本有の名をあらはす。狐は神通を得るといへども、油揚の爲に本性をあらはす。又寂々たる胎子は、初聲に隨ひて、其心をあらはすとなん。

一切の草木花葉、其一本一本に隨ひ、四十八様の色品分つとなり。又白躑躅の花に紅粉をさしおけば、翌年必ず其色を交へ咲くとかや。又實植系の柚の木、年久しく實らざる時、其枝々に柚の實をさしおけば、翌年より必ず實るといへり。

都の八重櫻は、富んで芳し。吉野の一重櫻は、貴くして芳し。

名月は小望三五いざよひとて、三夜に定めて弄ぶは、貴賤濁富の其心々に應ぜんとにや。後の月の十三夜に定めて、閑座の詠は、清貧の爲に應ぜんか。



## それく草中

もののはあはれば、田舎にありて、あひがたきは此生とも、廣きは三千世界とも、更に覺えずして、唯三反田に迷ふにや、地獄も栖とて、そも農談の苦行すら、夜は猪の五穀を喰ふ牙の前に、女は夫に替りて、身は露に置きて叫び明かし、昔は惡鳥の背の下に、姉は弟に替り、日終身をこがして泣き暮らし、其腸を斷つ悲しみは、いづれ榮達の賢察など、及ぶ所にあらず。や、寒天にいたりては、膝にも足らぬ尻たしきの一重のみ背にかけ、宵の程生柴燃やし立て、其火氣を便りに打ち臥し、うき曉の霜には、膝を抱きて明かしかれたるも、げに哀れに、夏は寒苦なしといへども、への字形なる軒續のさしげりさへ危きに、漸ら窓菘つきやう、蚊を妨ぐべき、やをら一つのたくはひも見えはこそ、夕ななく蚊遣ふすべて、更け行く鼯の音、打ち揃ふさへあるに、盤折々、蛭の音は入山の端

## それそれ草

の月に細り、水鶏交へて溢園の音ほとく、咳拂ひなど聞ゆるは、寢苦しき老の寢覺の味氣なくもありやすらんと、いとど哀れに覺え侍るなり。

遠國の者、老若交へ、京うち参りと見えて、祇園町を通り侍りしに、肴焼く嗅の類りなりけるに、若きは八潮の匂こそすれと云へば、老いたるは頼母子の匂こそと云ふもありて、さざめき行くもあはれなり。

田夫山賤は、珍物魚鳥料理の好味を知らず。籠食のみにあはれといへども、しかも身體に風味のいたる所を知り、又灸薬を知らずして、しかも息災長命を知れりと見えたり。

ある人の云く、京に住みて、田舎より縁組する事勿れ、盆正月物参りとて、



漸やうやう大根さいともいも芋早稻もせの初穂はつほなど土産みやげとして、遠慮なく大勢の長逗留、臺所は田舎めきて、富貴には見え侍れども、大酒大食して、唯姦かしましき振舞なりとなり。

大國の市中へ罷りし頃、其國風を視るに、乞食の族やからまれにもたはず。故を問ふに、其國の貧人乞食の爲に、傍に一構の小屋を建て並べ、數千人の者を入れ置き、朝夕の糧を與へたすけ給ひて、男女ともに其業々を相應に與へ勤めさせ、それそれに賣りたてさせ、一人々々の利得年を重て、其積銀の多少に隨ひ、すたれたる地を田畑に開發して、百姓にぞ取立て給ふ。是よりして貧人乞食の族不易の家徳を得て、愁ふる事曾てなく、國守は仁哀の政道より、廣大の五穀納まりつゝ、戸ざさぬ國とか見え侍りぬ。

疊の上に粗俵積み重ねしは、富貴にして塵なし。竈の前に薪の無きは、貧に

して塵多し。

凡夫ぼんぶさかんに神崇りなきとて、市中の富人數百年恙なきほど、金銀を積み重ね、棟は繁榮の湯煙立ち續くといへども、千日に刈る茅も、一つ時に滅ぶとかや。偶、善業の長者も、やゝ三代は過ぎじとなり、田舎には籠食さへ飽くことなく、朝夕の煙だも絶え間がちなるに、數十代居をたがへず、まれく破れ行く人はあれど、萬代不易の田畑に、其字を全く殘せり、賢き人の田舎に隠るは理ならん。

祿の定まりたる人には、その程よりさのみ恐るべからず、いまだ無祿の人に、禮をも厚くすべしとなり。



多き先祖の馬鹿の血脈とて名乗るはなく、偶功ある其一人にすがりて、枝葉  
 無名の數族、故なき財祿を貪るは、口惜しき事ならん。誠に鐵心石肝の武將、  
 天地を貫く萬代の賢徳ぞ、恩報盡すにも足らずとせん。

敵にむつかしき人は、味方にして頼みあり、味方にぬかる人は、敵にしても  
 易しといへり。

悪七兵衛景清と聞けば恐ろしく、唯七兵衛と呼べば心易く覚え、又八藏三助  
 と名乗るは下人の名に極まれども、貴人にして聞く時は、勇に尊く侍るとぞ。

武江の何某岑中松の云く、親の恩盡くすに足らず、深しといへども、古今追  
 腹切りたるものなし。假の友にも、一命を鵝毛より尙軽く、爲に死を易くなす

とかや。賢愚ともに、義の重き事を知るは、是自然の道理ならんとぞ。

茶碗徳利やうのもの、取り落し粉に成りしを、頓て取り集め、繼ぎならべ見  
 る者多し。既に死の極まる時、うろたゆるは斷りならん。

武功の人の云く、戰場喧嘩に及びて、陰囊なだらかにして、常ならば、必ず  
 敵に勝つ事を得ん。若し縮み入りなば、勝つ事難からん。速に退きあらたむる  
 に利あらんとぞ。

人を憤り死するもの、誓に、己三年が内に、必ず取り殺さんといふ。いつの  
 世の人、其年季を定め置きけん。或は相手に向ひ、腹を切りてさすべしなど  
 云ふ輩は、強きに似て弱しと云はん。或は厄病の神にて、敵を取り落して文



して意趣をはらす族は、身を知るに似て、畜類にだも譬ふるに足らずとせん。  
 落人は薄の穂に恐れ、又黒犬に噛まれたるものは、灰汁の垂れ糟にも恐ると  
 かや。いづれ臆病神の所意とはいへども、げに足の裏に疵持ちたる故に、笹原  
 を走らずとかや。川中にて割がるゝ尼も、身を捨てゝこそ浮かむ瀬もあればと  
 なり。

下賤の中に、過去の宿善にや、幸にして武士に取り立てらるゝもの、俄に卑宅  
 を出でかれ、髪は纏持にひとしく、額は唐犬にひとしく、詞はなまる事を専に  
 好み、まだ武士なれぬ丸ぐけの帯刀もさすにはあらで、假にも我こそ侍なりと  
 ひしめき、唯下郎の真似のみして、武士と覺ゆる人ありとかや。下民とても賢き  
 人にはあるまじきものとなり。

まことに到る劍術者は、我れより上手には速に負けて、下手には速に勝つと  
 なり。未練の劍術者は、我より上手にも勝つ事あり。無術の者にも打ち負ける  
 事多しと云へり。烏は鐵砲の前に居ながら、上手を恐れず、下手を恐るとか  
 や。上手に不定の當りなく、下手に無量の當りあり。理を烏はまさしく知ると  
 見えたり。

國守の家中に、もてあましたる馬鹿數多ありしに、一門集り、後日其崇りあ  
 らん事を恐れて、既に捨祿せん事を願ふに、主君聞き給ひて、世に賢士馬鹿の  
 筋とて、各別あるに極まるまじ。其高祿は、全く先祖の武功にありて、今あら  
 たむる理にあらざと仰せられて、再び御沙汰無かりしとなり。士農工商ひとし  
 く瑞喜をなし、尙國守の不易を壽き動く心更になかりしとぞ。



政道正しき國とかや。ある時公事奉行、科人の科ばかりを責め數へて、既に切斷の罪に極まる時、國守聞き給ひて、其科人において、尙又科を責め出せよとには非ず。極惡のものなりとも、若し助くべき一つの便もや得んと、其役人として附け置きたり。唯有罪無罪ともに救ひ助くる政道こそあらまほしけれ。國を治むるには、泥川の如く、底は濁るとも面だに澄みなば、必ず杖を入るべからずと仰せられしとなり。

獸の類、刃物に強くあてられ、或は岸より落ちて、必死と見えけるをも、己となめ盡くして、いつの間にかは、もとの身にして飛び走るは、是れ思慮なき故ならん。人は少しき疵にも、己が小智に迷ひて、其疵よりは氣を深く病みて、終に死する輩もありと聞えぬ。

世の中に、似て似ざるものあるが中に、理直人に愚智、智者に倭人、勇士に臆病者、仁王に角力、佛に天魔、聖人に馬鹿、鱧に蛇、栢にへべ、銀に鉛、花に雪、化物に闇の夜の木陰、つらく、如是相如是性の法界を歎息するに、人として人にあらざる事、恥かしき生前にあらざらんや。

鳥の羽衣は、本有の染色にして、雄ははなやかに出立ち、雌は色なく模様もなきに、人皆是にたがひ、男へは禮をも軽くして、其女へは禮をも重くする奥儀の程こそいぶかしけれ。

好き女の徒、跌はあはれに、悪女の塗木履はにくし。難男の力くらべは悲しく、荒男の透綾足袋は賤しく見ゆ。老人の戀はむさく、半俗の愛は恐ろし。盲目の女の方へ忍ぶは覺束なく、瞽女の男を慕ふは、如何ばかりうるさからん。



世に悪女とて、たゞも居らじとかや、仲人の言葉に任せて、呼び迎へ見れば、女の不具のさま、けうとくは覺えぬれど、程なく離別もなり難く、折と云ひつづ月日たちて、とりなりをも見直し、顔の痘痕にしほこそあれと、手足の不具にもあはれ誘ふて、終に一世のめでたく見ゆ。又破鍋に閉ぢ蓋とて、會ふが幸ひ三條小橋も其流は絶えざりけり。

夫婦いさかひの家は、貧乏神の寄り所とかや。愚昧の女に對して、諍ふ夫は、其女の愚にも全く劣りたりと云はん。又女を尊きものにして、中能くするも憎しと云はん。

密夫の女、極めて重き罪に沈み、夫は飽くまで色を好むといへども、其科無きは、如何なる政道ぞと、女皆恨むるといへども、夫は隠し女の爲にとて、本

妻を捨てずしも悪心なし、女は密夫の爲に謀計を盡し、敵となり、しかも其家を破ること、其例多き故に、罪重く定るにやと、分けてあはれに聞え侍るなり。

色を好むに、娘あり、後家あり、遊女ありて、其自由何の不足もあらざる身の、他の手の花は、美しく見ゆるとかや。密通の男女、心の闇を出かれ、面を隠して尾をあらはす、雉子の頼む木の本に雨漏れて、池の端に置く子供等の虎狼よりも恐ろしやと、顔に泣くも道理なりとなり。

また色さかんなる坊主に、不淨觀をせよと、師の坊しめされければ弟子答へて、我れ不淨觀に入り侍るに隨ふ、其事のみ慕りて、更に忘れ難しと云へり。

油づきたる女、潤しき丸額など交へて、酒盛し侍るに、俗はさもなく、坊主



醫者針醫は、色なく云ひ散らして、常よりは尙各別に浮氣なり。故を聞くに、さればこそ、油塗るべき髪は、情なくも剃り落し、生え黒む髭は、いつしか抜きもやらす、額のあつきは若めくとて、終に剃りはがし、帯は細くしほれたるをよしとして、其さましどけなきこそ、人の好めど、皆色を悪むの仕方なり。連も男女の心は叶はじと覺えて、厭ふ事なき故なりと云へり。さもありぬべきと哀れなり。

都近き人の遠國へ初めて行き、見馴れぬ女のさま見て、さまざま云ひ立て、品悪めども、數日過ぎ行く程こそあれ、其品は更にも云ひ出ず、露ばかりの情さへ捨て難くやありけん。別を惜しみ、古郷へだに歸りかれたるも可笑しきに、縁に觸るれば、唐のものとかや、足を留めて、終に生前鄙び行くもありてあはれなり。

賢女顔にて、まれく年長け行くはあれど、これも盗の晝寢は、あてくやあらん、又富人の嫁となりし女、まだ咲くや咲かずの花の實の、程なく夫に別れて、十方無きあまりにや、おぼる模様の振袖を、あへなく黒染にひるがへすは、なげきの中の又浮氣なり。いつの間にかは焼杭に火がつきて、しめすれば煩ひ、いたはれば家亂れ、酒盛りて尻を切られんよりは、誤つて還俗すゝむるに憚ると勿れとなり。

後家狂ひは、其糟粕といへども、二十餘の女、まだ驚の里なれぬ姿して、徒に行くは、慕ふも實に道理ならん。茲に四十前後の女を分けて、好むもの焼け面火に懲りずとかや。遠き花の香ばかり知りて、近き蕘の香を曾て知らぬ人ならん。鼻につきたる秋風の身にしむさびと云ひながら、うるさく覺えて又あは



れなり。

渡世とせするに、獨ひとりすぎはなり難く、二人ふたりすぎはなりよきと云ひ傳へて、先づ妻ま女めを定むるは理ことわりならん。

嫁よめを極めるには、舅方むこかたの其母りこうの利口にぶよりは鈍く、容かたちも劣りたるを迎へてこそ、自ら愛情あいじやうもありて、一世いせいめでたからんものをとなり。

あるが中に、娘の子は苦にもて育つるといへども、既に人となりては、他家たけに行く人の親の爲に、一世を極むる、それとはしらで、深くいたは勞る嫁は、二六時中じゅうじゅう臨終りんじゅうの夕迄も、附添つきそ頼む身のそれとは更に云はで、姑しゅうとめの十八見ぬ京物語にうちくれ、愛情あいじやうもなく、唯ただ妬みにく悪むは、愚にも淺間しき振舞なり。

女小兒せうにの靜なるは、多くは病身にして短命たんめいなり。邪見じやけんの女、すべて達者たつしやに長命ちやうめい多し。又小兒せうにの悪にくき程あぶれひどく泣くは、息災そくさいにしかも成人早し。是皆邪じや氣を力にするにやあらんとなり。

古いにしへより、若わかき者の心中とて、入黒いれくろ痣を專もつばらに傳へ、半なかばは髪をきり、指を切る事專せんなり。近こころき比いかは如何いかに悟りけん。いつ迄か此世こゝにありて、親兄しんきやう自他うじたの目を忍しのばんよりは、早く出奔しゅつほんし、極樂世界の遊民ゆうみんとなりて、その入功德池くどくちの欄干らんかんに、常樂じやうらくの手をうちかけ、二人ふたりかも寝ふなど、一筋すぢに思おもひ立ちて、死は薄の穂の風に任せ、手枕たまくらの骸あかねは、晒あかさす日の路頭ろとうに出で、すゝんで置きさらす事、多くは、京大阪きやうおの市中いちゆうにありて、しかも先さきを争ふと見えたり。誠まことに親うきあいの浮愛情うきあいじやうにて、漸やうやら人となりしとは、更々思おもひも出でず、限りなき不孝ふこうの最一さいいち子孫朋友しそんにまで、ひとし



く恥を残し、たつきも知らぬ死手の山に、おぼつか 覺束なくも呼子鳥のすごくと行く  
姿は、鬼とや云はん、佛とや云はん。

遊女町へ誘ひ行くに、いづれ目うつり、其品定まらざりしに、こまひとよ 今宵一夜のこ  
とぞ、重ねて其色好まんものと、假の心にあひそめ、またの夜に到りて、又  
それよ是よと選らめども、終に一夜の契に縫りて、曉の憂き別にも懲りず、あ  
ふを嬉しく果てしなく、募り行くこそ面白けれ。

都方の遊女は、されを好むばかりにて、あはれ薄しといへり。越の方の遊女  
は、國絹の染小袖、花鳥風月杜若やらの物繁く散らし、紋は、松竹梅戀の一字ふ  
となくしく、片そぎ袖に赤き覆輪、中込薄き金入の帯、ありこし 蟻腰に引き締め、髪か  
たち化粧様は、さながら八百萬代の風情をうつし、まだ源五兵衛節さへ今様な

りと、や、云ひも馴れず、えじまげんしよじはれそなどと云ふ小歌なり。現なく  
見えながら、仇にも操をたがへず、色香なきに似て、しかも色ある位に到る。  
誠に千歳の楽しみ、殊勝にもあはれにも、神代床しく侍るなり。

いつも月夜に、米の食と云ふ語りひ、ひだる 空腹き時、味なきもの無しと云ふ。働  
き寒き時、穢き物なしと云ふ始末、是等の俗語、此實を知らぬ人の中に、遊女  
ほど綺麗なるは無きと覺えて、折あらば我れ一人の物にして、きこくする 曲水の楽しみ、  
難の風情に居ならばんものとのみ、ちうやしほ 晝夜鹽にて淵を埋め、あけくれおもひ 明暮思を盡くすに、  
家は三毒神の伏屋となり、ふせや 三味線の音は、や、貧乏くと聞え、しきりおひ 頻に追出しの  
耳鐘胸を轟かして、あかしひさき 燈の火先もいとど心細く見え、たきぎ 薪は下水にしたゞり、えびす 鯉雑  
喉の皿も掃溜に埋れ、はきだめうづも 決水槽の犬は、叩くに動かさず。だいどころ 臺所の猫は、鼠にさへあな  
づられ、かんこどり 閑古鳥だに鳴きもやらず。悲しき時の神だたきも、更にしるしなく、



唯偽に身を責められ、梟の背たくみする、猿智恵も五月闇となりて、やゝ立ち  
 縋るべき杖もさへなく、終に生れし時の姿にて、生きながら何處へか、消すが  
 如くとやらん、可笑しけれ。

遊女は、歎きながらも勤め行くは、げに縋り所のある故ならん、歌舞伎子は  
 より所さへなき身の年長け行くまで、憂き曉の鶏鐘を、凌ぎかねつゝ身を隠す  
 べき心もなく、稀の此世を短くも、秋果つる僧都の身の訪ふ人も無く果て行くは、  
 分けてあはれに侍るなり。

人の子も一人二人あるうちにて、鷹が鷹産みしなど云ひ立てられ、成人をた  
 ぐるばかりに寵愛すれども、誰れやらの云ひ侍る如く、人の子は蛙子にて、  
 生れ出づるより、水を得て走る事、親に優りぬれば、至りて龍にもなりぬらん

と、楽しむうちに、程なく前足生ひ出で、尾は二つに分れ、後足となりて、漸く  
 親にひとしく寸地の間、飛び行くこそ可笑しけれ。

子は是親の幽霊ならん。兄弟は是影の病なりと云はん。

子を捨つる藪はあれど、身を捨つる藪は無く、熱火は子に拂ふとかや。我が  
 子のさんぎをふるひ譽る者あり。濁れる己が血脈を下して、親ならぬ親、子な  
 らぬ子、其恥を知らざる事、仰ぎて唾を吐く人なるべしと云へり。

人の親となりて、四大ともに老衰ふに隨ひ、便にも力にも、子より外の楽しみ  
 なく、唯打ち任せて、茶の子ばかり悦ぶはあはれなり、又苦樂も分けぬ子供等  
 の親を威光に心なく衣服を貪り、盆正月のみ待つは哀れなり。子のなき人斯く



あるあはれを知らざるも亦哀れなり。

ある人、子供の師匠を振舞ひけるに、母よ祖母よと替り出で、食酒を飽くまで強ひ侍るに、師迷惑して、食は常にたふべ酒も折々たふべ侍ると云へり。又親の身にては、強ひるも哀れなり。

鴛鴦は殺生にあふ時、雄殺さるれば、雌其場を去らずして共に殺され、雀は子を烏に捕られて、己が害を忘れ、頻に追ひ行く。鼠は子抱いて切に逃げ行く。人の愛情にすぐれて、哀猶深しと云はん。

產生婚禮嘉命、一切の好事を祝する度毎に、唯勇むに任せて多くの魚鳥を殺し、皆己が爲にのみ、飽くまで腹を満たしめ、既に手の裏返す報いを知らで、千歳

の其壽福にとりなす事、誰人の心ぞや、嗚呼佛聖の悲しみ、如何ばかり恐るべき事にあらざらんや。

多くの子を持ちし人、それ／＼に家職を見定め、中に馬鹿あれば、此子坊主にはよしとて、心指もなき出家にぞなし侍る。世に大悟する出家の稀なるは理なり。茲にいづれの寺の好み初めけむ。精進の料理に、或は卵豆腐、或は鳥もどき、或は雉子焼、或は狸汁とて、色品名付けて楽しむは、機嫌戒をたもつかと、一しは哀れに侍るなり。

坊主の坊主くさく、武士の武士くさきは、人の悪めども、親の親くさく、染物の染めくさきは、よしともせり。餅は餅屋をよしとすれども、昆若は昆若屋を用ひずと云へり。



小鳥は巢を放れて、親に餌を報じ、巢は却て親を喰ふ。犬は年経ても主人を忘れず。猫は三日過ぎて主を忘れ、曾て其恩知らずと見ゆたり。

慈悲として、一粒の米穀を施すにも、多くは色好きもの、息災なるもの、喧しきもののみ施せり。茲に子もなく、親類もなく、世に捨てられて、便なく老い行く身の、さすがに死しもやらず、漸う杖を力によるほひながら、門々に立ち暮し、或は親だになき東西知らぬ子供等の、巷に泣き迷ひつかるゝにこそ、慈悲も情もあらまほしく侍るなり。

下民宿世の本末を思ふに、先づ妻女を迎へるに、よしあしの陰聞とて、數日動きあらため、世の一つ此時こそと、後の費もいとほひこそ、過ぐるばかりに調へ、其夜は互に覺束なく、嶋臺の岩尾に、面はゆげに縫りて、萬代の池の龜

を動かし、千歳の鶴には佐々波を選ばせ、西に入る日を見遣り、やゝ三日も過ぎ行く程こそあれ、飭り置くそれくの調度もにげなく、櫛葛籠に取り入れ、頓て常に引き替へ、早や替の膝談合に移り、程なく子持にもなりて、新枕の比折り重ねたる小杉やらのものは、しめしに替はり、伽羅誰袖の簫は昔床しく、唯枕元には糞小便の入物常において、えならぬ匂ばかり穢らはしとも覺えず、下帯ふたの互に厭はず枕をこさし、折々の夫婦いさかひも、多くの子供にせかれ、光陰程なく、既にから鮭に身はからび、目鼻は鹽鳥にひとしく、墜落ちやむ隙もなく、唯私欲火桶ばかりは現にも忘れずと見えながら、我子さへありとも覺えず、孫の名は稀にも當らず、御佛の尊像は、いつの日か見飽き、たゞ片隅に老のみ噛みて、晝夜の差別もさだかならず、遅牛も淀、早牛も淀ながら、死出の旅路も覺束なく、いつしか人知らず果て行くは哀れなる青柿の熟柿弔ふ世の中なり。



我他、諸道の教を明暮聽聞するといへども、九牛が一毛解領はなく、竿の先の鈴とかや、皆聞いたかくにて、犬の年のよる如く、終に空しく暮れ行くは、口惜しき因業なり。

情は重し、相は輕し、武士の覺悟は、日を追ひて強し、下民の覺悟は、日を追うて弱しとなん云へり。

貴人故に善惡の人口あり、下人故に恨の沙汰なし、又上銀故に善惡のあらためあり。儲又下銀故に不通用の論なしと云へり。

龍門の瀧の鯉は、偶龍と變ずる、その一つの鯉を羨みて、九百九十九の鯉身を失ふとなん、又冬日に能登の洲崎を渡る躰船は稀々日和に乗りあふ、その一

艘を羨みて、九十九艘の舟を失ふとなん。又今の世の掛富は、第一の其餘徳を羨みて、四百九十の人々家を失ふとなん哀れなり。

大黒の頭巾は、目の上に覆うて、上見ぬ心を知らしめ、辨才天は外を見ず、内專の姿を現はし、毘沙門は百足の手の隙なき事を見せしめ給ふとなん、げにも尊き慈悲心なり。

金銀財寶は、頭上足下前後左右、世の巷に浮き満ちて、取る人を焦れ待つといへども、唯長者のみ羨むばかりにて、實にすぎはしがる人稀なりとかや。又佛菩薩は、衆生を淨土へ迎へ、安樂ならしめむと、其慈雲大千世界に覆うて、頼む人を待ち給ふといへども、唯五菓百味の飲食のみ羨みて、實に極樂を好く人稀なりとかや。又金銀をも思はず、善惡をも思はず、諸道にも寄らず、唯獨り遊ぶ人も稀なりとなん。



貧者は、無き銀をも取り越しつかふといへども、持つてつかはぬは、辨當持、  
鑓持、銀持なりと云へり。

割符あるが中に、ある座頭の坊、蛤の貝殻一對定め置き、片貝は我が宿に  
残し置き、片貝は懐にして、諸用具取り遣りの割符になせり。是れなん、下仁  
づけば智恵づくくと云ふ事か。

いつくの比よりか、諸職人諸商人、少しの業にも中間といふ事を云ひ  
合して、新職人新商人を、わたくしにかは隙りおさへ、世の家業狭くなす  
もありとかや。不増不減の境に働きながら、自他不二を知らず、斗升の内  
争は、これなん鍵の穴より天を覗く人ならんとぞ。

そ ぐ 草 下

柳は緑花は紅、あら面白と云ふこそあれ、既に千鯉氏神となりて、白根の里  
に金の草鞋を穿き、作佛店にさらされ、巷の地藏酒買をおびやかし、或は下  
帯にしめられて、夢の醒めたる菩薩もあり。蓬がもとの幽霊は坊主を養ひ、或  
は切戸の文珠に龍燈あがれば、近江の磯には油ぼん飛び、河内の國には、姥が  
淵とて姥が腹を立て、彼の近平六は、芳野の狗賓となりて、人をとり喰ふ、立  
山の地獄は、禪定の人迎へば、山谷の穴々より、忽ち猛火を出して、團子屋地  
獄に團子を焼く、世尊、夫人の胎内を出て給へば、木の叉を出づる人もあり。又  
能登の洲崎の荒海には、悪魚の所意とかや、海の面一里ばかりに、まさし石  
垣橋連々、嶮々と天守を築く事年を経ずしもあまた、其折節船幽霊とて、  
獵船とおぼしく、波間に現はれ漕ぎ渡れば、續いて帆立貝数万艘の小船と化し、



八方へ馳せ亂れて後、城郭ともに海底に消えや沈んで、あとかたもなく冷々と澄みきる空、諸人身の毛をたて戦くも愚なり。聞く人は疑ひ、見し人は語るにも恐る。燕が文鱸魚に變じ、蛇が鮪に變じ、棒振虫が蚊に變じ、荒和布が蛭に化し、山の芋が鰻に化し、馬糞が鯨に化し、狐は雉の穴をくぐり、風は棒程に針の穴を通るとかや。良に無盡の變化自由自在の振舞は、是れなん六道四生の諺にや。諸法實相一塵含法界となん。げに心ある人は、さこそ面白からんものを。

偶生れあひたる身の、親に別れ子に別れなば、ともにも行くべき程、其悲しみ果てしなくもありぬべきに、世に旦那寺と名附け定めて、坊主來れば疑はずして死骸を渡しやり、三日の仕あげ七日くとて、坊主の經讀むうちには、一族己が様々、雷光石火など私欲交へて涙隙なく、經既に終りぬれば、一家一族

一同に騒ぎ立て、杓子薄双手にノ、持ち、汁の下油揚の煮加減こそ、白あえに塵落すなど、今迄名残を惜しみし妻女も、膳立の仕方悪しと叱り廻して、酒も中碗汁椀其程々の器にて、三盃と定め強ひて、漸う食の湯終りぬれば、菓子盆の上に一づゝみの布施坊主の前に指し出せば、挨拶もなく懷にして出て行きぬ。良に生死事大かく大切の世の別れに、坊主に經よませ施せば、これにて事済むと極め、坊主も其一包を得て事済むと覺え、互に安堵して過ぎ行く、教の程こそ尊けれ。

大乘の活は、似合易き故か破戒多し。小乗のしふとき勤は、眞似にくき故かあやまり少し。世の諺も、油断して急なるは必ず益なし。急にして静なるは心易し。燒鳥にも織緒といふ事あればとなり。



出山の釋迦佛達磨大師布袋和尚寒山拾得は、分けて諸人恐れ尊むべきに、其聖像を心なく器物にうつして遊び、或は遊興の座の屏風掛物に備へて詠め、或は巾著の根附にして腰に挟むもあり。斯く様々凡聖淨穢にとゞこらず、あまねく衆生に縁あらしむるは、其徳光圓滿の至る所かと、益々尊く侍るなり。

出家の身として、醫藥専ら勤むるは、若し現當二世共に授け救はむとの願にや。實に臨終の加減もあるものならんとぞ。

寺は世外とて、こよなう静ならんと、人の好めども、かたの如く騒がしく暇なし。神主は俗家なれば、姦しからんものを、祭禮の夕より閑古鳥鳴いてあはれなり。

神社佛閣の寄進、又人を取り立つるには、厠へ糞を下したる心にてあらまほしけれ。惜しむとは更に思ひも出でず、しかも後まで心よしと云へり。

ある坊主の云ふ。旦那中より盆正月折々の施物は、全く施物にはあらず。代送る妾者の借屋賃なりとなり。をかしうこそあれ。

五重相傳の旦那長老に向ひ、朝暮すゝめ給ふ念佛の外に、分けてすぐれたる極意侍らん。傳授し給へといへば、長老驚き、如何なれば其疑にやと、様々示されければ、旦那の云く、長老は導師の身として、さのみ念佛し給ふとも、見え給はずと云ひしとなり。

ある老女の、我は草をらみく念佛申し侍るといひけるに、和尚聞き給ひ、



同じくは唯念佛申し、草をうめかしたなり。いと有難き言葉にぞ侍る。

ある者、寺へ行く和尙に向ひて、我が親熱病にて今死せり。臨終の姿も佛體ぶつたいに近く見え侍る。此上の佛果を頼みまゐらするといへば、和尙不思議の事に思はれ、佛に近しとは如何いかにぞと尋ねられければ、其者答へて、死像まさしく不動愛染の力身りきみにひとしく死せりといへり。

片田舎にある人、赤鬼あかおにの像をたて置きて、朝暮拜せり。如何なる趣意しゆいぞと尋ねれば、彼の者答へて、佛の御誓願を聞くに、願ひ頼むに及ばじ。今鬼をだに敬ひ頼みなば、六道ちまたの巷安ちまたからんと云へり。

宗祖しうその滅日めつに精進せぬものありて、ある時講中寄合かうちゆうきあひあひて、不信心ふしんじんの勤沙汰つとめの限

と堅くしめしければ、彼の者答へて、宗祖への精進しやうじんは、千人引の石なり、千人の内二人三人減じて動かぬにもあらぬ、又増せばとて、輕きにもあらず、又二人持の石は、一人減じて動かす事あたはじ。我れ此理りを得てより、宗祖の日はあるにまかせて厭はず、親兄弟の日は精進かたく正しく、恩を報ずるなりと云へり。

佛は慈悲つものりて、衆生しゆじやうの爲に地獄を破り給はず。人の親は愛情あまりて、子の爲に杖を止めずとなり。

或人、己が尊む佛殿へ足指向あしさしけて打ちふしぬ。人難じければ、答へて曰く、前後左右に他の佛ぜんごいまして、不禮ぶらいに足指す方寸地もなし、誠に我佛ばかりは救し給はん物をと、さてかく侍ると云へり。



あはれを知らざるもの公事を好む者、多くは湯室にあり。私欲は老女にありと見えたり。

ある寺の施物に、刀一腰納りしが、老僧達集り居て、銘は兼元なり。いやとよ、祐定なりと、争ひ暫く止まざりけるに、小僧を呼び出して、此銘能く見よとありければ、小僧取りもあへず、是は無銘にこそ侍れと云へば、老僧達寢覺の如く、唯虚々然として居たり。鎖尾くさりたる中心の肌たそがれ過ぐる老の目には、さも見えぬべきとあはれなり。

松嶋の和尚旅の比むかふより貴人とおぼしく見え給うて、數千人袴をねぢり土埃を蹴立て、追々に缺けしたひ、乗物の前後左右に平伏し、只泣くが如くに

尊む、何事にやと和尚近附き見給へば、六條御門跡にて渡らせ給ふ。和尚頓て三拜し退き給ふを、弟子達難じて、大善智識の和尚、何事にか大俗の僧に向ひて拜し給ふは、覺束なしとあれば、されば我長途を來るに、拜するもの稀なり。今全く大俗を取りて拜するにあらず、只斯く衆生縁ある因縁の至る所こそ、偏に尊く覺え侍れとぞ仰せられつるなり。

紅東手繼坊の讚嘆に、佛の願は箴籬、衆生は鯨にして、是非救はんくとし給へども、煩惱の垢じみたる鯨の、唯のりはぐれく、終に三惡道の泥中を住家となして、盡未來浮ぶ川瀬もなき業人なりとなり。

加陽の僧二人同道して、黄檗山に到りて、禪師を拜し、一人の僧、我願はくは、身命を法施せん、會下に恵み給へと云ふ。今一人は、我不丈夫にして覺束



なく侍れども、只禪師の慈悲に縋らんと思ひ立つ。會下に恵み給へと云ふ。禪師座を立ちて、身命を法施する者は留るべし。法に臆病の者は、速に歸るべしと仰せられて、再び拜をも免し給はじとかや云ひ傳へり。

佛在世の糞雜衣は洗ひ給ふに、天人其濁を得て、羽衣を染るは尊し。末世の好衣色衣は、其官職にやより給はんかと頼もし。こゝに不徳の僧にやあらん。袈裟には、錦繡金欄を朝づく日の市中に輝かし、衣の袖べりは、紅紫の蕪を夕の月の巷にはほめかす。是なん阿彌施は錢ほど光るとかや云へるを、頼に悟りけるにやと云へり。

木患は三年磨くに黒く、末世の苦行終し難しと云へ共、今金剛峯寺にいます了雲坊空性道人は正しく勤むに功あればこそ、眞言の奥儀を極め、既に阿字

現じて、晝夜ひとしくあきらけく、法性の窓に大千世界の佛菩薩を迎へて、即心成佛の果に乘じ給ふとなり。

宗門數多あるが中に、彌陀の本願に全く未來を打ち任せ、平生唯喜べくと諫めあふ、鰯の頭も信心がら、蚤の息天にのぼるとなん、まして頼母しき誓願のありがたきにぞ涙こぼるし。

近き頃、貧賤無縁の輩、無常講とて組々を定め、其月番の方へ打ち寄り死にまかなひとて、百日に百杯少し宛のかけ錢を度毎に集め置きて、其中に死の先だつ者あれば、其積錢を以て講中寄り會ひ、野邊送りも不足なき程に取り調へ、忌中も香花絶わせず勤めあふ。其志など親類有縁も及ぶ所に見えず。下賤の人には過ぎたりし覺悟となり。



道頓堀の墓所へ一年に送る死人の數、凡そ一萬人に近く、老若の盡命平均して十八歳三步には過ぎじとなり。人の一代は、二十年の程といふも、若し又かくの事にや。強弱ともに唯長命の人を知て、短命を曾て知らず。既に無常迅速の迎の夕に到りては、百に成る老ぼれもじりごみするこそ可笑しけれ。

禪門の息災過ぎたるは、賤しく見ゆ。多くの子は持ちしかど、悲しくも先だて、今一人二人は残れども、ある甲斐もなき老の身の、持病も折々さし出でつ、憂事のみと語り侍るこそ、あはれにも又しほらしげに聞え侍るなり。

ある禪門の杖の一方には、鰻をつなぎかけ、又一方には數珠をかけ添へ荷ひ行く。此禪門は鰻を荷ふか數珠を荷ふか、其誠の程聞かまほしく侍るとぞ。

老年の研屋玉屋は磨くに艶出でず、大工塗師もろくの職人とても又同じ。老女は綿を摘み、機を織り、絲を組むに艶なくればりもなく、茶酒やうの物もて出るだに、風味甲斐なく侍るとぞ。誠に富貴榮達の家には、男女ともに蝶の振袖花に盛り、家頼のみ事に用ひるは其風味さこそ潤しからん、芳しからんとぞ。

逆も死せん身ならば、吾妻にて死せんこそ好ましかれ。野邊送も唯佛になられたりとはかり、餅酒にもてなされ、一滴歎く氣色もなく、常よりは尙勇ましく、足早やに送り果してさらぬ體、其速かなる事、まさに明鏡の如く、向ふものらうつり、愛執も夢の如く消え失せて、亡者も寄り所なく、唯あなた次第に往生すると見えたり。



死せん身ならば、京こそよけれと云ふ人あり、長き世の別れとて、自他の人に歎き惜しまれ、其家のあらん限り呼び出され、香花をうけ、誠の佛にうやまはるゝは、行末かけて頼母しき事にあらずやと、ひたすら悦ぶ人もあり。

難波の碗久は、川口に遊び居て、あやまりて水の深みへ落ち入り、既に沈みうせんとせしが、折節螢の心なく飛び来るを見て、水中より片手をさしのべ、是螢よといふ聲ばかりを、世の限りとして、終に底の水屑と失せしとなり。

難波の葉蔭賣は、常に酒を好みて、瓢を腰につけつつ、長日等を賣りありきけるが、懐より土の人形二つ取り出し、太郎兵衛新兵衛と名を呼び、酒の相手にして楽しむ、ある人面白き曲者と覚えて、酒飲ませんと呼び入れければ、蔭賣あ

ざ笑うて、我れ汝等を相手にして、楽しむ心曾てなし、こなたの新兵太郎兵衛は、我が心に随ひ來り、我が心に随ひ呑み、我心に随ひ歸るなりと、唯一口に云ひ捨て行きしとなり。

武江の市中に、朋友の情に行く賢狂人あり。ある日朋友集り、汝つづまやかにもなく、人の諫にもつかず、必ず朋友にもうとまれ。世間狭からんと云へば、彼の者暫くありて云ふ、日本橋を渡る人、終日に凡そ十萬人と聞く、其中に知るもの二三人には過ぎじとなり。汝等小理をたてて、無用の舌を動かす事勿れ。今しらざるもの九萬九千九百九十餘人ありと云へり。

古人は徳を慎しんで、餅屋に隠れ、酒屋に隠るゝものありといへども、江南觀桂坂の長三郎は、既に馬士に隠れて、其馬を焚る事、一人の子の如く、我れ瘦



せて馬を肥し、一駄の荷は分けて負ひたすけ、極暑には我が笠を脱ぎて煽ぎ涼しめ、極寒には我が蓑を脱ぎてあたため、夜毎に馬の四足を撫でやすめ、雨漏るゝには伏屋に替りて厩をふせぎ、煩は我が膝を枕に與へ、馬又死すれば、人鞍にひとしく野邊に送り、忌日くもいと懇に弔ひぬ。又米穀の駄荷、我が家に預る夜は、新筵に包み置き、偶にほれ落ちたるは、約に拾ひあげ、其荷主の爲にとて、乞食を待て施せり。或は往交旅人の路頭に、金銀所用具忘れ行くを見附けては、いづこ迄も持ち尋ねて、速に渡すこと幾度といはん、仁哀の品々良數ふるに足らずとせん。天和の頃、終に陽報の名を傳へて死しぬ。

江南したら川のもとに白木の俗人あり。旅するとて、一番鷄鳴く頃飄々と出で行きしに、橋のもとにて、五六歳の小坊主出て笑ひかかりしを、隣家の子供と心得、無氣に抱きあげんとせしに、却て小坊主罵き逃げさまに、淵のたゞ中

へ飛び入りぬ。彼の人も驚き、誰人の子なるぞや、淵の深みへ落ちたりと、呼ぶ聲しきりなるに、人々出會ひ聞きて、それこそ例の化物なりと云へば、さもあらぬかといふばかりにて別れ行きぬ。此人には化物もばかすべき便もなきやと、皆人笑ひあへりとなり。

志賀津の尼は、子どもの旅する毎に、腰の物は、あるが中に能きを指挟み、下帯は新敷を用ふべし。又夕に宿をかりては、先づ廁のある所を見届け、立つべき朝には、跡見よ苛の咒を三遍唱ふべしと云へり。

古き人々の可愛ゆき子には、旅をさせよと云ひ傳へて、旅に出ては、品々辛き事のみかは、宿々にて持ち出づる器具は、膝にも足らぬ漸う五錢七錢の借布團一つなりの斯くはあれど、旅人より旅籠料とて、極めたる外に禮錢出すべし



など云ひもあへぬに、綿の厚き夜著臥具を與へて、寒苦を防ぐに心よし。又油錢とて、緯の志を見すれば、俄に居風呂の下燃し立て、茶は濃く煮て運び、翌日の馬も早く約束し、燈火も魚燈ながら燈心太く、朝はゆるくお立ち、御用あらば起し給へと、様々もてなすこと可笑しくは侍れども、さすがに一夜の馴染とて、名残惜しまぬにもあらず、十宿に漸う二百錢の費にて、其自由をなす事旅に馴れたる人の旅を思ふは、理なり。憂きと云ふは、旅に愚の言葉ならんか。

旅の道すがら、曙の頃、並木の松の間に、茶釜のたぎる音は靜にして勇まし。國さかひの等しからぬは、又覺束なし。

永き日に、出馬して、旅人を待つとて、馬士は軒端に打ちもたれて、鏡を取り出し、我と額を抜き暮らし侍るに、馬も退屈するにや。馬士の方へ面をさし向

け鼻ぶきしげくしけるに、馬士は怒つて、頓て鏡を馬の面へ指し向け、己が面を能く見よと、かどくしくも人馬の差別なき有様は、あはれと云はん、悲しと云はん。

馬士に酒など飲ませなば、心よくも馬の口を能く取りなんものと思ふ人ありて酒飲ませつし、詞やすすくするに、必ずあま口なりと乗り、人の名を縦横車に轟かせ、藪に馬銚、後へも前へも動かず、終に宿の入口にて辛くもつき放して、末々の馬士に迄云ひ傳へて、高駄賃出しながら、腹の立つ事多しと云へり。

兩眼盲たる馬に、座頭の坊を乗せ行くに、其馬士を見れば、是も片眼盲ひたり。三つのもの行くに、只一眼にて足る事、一人兩眼の人、恥かしき事にあらずらんや。



海陸に限らず、急がば廻れ、牛につられて、左せい右せいに身を任せなば、終に善光寺参りすべしと云へり。

道中の駄賃馬、荷鞍うち返す時、必ず心得顔にて飛び落り、腰をうち、或は足踏み違へ、あるは脇差ぬけ出で、いづれにあやまる人多し。功者は只落ちつく迄は、荷鞍を放れず、静にして下りたつとなり。又馬にて川を渡る時は向ふ平地の竹木等、目にかゝるものを定木に見やり、唯操をくづすべからず。又歩行にて渡らば、力に相あふ手ごろの石一つ持ち抱へ渡りなば、足に力添うて流るゝ事あるまじき物となり。

旅男ほどあはれなるはあらじ。東の間とてはかり難き身の、少しの幸にすが

りて、さすが親妻子の名残には、心迄来るしをりながら、必ず幸を得て、いつは歸りあはなんなど、互に千歳の壽深く誓ひて、既に覺束なく別れ行く程こそあれ、泊々寝ぐるしき憂き曉をしのぎかれつゝ、漸う心ざす地にも入り侍るといへども、やをら安堵の心地もなく、唯便のみ求めん事を思ひ、霧を拂ひ星を戴き、夕なく宿に歸れば、情なきにしもあらねど、尙他の交とて親妻子のもてなすには似もやらで、枕甲斐なき寢間に入りて、獨燈をかかげ、是非をこらし、誰教化ともなきに、佛菩薩氏の神を呼び出して、古郷の事とりまじへつゝ、無事幸を深く祈り、折々鳥の足がたの便にあふ心地ぞして、繰り返し巻き返し、人知らぬ哀に袖をしぼり、奥の果にも鬼はあらじとかや、稀々情ある人の言葉に縋りて、親に誓ひ子に誓ひ、親しむ程も時移りて、又も頓て互に別を惜み、やうく古郷に歸りぬれば、一つ家互に逢ふまじき人に逢ふ心地ぞして、勇む中にも泪交へて、越し方行末語りも果てぬに、又旅の用意に心を



ばり、一世限りある身の、いつか安堵の時をも得ず、遂に朽ち行く朽木の身の、  
分けて果敢き營は、旅の世渡る家にこそと、あはれ多く侍る。

東海道の石は、踏むに和かに覚え、他國の石は堅く覚え、又寒天の頃、追分  
より京道の泥中はしのぎ易く、伏見の方へは其寒堪へ難きと云へり。唯踏みこ  
なすと踏みこなれざるの其二つにやあらざらんか。

駕籠かきは、駕籠を相手に不仕合を恨み、船頭は船を相手にいさかひ、釣は  
餌を相手に悪むぞかし。

船頭は涼し、馬士は暑し、駕籠舁は寒し。

同じ貫目の男女を、駕籠に乗せ行くに、男は軽く、女は重しと云へり。さも  
あらんか。

牛は牛連れ、馬は馬連れとて、若き者の懇は、其友どちらあふるるを以て、親  
しみ深きしるしとし、馬士は行き違ふ度毎に、思はず頭を叩きあひ、互に悪口  
して別るゝを、分けて懇のしるしとせり。安しと云はん、哀れと云はん。

衣食住の輕きは、乞食にありとなん。衣は菰一重得ていと安く、食は法界よ  
り日毎に得て、何喰へども痛みなく、住は道の巷に定めて、床とるべき思ひも  
なく、天地に造作すべきたくみもなく、濕にもあたらず、まして名跡の願もな  
く、狐狸を友とすれば、化すべきとも覺えず、師走なければ盆前もなく、火事  
大風夜盜の煩ひもなく、路を行くにも人をよげず、好色なければ腎虚もせず、



もとより地獄極樂の願管てなし、乞食三日勤めて、一生忘れ難しとは、かゝる徳に入るにやあらん。

奥の髭僧は一生名を隠すといへども、終に髭僧の名を傳へ、志賀の丹霞は正に五十年來恙なく、乞食して、志賀に動かぬ名をぞ残せり。又磯邊太夫は、數十年の訟に争ひ負けしより、思慮破れて、日用の乞食富貴なる事を知れりとなり。

疑ふ事ありて、乞食をとらへて、汝は盜ならんといへば、我は乞食なりと云ひ捨て行きしとなり。速にも哀れと云はん。

朝霜を出る乞食の中に、咳拂ひ強くするあり。友の乞食、何とてさは咳くぞ

と咎めければ、されば、頃日の暑や寒やにこそと、一口に云ひ捨て別れ行きぬ。其露の身の消えはやらで、夜半の嵐の吹く甲斐もなく、貴賤の隔てもなき有様は可笑しくも哀れにぞ待る。

生るれば乳がたるとなん。五體不具の族も、巷に立ちて己が因果を述べ聞かせ、其不具を便に世渡る類、天道誠に捨て給はじと、分けて尊く侍るなり。

身體、しかも達者なるもの、何をか聞え入れけん、俄坊主となりて、日終門前に立ちふさがり、鉦打ち叩いて食る。其聲多くは女にひとしく、小兒にも劣りたり。大丈夫の修行はいさ知らず、親妻子をだに養ふ器量は嘗てなく、己が身一つさへ營む業も知らで、淺間しく打ち暮せり、是を道心者と覺えて、ほどこそ人もあれば、世は皆抹香猿が尻は赤いぞかし。



猿廻しは、慇懃に挨拶すれば、慇懃にして早速出で歸る。萬歳は飽く迄しぶとし。

歌舞伎子の幽霊を真似るに、先づ細き竹杖、額には紙をあて、よろほひ出で、幽に聲を出す。其真似るものも、幽霊は斯くあると覚え、見物の人も幽霊は斯くと覚え、皆人面色青々として歸るは、いづれいぶかしく待るなり。

尊き寺は、門から見ゆるとばかり云ひ傳へ、唯装衣服のみに縋りて、多くの盗を知らずして、謀計にあたり、後悔する人多し。其拙き人へは、あけて見れば鳥の糞と云へる、彼の金言を必ずさづくべしと云へり。

手ずさみの遊物あるが中に、博奕ばかりに身をやつして、人倫狭く、居所にありても陰を好み、出生の甲斐もなく、朽ち果つるもの多かりし。正に天地をだに掌にはかる人の心の、唯一錢の争ひに、其極意をあらはす事、如何ばかり口惜しき事にあらざらんや。

盗に財寶とらるゝ人は地獄に落ちて、盗む者は必ず極樂とやらんに到るとなん。若し歎くと喜ぶとにあらざらんか。

盗の道には、繩を張るべしといへども、盗を見付けて、繩をぬふ男、糸で大物引き出す類、必ず始めのささやき、後のどよめきなるべしぞ。

犬は盗を知つて咎むるといへども、いつの頃よりか、盗に限らず、諸人犬の



咎めにあふとなり。犬愚眼になりぬるか、諸人盗になりしか。いづれ覺束なしと云へり。

ある人巾著切といへる盗をとらへ打擲しければ、巾著切の云く、夜に入り大勢家に押し込み、財寶を奪ひ取り、或は藏の後を切り、或は手ごめにして追ひ剥ぎするは、是れ皆盜なり。我渡世は白中に進み出で、一命を輕々と渡し置きて、速に巾著を得るなり。又類族の中に、堅き掟を立て置き、奪ひ請けたる巾著の數違はず、其頭へ持ち出でずして、私欲の族ありぬれば、身を隠さんとする山も赦さず。必死の罪に行ふゆゑ、能く治むる事私なく、全く武の政道にも過ぎたりと語りしとなり。誠に邪氣の中にも正氣あるとは、若し斯かる事にかは。松の煙の蕭風に戸ささぬ代々こそめでたけれ。

衣食住の三つ足るものは、過去の果とも覺えず。たゞ餅の皮をむき、石磨を著にさせよと云ひ暮し、又不足のものは知らぬ未來に預けて、長范があて吞みし、うまい物は宵に喰へとて、尙あだに暮らす聖賢、賢くも述べ給うて、數ふるに足らずといへども、衣は桑子飼ひつけ、綿植えつくる初めより、寒苦を防ぐ迄の其心盡し、食は種おろす朝より、腹を満たしむるまで、幾何の其苦行、住は二葉より幾程の危きを凌ぎ經て、寒暑雨露を防ぐ迄の其功、嗚呼此三つの哀愍つらく思はゞ、二六時中信心歎息すべき事ならん。抑森羅萬像本有の生死好むものなければ、指圖もなく、風の子既に大道仁義自然に起りて石に光あるを寶と名づけ、塵の世の巷に通はせ、家業とて、自らいづれたらずと云ふ事なく、賤しき身も畜生には劣らず、貧しき家も餓鬼には劣らず。苦の世界といへども、地獄の苦にはくらべ難しとかや。貴賤の輕重其程々に素して、其自由かなせば、下賤とて何の不足か侍らん。あなかしこく。



それ草終

月は浮雲の浅き所にありとやらん。道を教ふるの詞は、常々の俗語になん侍りけるか。既に江南乙州子が夢見るところに到りて、夫々草と云へる一書案下に侍りけるを見れば、皆俗語にして、悉く道を教ふるの端たらんにこそ。此書をよく翫ばゞ、今日受用易からんと思ふから、漢書にも、諺に曰くといへる事多く侍りける。又鯉は浅みにありともなん。

于時正徳元年卯歳冬月洛東風羅坊の遊人梅花佛みだり書き續くるものならん。



袖 珍 文 庫 目 録

13	萬葉集上巻	12	修紫田舎源氏二編	11	墨田川梅柳新書合巻	10	平家物語下巻	9	いろは文庫下巻	8	修紫田舎源氏一ノ全四冊	7	平家物語中巻	6	俳諧七部集全	5	平家物語上巻	4	文章軌範全	3	武將感狀記全	2	いろは文庫中巻	1	いろは文庫上巻
		25	誹風やなぎ梅二編	24	聯珠詩格全	23	種三百人一首全	22	そつれれ草全	21	武經七書全	20	善紫田舎源氏四編	19	東海道膝栗毛下巻	18	枕草紙全	17	修紫田舎源氏三編	16	古今集全	15	誹風やなぎ梅一編	14	東海道膝栗毛上巻

明治三十三年十一月十日印刷  
 昭和十三年十二月十五日發行

袖珍文庫正 價金二十五錢  
 東京市神田區佐木町二十一番地 發行者 鈴木種次郎  
 東京市本所區吉岡町十二番地 發行者 山本銀次郎  
 東京市橋區榮地二丁目廿一番地 印刷者 渡邊素一  
 東京市橋區榮地二丁目廿一番地 印刷所 國光印刷株式會社

東京市神田區二教書院  
 電話本局 三三六一番  
 振替東京 四五八〇番



袖珍文庫發賣所

同	同	同	同	同	同	同	東京日本橋	關東	關西	發賣元
同	神田	北	東	前	文	至	林	東京市神田表神保町	大阪市東區北渡邊町	發賣元
堂	上	隆	海	川	林	誠	平	東京堂	杉本書店	
堂	田	館	堂	書	堂	堂	書			
堂	屋			店	堂	堂	店			

大	京	博	久	廣	岡	同	京	名	新
連	城	多	留	島	山	都	都	古	湯
大	日	積	菊	積	山	東	寶	屋	萬
阪	韓	善	竹	善	陽	枝	文	星	松
屋	書	館	書	館	陽	書	文	野	松
號	房	支	店	支	書	房	館	書	堂
		店	店	店	籍			店	
		店	店	社	會				
		店	店	社	社				

◎其他全國各書肆

新アラビヤ物語

文學士 若月紫蘭 共譯 小杉未醒 畫  
帆引徹巖 織田一磨 裝幀

洋裝菊版五百頁餘  
挿畫各種版十三種  
正價金壹圓五拾錢  
郵送料金拾貳錢

大好評

蘇國文豪スチーナンソンの傑作ニユーアラ  
ビヤンナイトの譯を知らざるは讀書子の耻  
辱なり。  
アラビヤンナイトを知つてニユーアラビヤ  
ンナイトを知らざるは讀書子の耻辱なり。

院書教三 (京東替振) 神東京 元兌發  
(番〇八五四)



文學博士 坪井笑語老編  
畫 伯 小杉未醒裝幀

自然  
滑稽

# うしのよだれ

洋装袖珍本  
定價四拾五錢  
郵税六錢

好評



本書は著者が常に經驗若しくは實地に見聞せし生きたる自然の滑稽談を折にふれ時に感じて書置かれし隨筆なり。其綱目實に百餘種、從來ありふれたる滑稽談落語等の比に非ず。一度本書を繙かば諸君自ら其滑稽を目撃するの感あらん。

院書教三 (京東替振) 神東京 元兌發  
番〇八五四 田



261

810



終